

消費の融
通

れ等を別々に消費するよりも一緒にして消費する方が一層大なる享樂を生ずる場合には、其數個の物品の消費は常に調和的消費たるものであつて、而も最も經濟的のものである。最後に(三)吾人は消費の融通力を養はねばならぬ。消費する財の種類が多くなればなるほど、それ等の財の限界効用は一層高くなり、従つて、これ等の消費より生ずる享樂は一層多くなるのである。而已ならず、人は其好みが廣くなればなるに従つて、例へば異郷を旅行する場合に於けるが如く物品の種類が大に變つて來ても、用を辨ずることが一層容易になつて來るのである。一寸した例を擧ぐれば、食料品に就て其嗜好も慾望も餘り變りがなくて略ぼ同一のものを日常消費して居る家庭は、其消費する特定の食料品を購入するに際して常に價格變動の影響を受けなくてはならぬ。然るに嗜好の適變融通を修練して置くこと云ふ場合には、一種の食料品が若し其價格に於て騰貴して來た場合には、其食料品を止めて他種の低廉なる食料品を少しも享樂の程度に減することなくして消費することが出来るのである。若し米國人の如き單に麥粉より製したるパンのみに限らず他の種類の色々なパンを食する嗜好を養つて置くこと

にしたならば、今日に於けるが如く高き費用を支出せずとも、モット廉價に小麥粉パンと同様の慾望充足を得ることの出来る他の種類のパンを消費することが出来るのである。

用途の經
濟

第二、用途を適當にする經濟

以上我々は物品及び勤勞を其最も大なる利益を收め得るやうに使用するを誤れる經濟的缺陷に就て述べ來つたのであるが、併し以上のことが實行せられたる場合に於てすら、之等の物品を用ふる方法に於て尙ほ普通に若干の徒費があるものである。其性質から云つて勿論弊害は甚だ少ないけれども此物品使用上の徒費は或は他の場合に於けるよりも更に多く生ずるかも知れぬと思はれる。

家計

家計の經濟的地位

家計に於ては妻女及び母親は最も重要なる地位を有して居る。恐らくは平均家庭の収入の約四分の三は其支出經濟の上に於て家政の一切を委ねてある婦人の手によりて使用せらるるものである、此點の重大なることは屢々看過せらるるものであつて、殊に米國人は家庭に於ける食膳の方法に費用を徒費するの非難を受けて

食膳の費
用

居る。斯る徒費は(一)比較的滋養の乏しき食品を撰ぶことから、(二)消費者の特別の必要によく適せざる食品を撰ぶことから、(三)購入する凡ての物品の利用と、滋養を生すべき凡ての食品の利用とを誤ることから、(四)食物の拙劣なる料理から、(五)料理に要する燃料を充分に利用するを誤れることから生ずるのである。同様なる徒費が衣服の點に於ても繰返されて居る。或る緻密なる研究者の調査したる所によると、之等の徒費は普通の家庭に於て全収入の十分の一以上に達するこのことである。若し此計算が正確なるものであるならば、此徒費を防止すると、其家庭の収入を作り出して居るものの労働時間を一日に一時間以上減じても享樂上何等の差支を生せず、又は労働時間を増加することなくして従來の通りの働き時間で十分の一以上の享樂を増加することが出来るのは明かである。

〔補論〕 本章に於ては、消費經濟を貯蓄經濟と支出經濟とに分ち、貯蓄と直接の消費との性質を明かにし、浪費と吝嗇とに就いて世人を戒め、更に進んで消費品の撰

擇を如何にすべきか、消費品の用途を如何に鹽梅すべきかを説明し、更に、同胞的共樂、消費の調和、消費の適變の最も經濟的なるを示し、終りに家庭の消費に就て世人に對する訓戒を與へて居る。

思ふに今日經濟學の研究が理論にのみ偏して漸次實際と遠ざからんとする一般的傾向の中に本書に於けるが如く痛切に實際を穿ちて經濟學の原理を現實の生活に突入せしめむとする科學的努力を發見するを得たるは余の欣喜して止まざる所である。經濟學は少數の經濟學者の經濟學となつてはならぬ。ドウしても國民全體の經濟學とならねばならぬ。更に人類全體の感激を受くる經濟學とならねばならぬ。此點に於て余は原著者の努力に對して深き敬意を表するものである。單に本章のみに限らず、各編を通じて之に對する原著者の努力は一貫して居る。本書の大なる價值を有する所以は實に茲に在るのである。部分的の缺陷は決して本書の價值を左右するものではない。

第二部 生産論

第一章 緒論

生産の研究

生産を第二に研究しなくてはならぬ理由 我々は人間の慾望、消費及び需要を以て經濟本論に於ける最初の研究綱目とした、それは之等のものが他の凡ての經濟的現象を起さしむる基であるからである。我々は既に、人間が生産的活動に従事するの理由を了解したるを以て今や論理的順序として人間は如何にして生産の仕事に着手するやに就て研究しなくてはならぬ。我々は既に需要の原因と法則とを研究したるを以て次に供給に關して同様の研究をしなくてはならぬ。於之、我々の茲に研究すべきことは生産(Production)の一般的研究である。

生産の意義

生産とは何ぞや 消費が物質其物の消費でなくして或る形體を有する物質の特種の効用を消費し盡すことを意味すると同様に、生産も又、物質其物を創造するのではなく、効用を創造することを意味するものである。人間は如何にするも物質を創造す

ることは出来ない。即ち農夫でも商人でも既に存在せる地球上の物質に、たつた一つの原子でも造つて加へることは出来ないのである。去りながら兩者共に之を生産者と云ふ、而して又斯く稱することが適當である。然らば之等の生産者は何物を生産するのであるか。此問題を考究すれば、生産者は効用の量を生産するもので、其他何物をも生産するものでないことが明かになつて來るのである。而して如何にして生産者は効用の量を生産するか。それは單に物質を目的に適するやうに配置して生産するのである。ジョン・スチュアート・ミルは、「物質それ自身の有する力と他の自然物の有する力とを利用して、物質を適宜に配置する作業のみが人間の爲し得ることで、之より以上の事は人間には出来ない」と云つて居る。

凡ての生産は根本に於て相同し 或人々は、農夫は工業者よりも一層上の生産者であつて、工業者は商人よりも又一層上の生産者であるを考へて居る、否往時に於ては經濟學者の内にも斯る考を持つて居たものがある位である。併し乍ら充分に考へて見ると、斯る考は間違つて居ることが解る。あらゆる産業者は百性でも、工業者でも、

農工商

商人でも、我々が前に述べて置いた四種の効用の一つ以上を生産するもので、時間と空間とに於ける物質の關係を變へて効用を作り出すのである。農夫は穀粒を土地に蒔いて其位置を變へる。雜草を除いて成長する程の周圍に土を掛けて培ふ。斯ふした有様で自然の物質と自然力との助を藉りて物質の關係と位置とを變ずる結果として吾人の消費すべき穀物の高が殖えるのである。工業者も同様に、物質の斷片の位置を換へて生産物の内外に自然力を利用して人間の必要に應ずることの出来るやうに形を換へる。それと同様に商人は又、物品を必要のない場所から必要の多い場所に運び、若くは同一の場所に、外部の状態の變化が更に大なる時間的効用を生ずるに至るまで、物品を保管するのである。即ち商人も農工業者と同様に事實上効用を生産しつつあるのである。勿論、商人によりて實際に生産せらるる効用が尙ほ現在に於けるよりも一層少なき費用を以て生産し得るは可能のことであると同時に、生産組織の改善によりて更に費用を節約し得べきことも又可能のことである。更に、商人が時々社會的効用の一定量を生産することより農夫が受けるよりも一層大なる報酬を受取ることも有り得べ

き事である併し乍ら、之等のことは凡て、商人が他の農工業者に比して其性質上生産的性質が一層少ないと云ふ普通の概念の理由とはならぬ。農工商の間に於ける唯一の相違は、其生産する効用の種類の上の相違である。最後に、同様の理由で、醫師、教員其他勤勞を用ふる仕事に従事して居る凡このものも亦効用を生産しつつあるから、等しく生産者であることを記憶せねばならぬ。そこで我々は、「生産とは自然物と自然力とに人間の智力及び體力を適用して効用を創造することを云ひ、此人力の適用を稱して勞働と云ふ」と定義することが出来る。

既に財とは何であるか、又經濟財とは何であるかと云ふことは述べたのであるが、茲に我々は、勞働が作り出す効用の量は經濟財であるけれども、併し凡ての經濟財は同一の範圍に於て勞働の結果ではないと云ふ事實に注意しなくてはならぬ。或人が偶然にも金剛石若くは金塊を發見したとする、斯る場合に於ては之等の財が勞働の結果であるとは殆んど云ふことは出来ぬ。併し乍ら斯る稀な場合に於てすら、一の金剛石若くは、一の金塊は之を得るが爲には何等の勞働をも要せないにしても、尙ほ斯る財の

總量から云ふと、勞苦と困難との結果たるべきもので、唯だ金剛石若くは金塊の價值が、普通の場合に、法外なる報酬を表して居ると云ふだけのことであることを記憶せねばならぬ。

茲に富の生産でなくて價值創造の場合の明かなる例がある。例へば土地と云ふものは數世紀以前に於ては極めて僅かなる金額で買ふことが出来たもので、ニューヨーク市、シカゴ市の市街地でも矢張り其通りであつた。併し乍ら今日に於ては土地は甚だ高價なものとなつて居る。之は人間の勞働の結果も少くはないが、併し其大部分は勞働が少しも關係しない所の大なる人口の増加に原因して居るのである。斯の如き價值は個人の勞働の結果にあらずして、社會全體が作り出したものである。此土地の社會的増價を個人に所有することを許すべきものであるか、どうかは後に論ずることとする。茲には只だ斯の如き社會的増價なるものがあることだけを注意すればそれでよい。換言すれば、富の生産なくして價值の創造のみが存する以上の如き事實があることを知つて置けがそれでよいのである。

社會的増價

個人的富 社會的富

個人的の富と社會的の富　個人的見地と社會的見地との間の此區別は、經濟を通じて常に存在するものである。而して富若くは經濟財の觀念を定むる上に於て特に此區別は重要なものである。個人に取りて富である物が社會に取りては富でない物もあり得る。然るに又、社會に取りては富である物も、個人の所有するを得ざるものもあり得るのである。即ち例へば、質權の如きは、それを有する個人に取りては富であるが、併し乍ら之は社會的に云へば富ではない、何となれば其設定せる要求權が消滅しても社會は富みもしなければ貧しくもならぬ、即ち何の影響もないからである。市債、地方債、國債等の債券の場合も之と同一ことである。

屢々看過される生産狀態　屢々看過される生産狀態に關する重要な多くの事實がある。即ち我々は動もすれば、今日に於てすら生産の少なからざる部分は家內的生産であつて、全く市場に供給するを目的としない生産物が餘程澤山あることを看過する傾がある。少くとも米國婦人の半數の勞働は生産者自らの使用に充つべき物品を生産することに費されて居る。

家內的生産

市場生産

更に我々は動もすれば、米國人口の過半が、市場に賣るを目的としないで、家庭の消費に充つる財の大なる額を年々生産して居る事實を看過するの傾がある。野菜、果物、バター、卵、獸肉、魚肉、之等は何人も直に想起することの出来るもの内である。斯る性質のものに就て考へて見ると、一國の年産額を他國のそれに比較し、若くは同一國の年々の生産額を異れる時期に於て比較せむとするには大なる注意を必要とすることが明かである。家内生産は比較的漸次減少するやうになり、之に反して金錢を以て容易に其價値を表はし得る所の市場供給を目的とする物品の生産は年を追ふて重要な域に進みつつあるのである。故は市價を附せられたる物品の明かなる年々の生産高は實際の年生産高よりも遙かに増加しつつあるのである。其結果として、我々は發達を過大視し、甚だしきに至りては、全く何等の發達なきに之を發達として數ふるに至るの傾がある。斯ふ云ふ譯で、若し家庭生活を廢めて下宿生活若くは宿屋生活を爲すものが増加すると、生産の年額は其生活變化の結果として増加したやうに見えて來るのであるが、實際に於ける一國の富及び收入には明かに何等斯の如き増加はないに相

國勢調査の評價

違ないのである。

更に國勢調査の富の評價に對して注意しなくてはならぬことがある。之等の評價は普通に金額を以て表はされて居るのであるが、扱て若し價格の變動を起すべき他の條件にして從來と同様な場合に於て、物品の生産高が増加して來ると、其國の實際の富は増加して居るに拘らず、其物品の價格は下落する。それで例へば若し、綿布の生産高が一の國勢調査の時から次の調査の時までの間に二倍に増加したるものとし、價格は半價に下落したものとすれば、國勢調査に表れたる生産物の總價格は前の調査の總價格と同一であるが、實際に於ては此價値ある物品の量は二倍になつて居ることは明かである。

生産超過と消費不足

生産超過と消費不足 世には一般的生産超過があり得べきものであると云ふ考を持つて居る人々は決して珍しくない。故に一般的生産超過が有り得べきものとして、之を基礎とせる見解を有して居る人々が甚だ多いのも當然のことである。一世紀以前に於ては經濟學者の内にすら斯る誤謬に陥つたものがあつたのである。一般的生産超

過 (General over-production) とは一般に物品の生産が社會の必要以上に生産されることの意味である。深く考へて見ると、斯る觀念は間違つたものであることが直に解るであらうと思ふ。既に研究したるが如く、生産の目的は消費である。明かに、何れの時代に於ても、經濟財が社會一般の合理的慾望を充定する必要以上に生産されたことは決してない。之に反して、一般の目的を充たすに足るだけ充分の經濟財が生産せられたことは決してなくして常に生産は不足の状態に在つたのである。成る程、時には、生産は不規則に増加することもあつて、勞働及び資本が過分に或特種物品の生産に一時的に注入されることはあるが、併し乍ら、凡て一般の人々が衣食住に何不自由なく充分なる慾望充足を爲すことが出来て、更に圖書、繪畫の如き高き生活の要求する物件を充分に享受するに至るまでは、一般的生産超過は現はれて來るものでは決してないのは明かである。財を處分するに殆んど一般的の困難を生ずるが如き場合は、其原因は生産超過 (Over-Production) ではなくして、消費不足 (Under-Consumption) である。世人は財を慾望しても、其時に於て職業の安固を得ないで購買力を缺いて居るな

らば其慾望を充足することは出来ないに相違ない。或種の財が生産費以下に價格を低下するやうに多量に生産された場合に、我々は其財は生産超過であると云ふことは出来る。斯る意味の生産超過は稀なことではない。現代に於ける經濟社會の複雑なる組織に於ては其組織の各部分が常に歩調を整へて活動しないと云ふ事實は、一の大なる不便たるものである。生産者は益其生産物の消費者より時間に於ても距離に於ても遠かつて來る。其結果として最も敏捷なる生産者のみが、其生産物に對する一般慾望の強さがどの位であるか、且つ同業者が如何程の量を市場に供給するであらうかと云ふことに就て、稍々正確に近き計算を爲し得るに過ぎないことになるのである。一度び判斷を誤れば、其特種の産業に於ける生産超過を生じ、僅か數種の産業に於ける生産超過が産業界全體に疑悞の念を傳播するやうになる。すると、之に恐怖して生産を制限する、從つて不意に勞働を閉鎖する、勞働者は職を求めて得る能はさるため購買力を失つて來る、其結果として其方面に於る消費不足が大になつて來る、於之、社會は所謂産業界の恐慌なるものに遭遇するのである。此種の恐慌は十九世紀中に於ては甚

だ規則正しく生じたもので、約二十年毎に大恐慌起り、各十年毎に小なる恐慌が生ずると云ふ有様であつた。

右に述べたる恐慌の原因は、一般に經濟學者の一致する所であが、尙ほ他に二つの原因が提唱されて居る。或學者達は恐慌の根本的原因を富の不公平なる分配に歸して居る。即ち若し賃銀が富の一般的増加に比例して上らないならば賃銀によりて生活して居る消費者の多くは生産品を買ふべき資力が無いと云ふのである。更に他の學者達は恐慌に就て貨幣の状態を非常に重く視て居る、例へば一八九三年の恐慌は或る人々によりて大部分貨幣の紊亂に因るものであると考へられて居る。

生産と犠牲 消費は普通に慾望の充足を伴ふ。生産は一般に犠牲と努力とを必要とする。既に消費を研究する際に述べて置いた通り、生産に要する犠牲と努力とに消費より生ずる慾望充足を平均せしむることが經濟思想の中心的觀念たるものである。多くの労働は労働それ自身が満足となる位に快樂に思はれることあるは事實である。併し乍ら、斯る労働が社會の需要する財を生産するに充分でないならば、それ自身中に

生産と犠牲

労働の目的

消費の節約

財の生産と労働の生産

快樂を含まざる他の労働が生産に加はつて來なくてはならぬ、而して何れに對しても同一の割合にて報酬が支拂はるるものである。併し少し研究して見ると最も多くの場合に於て、愉快は労働其ものよりも寧ろ労働の實際の結果若くは豫期せられたる結果より來るものであることが解るであらう。更に我々が、將來一層大なる生産を爲すの目的を以て、消費のために有する資力を今日に於て節約するのは、現在に於ける可能の享樂を制慾して將來の生産を助成することになるのである。實に、斯る場合に於ては、我々は現在の不足の感を補ふて充分餘りあるべき將來の大なる享樂を得ることを望むのである。思ふに此現在に於ける不足の感は、生産を助成せむとする以上は、我々と離れないもので、又之を忍ばなくてはならぬのである。

財及び勤勞の生産 我々は物質財と勤勞との生産を一緒に取扱ふのであるが、其理由は、之等生産の二形式の間には殆んど根本的の相違がないからである。併し乍ら、物品及び勤勞の生産に用ひられたる人間の努力の割合は、夫れ／＼文明の進歩に従つて異なるものであることは明かである、昔の如く充足すべき慾望が最も直接なるも

のみであつた時には、之が充足には極めて簡單なる勤勞を自らのために爲すに過ぎない。特別の修練を必要とするが如き人の勤勞に對する慾望の起つて來るのは後の時代になつてからのことである。社會の組織は漸を追ふて複雑に進み、而して新しき慾望と、それを充足する資力増加の結果として一般の人々の間に分業を生じ、歌人、詩人、醫師、僧侶及び人の勤勞を生産することに従事する他の階級が生じて來たのである、財物の生産が一層組織的になつて來て、人間の直接の努力を要することが一層少なくなつて來ると、世人の多くは漸次特種の勤勞に對して、其修練と努力とを専門化せしむることを利益とするであらう。

〔補論〕 本章に於ては、生産とは人力を自然界に加へて効用を創造することであつて物質其ものを創造することではないと云ふことを述べ、個人的の富と社會的の富との相違を指摘し、普通に看過される生産状態として家庭消費のために生産せらるる財を示し、進んで生産超過と消費不足、財の生産とを論じて居る。生産を第二に研究し

なくてはならぬ理由として述べて居ることは消費論に於ける消費を第一に研究するの理由と相關聯するものであつて、之は第一部第一章の補論に述べたる如く一顧の價値なきものである。次に醫師、教員等までも生産者と稱し、財の生産と勤勞の生産とを同一に視るのは前に述べたる如く財の意味を非常に廣く解するより生ずる結果であつて、斯る見解の取るに足らざるものなるは智力若くは體力の生産造就が教育、生理、衛生、醫術等の研究問題であつて經濟學の研究問題とすべきものでないのに徴しても明かである。之等を除いて本章の説明は大體に於て適當であると云つてよい。

第二章 生産の要件

三要件 今日行はれて居る生産には三つの必要物がある。之等を生産の三要件と云ふ。之等の内の二つは根本的の要件と稱せられて居る、其理由は第三の要件は之等の二要件より生ずるものであつて、最も古き生産状態にも之等の二要件だけは存在するからである。之等の二要件とは土地(若くは自然)と勞働との二つである。之等二要件の

生産の三要件

土地と勞働

資本

内で土地は受動的のもので労働は能動的のものであることを注意しなくてはならぬ。換言すれば初めに労働が自然の上に働いて富を生産するのである。此自然の上に働く労働の作用より生じたる労働の結果たる即ち生産物の消費を節して資本と云ふものが出来て来る、故に我々は此資本を稱して補助的要件若くは派生的要件と云ふのである。即ち資本は自然と労働との補助的のものであつて、之等の二要件より生じたものである。

第一節 自然若くは土地

自然の意

其意義

我々が謂ふ所の自然(Nature)なる語には生産に利用する凡ての自然力、

自然力、
自然物

即ち風の力、水の運動、重力、固着力等と共に自然そのものが直接に供給する凡ての物質即ち自然物を包含するのである。之等の物質及び力の内の或ものは其供給量が無限である、故に之等は自由財である。経済學に於ては自然と云ふ語の代りに土地(Land)と語を用ゆるのが普通である。それは凡ての自然の賜物の内で経済學に於て

自然の代
表物

主として我々の論せねばならぬのは土地であるからである。併し乍ら、此用語としての土地は我々が上に與へた如き甚だ廣き意義を有するものであることを記憶せねばならぬ。意味の紛はしくなるを避けるために或る學者は土地を廣き意味を云ひ現す場合には自然の代表物(Natural agents)なる名稱を用ひて居る。

生産と土
地

生産に對する土地の作用

生産に對する土地の作用を分析すれば、其作用は唯一

のものでも單純なものでなくして、普通に三つの異なる役目を勤むるものである。先

づ(一)立場を與へる。即ち、人間に其立つ場所を供し、人間は其上に靜止し動作して生

産方法を行ふのである。而已ならず、人間をして土地其ものに伴ふ自然力を利用せし

むるのである。市街地に於ける場合の如く一寸した面積が屢々大なる價値の對象物た

ることがある。絶えず人口の増加する大都市に於ては土地が勤める此第一の役目は漸

次甚だ重要なものとなるのである。次に(二)植物の生育に必要な養分を供給する。即

ち之あるが故に農耕は可能となるのである。我々は土地の有する此力を稱して産出力

と云ふ。最後に(三)土地は其内部に、石炭、瓦斯、石油、鐵、金、銀の如き自然の産物

を包容して居る。人間は之等の自然的財寶を創造することも出来ねば、之等の構成に就いて自然を指導することも出来ない。或國民の中には之等を個人に所有せしむることは不公平であると云ふ者から之等を共有資産として取扱ひ、地代若くは探掘料を徴して個人に發掘せしむることとして居る。之は概して一般に歐羅巴大陸に今日行はれて居るのであるが、個人の所有權を最も廣く認むる英國の法律に於ては、土地の表面を所有して居るものは下は地核に達し上は空中に至るまで所有權を有するものであると云ふ主義を古き以前より確立して居る。

收穫遞減の法則 經濟學に於て最も重要な法則は、土地若くは其他の自然に勞働及び資本を投資する結果を明かにする法則である。此法則は收穫遞減の法則 (Law of Diminishing Return) と稱せらるるもので、之は深く考究して置くの値がある。

何れの耕作者も、其土地に加へたる勞働、資本より出來得る限り多くの收穫を得ようと望むのは當然の事である。併し乍ら此法則によりて、收穫を得る程度に制限があつて、最早之れ以上費用を加へても利益を生じないと云ふ限界がある。何故に斯る制限

收穫遞減の法則

があるのか、且つ如何にして其限界が定まるのか。以下之に就て研究することとする。先づ農夫が一町歩の土地に馬鈴薯を耕作せむとする場合を假定すると、其土地は、縦令、其耕し方が亂雑であつても、肥料を施さぬにしても、蔓草生ひて荒れ果つるやうに手入を怠るにしても、幾分か尙ほ收穫を生ずるであらう。而して農夫は更に勞働と資本とを加へるならば、更に收穫を大にし、若し價格が相當に高ければ增收高によりて充分に投したる費用を償ふことが出来ることを理解するであらう。土地の能力に關する此農夫の理解を更に我々が深く立ち入つて研究して見ると凡そ次の計算の如きもを得るのである。

投資高	總收穫見積	投資一圓當り平均收穫
一圓	一〇〇貫	一〇〇貫
一五圓	一六五貫	一一〇貫
二〇圓	二〇〇貫	一〇〇貫
二五圓	二二五貫	九〇貫

三	〇	二	四	〇	八
五	〃	二	四	五	〃
〃	〃	〃	〃	〃	七
〃	〃	〃	〃	〃	〃

先づ斯ふ云ふ風である。さて之等の數字を調べて見ると、五圓の投資を倍加して十圓とした場合は其收穫は倍以上に達して居る。而して以下同様に生産高の増加は費用の増加に對しての比例以上に上つて居ることが解る。且つ又、右に掲けたる各の場合に於て生産高は皆増加して居る。併し乍ら、注意を要するは、費用が十五圓から二十圓に増加した時即ち費用が三分の一を増加した時には生産高は百六十五貫から二百貫に増加し僅かに五分の一と少し計りの増加になつて來て居る。同様に、それ以下の場合に於ては費用が四分の一増加して收穫が單に八分の一増加して居ると云ふ有様で、以下同様に漸く收穫の割合を減して居るのである。換言すれば、或點までは投資高の増加は收穫高の増加に比例し若しくは比例以上の收穫増加となるが、其點に達した後に於ては更に投資額を増加するも其收穫は割合を減して來るのである。斯ふ云ふ事實が若し無いものとすれば、農夫は一町歩の耕地に無制限に資本と勞働とを加へて有

利に耕作することが出来るのであるが、農夫が其有利に費用を加へる高に斯の如く如何なる場合に於ても嚴格なる制限があると云ふ事實は、土地に勞働と資本とを加へるに當りて收穫遞減の點が存在することを充分に證據立てるものである。

農夫が必ずしも、生産高が比較的に遞減し始むる一點に於て的確に土地に加ふる費用の増加を停止するものであるまいと云ふことは一寸考へて見ても解る。其加へる費用が有利なる限度に在りや否やの斷定は生産物の價格の如何によりて定まるべきものであるが、勿論其價格の高低は耕作中には確實に知ることは出来ない。斯くて、馬鈴薯一貫目が十錢の價格である場合に於ては、前の計算に於ける第二、第三、第四の場合を除き農夫は絶対に損失を生ずることとなり、第三の場合に於てのみ剩餘を生ずることとなる。若し一貫目の價格が九錢となれば全く耕作して收支償はぬことになる。然るに一貫目の價格が五十錢となれば、一町歩の耕地に費用を三十圓まで加へても收支が立つのである、何となれば二十五圓から三十圓に増加した場合の増加費用五圓から十五貫目の收穫を生じ、此十五貫目は七圓五十錢の價格があるから投資額よりも二

圓五十錢だけ多いことなるからである。更に價格が騰貴すれば、其耕作に更に多くの勞働と資本とを投じて利益を生ずることとなる。而して其投資額の如何は前の表に示したる生産物の比較的收穫が一の點を越えて遞減する速度如何によりて定まるものである、而して上に假定した場合に於て、收穫遞減の點が有利なる投資の止まるべき點と一致する價格は十錢から十二錢までの間に四つあるのみである(前表の各投資額に對する投資額一圓當りの平均收穫高欄を見よ、而して一圓當り收穫高の八貫、十貫、十一貫、十貫、九貫等を夫れく見方を換へて、一貫に付八錢、十錢、十一錢、十錢、九錢等の價格と見よ、然らば之等の價格の内、投資額若くは投資額以上の收入を得べき價格は十錢、十一錢、十錢の三つより外にはないか、之に十二錢を加へて十錢から十二錢まで四つの價格となる。而して收穫遞減の起點は十五圓の投資とそれ以上の投資との境界線を超える一點である、何となれば十五圓を投資したる場合の一圓に付十一貫の收穫が最大の收穫高であるから十五圓より一厘たりとも多く投資すれば最早一圓當り其收穫高は十一貫より減じ初むるからである。而して一貫の價格が十錢の

場合には最大の收穫を得る十五圓の投資額に對して $165 \times 10 = Y16.5$ 故に $16.5 - 15 = Y1.5$ の利益があるが、併し二十圓の投資に對しては $200 \times 10 = Y20$ 。然るに十五圓の投資に對して既に十六圓五十錢取れるのであるから、 $20 - 16.5 = Y3.5$ の增收に過ぎぬ、故に十五圓の投資に加へた五圓の投資額には不足する、従つて有利なる投資の止まる點は右の收穫遞減の點と一致する。同様に十一錢の價格の場合は $200 \times 11 = 165 \times 11 = Y3.85$ であるから矢張り増加したる投資額五圓に足らぬ、故に之も右の點と一致する。同様に十二錢の場合は $200 \times 12 = 165 \times 12 = Y4.2$ であるから之も右の點と一致する。故に費用が増したる場合に收穫が減ずるには二つの方面があると云ふことが出来る。即ち生産物の量の上より見たる收穫遞減と、生産物の價格の上より見たる收穫遞減である。第二のもの即ち價格の上より見たる收穫遞減が、勿論、農夫に取りては損益を決するのである。併し生産物の價格にて現はされたる收穫遞減は生産物の量にて現はされたる收穫遞減に基礎を有するものである。

更に特別の注意を要する點がある。法則の性質を充分に了解せざるが爲め、人口

が増加するに従て土地から食料品を得ることが漸次困難になつて來ると云ふ結論をなす人々があるのである。併し之は社會に於ける歴史の事實に一致せざるのみならず。又此法則を充分に闡明する法則其ものとも一致しないのである。若し收穫遞減の限界が年々代々何處に於ても同一の點に止るものとすれば此結論は正當なものであるが、併し斯る前提は何人も眞ではないことを知つて居る。農業の技術は耕作の手段方法を進める所の發明發見の結果として絶えず改良されて居る、而して改良毎に費用を増加することなくして收穫を増加することが出来るやうになる。換言すれば改良毎に收穫遞減の限界は次第に前方に進むのである。乍併此法則の作用は今日と雖も固より免るることは出来ない。併へは一町歩の土地に對して投ずる勞働と資本との量を漸次に増加する場合に收穫の割合が減少し初むる限界は今尙存在して居るのである。されど今日に於ては此限界に以前に於けるが如く速に達することが無いのである。

そこで以上論じ來りたる收穫遞減の法則を的確に言ひ現はせば次の通りである。一定の時に於て土地に對して勞働と資本とを投ずるに當り、或限度を超ゆれば、收穫が

比較的減少するに至るべき限界がある。之を明にするのが所謂收穫遞減の法則である。

前の例には勞働と資本とを農業に加ふる場合を掲げたのであるが、併し乍ら、此法則は等しく鑛業、工業及び商業の場合に於て土地に勞働と資本とを投ずる場合にも眞理である。只だ唯一の相異なる點は、之等の産業に於ては遞減の限界に達する前に土地の單位面積、例へば一町歩の面積に投ずる勞働及び資本の高が農業に於けるよりも一層多いと云ふだけである即ち之等の産業は農業よりも多くの勞働と資本とを土地の單位面積に投資するを要するもので、従つて遞減の限界には農業に於けるが如く速に達しないのである。

收穫遞減の法則を尙ほ他の見地から觀察することが出来る。例へば土地の面積を單位とし之に加ふる勞働及び資本の高を漸次連續的に増加するものと想像する代りに、農夫を一單位と見て之に耕作すべき土地、勞働、資本の高を漸次連續的に増加して考へることが出来る。此場合に於ても最初は收穫を遞増し次に遞減することを知らること

が出来る。尙ほ更に他の見地よりして、観察することが出来る、それには異りたる産業の種類を比較して一の観察點に合せしむることが重要である。

第二節 勞働

勞働の定義

定義 生産の根本的要件の第二は勞働 (Labor) である。勞働は効用を創造する目的を以て行ふ所の人間の智力的及體力的の努力である。

普通に智力的勞働を體力的勞働より區別して分類するのであるが、此區別をなすに當り重要なものは、最も純粹なる智力的勞働と最も純粹なる體力的勞働との間には常に兩者の混合したるものがあると云ふことを記憶せねばならぬことである。即ち哲學者と雖も其思想を世界に傳へるがためには手と舌とを働かせねばならぬ、溝堀工夫と雖も智識を用ひずしては決して仕事をする事は出来ないのである。

我々は、勞働其ものは決して我々の目的ではなくして、慾望充足の目的を達すべき手段に過ぎざるものであることを忘れてはならぬ。此事を堅く心に持つて考へて見る

智力的勞働體力的勞働

と若し人間の享樂を増加することがないならば勞働の増進は社會に希望すべきものではないことを容易に了解し得るであらう。窓硝子を破壊すれば之を換へるために勞働を要するのであるが、併し乍ら其勞働の結果は人間の享樂を増加しない。然るに勞働を節約し得る考案若くは發明は、縦令個人としての勞働者に不利益の地位を與ふることありとするも、社會全體から云ふと利益である、何となれば前と同一の努力によりて一層大なる享樂を得ることが出来からである。

勞働の供給

勞働の供給 勞働に關して最も重要な問題は其供給を左右する條件に就ての問題である。然らば、勞働の供給とは何であるか。之は決して單に勞働者の數にのみ關するものではない、何となれば、一國に於ける百人の勞働者は他國に於る百人の勞働者が生産に供する勞働よりも一層多くの勞働を供することが屢々あるからである。之を分析すれば勞働の供給を決定する主なる要件を二つとすることが出来る、即ち

- 一、勞働の能率
- 二、勞働の數量

労働の能率

である。

順次之を説明すれば、労働の能率は先づ(一)労働者自身の能率によりて定まるものである、即ち労働者の智力的、體力的、道德的特性によりて定まるものである。節制、確實、熟練、敏活、鋭悟、常識、之等の凡ての優れたる性質は労働者の能率を組み立つる部分で、従て又労働の能率を組み立つる部分である。之等の性質を養成するには、労働者が教育せらるる場合及び労働に従事する場合の物質的及び社會的の周圍が最も大切なものである。

労働の能率を左右する第二の力は(二)労働の組織及び指導の状態如何に在るのである。之は後に別々に多少詳しく論ずるから、茲には只だ、各労働者を夫れ々最も適したる仕事に配置し間斷なく労働せしむるやうに充分注意して組織を立て之を指導することになれば、之によりて労働は甚だしく能率を増すものであると云ふことのみを注意して置くに止める。

労働の数量

労働の供給に關する第二の要件は労働の數量である。之は部分的に(一)労働者が働く

時間の總計によりて定まるものである。此労働時間の總計は労働時間の長短、一年中の休日の多少によりて異なるは勿論である。一日十時間の労働は、其能率が長時間労働のために遞減せざる以上は、一日八時間の労働よりも労働の量は一層大なるものであるのは明かで、従て労働の供給を更に大ならしむるものである。

人口の増加

労働の供給は他の條件にして變せざる以上、(二)労働者の數を當然増

加すべき人口の増加によりて増加することは疑なきことである。元來人口の増加なるものは食物を得る點に於て制限を受くる外は全く何等の制限なしに進むものである。

人口の増加

有史以來飢餓點(Starvation Point)即ち食物の量が全人口に對して不足する點まで人口が増加した國の實際の例は幾つもある。此事實からして、此人口過剰の現象は過去に於けるが如く將來に於ても絶えず繰返さるるに相違ないこと云ふ恐怖を生じたのである。斯る恐怖心を有する人々は動もすれば、夫の英國の經濟學者マルサスの唱へたる所謂人口論を主張するのである。マルサスの人口論によれば、人口は其増加を防遏しないならば幾何的級數を以て増殖する傾がある。然るに食物の増加は最もよく増加す

マルサスの人口論

るとして算術的級數を以て増加するに過ぎない。其結果として若し人口の増加に何等かの防遏を加へざるに於ては人間は忽にして飢餓點に達するものであると云ふのである。而して人口増加に對する防遏の存在を此人口論に於て認めて居る。之は二つの種類より成るもので、一は積極的防遏、二は豫防的防遏であるとしてある。積極的防遏とは人の死と云ふことによりて行はれるもので、流行病、惡疫、不節制、嬰兒殺害、野蠻的食人、戰爭の如き死亡率を増加せしむる所の防遏である。豫防的防遏とは出産率を下げることによりて行はるる防遏であつて、人道的の性質を有する強き防遏である。マルサスの所謂分別的防遏と稱する結婚延期若くは結婚避忌、即ち家族を作ること避けることの如きは之に屬するのである。慎重なる男子は妻を養ひ子供を立派に養育することが出来るやうにならなければ結婚を延ばすことになるであらう。漸次人口が増加して來ると、斯ふ云ふ人々は家族を扶養することが漸次困難となるから結婚を延ばすか若くは全く結婚を避けることになるのである。結婚年齢の平均が上つて行くに從て子供の出生數は比例的の減少よりも以上に減少する。結婚防遏及び人口防遏の

社會的必要より生じたる無數の習慣は世界至る所に存して居る。例へば、或村落にては茅屋の一家内に誰か死んで人數に缺員が出来ないと結婚しないと云ふ習慣がある。マルサス自身も嚴に此防遏に就て提言して居る、即ち何人と雖も一定の家族を支持することを得べき充分なる見込が立たない内は結婚してはならぬと云つて居る。マルサスは英國人の間に親たるの責任を感じる念を強からしめむと欲したのであるが、併し彼は屢々人間が次第に文明に進んで行くことより生ずる期待を忘れて、將來に悲觀的見解を有したのである。マルサスの悲觀的推理を奉ずる他の人々は、人口過剰は絶えず繰返さるるもので國民は之より生ずる悲慘と害毒より免るることは出来ないものであると考へたのである。併し乍ら、近世の文明は此點に關して多くの希望を興ふるに至りたるもので、民族の間に増加せる富の程度により世人は遂に人口過剰問題を餘り重要視しないやうになつたのである。統計の示す所によれば、文明の進歩せる國では何れも出産率の低下と云ふことが伴つて居る。現今米國に於て人口に對して加ふべき處置としては、外國より來る最下等の移入民を防遏し、米國の社會に於ける最良なる

階級が永く特色として居る所の利害の深慮を結婚に向けることが何よりも必要なことである。

人口と生活程度

人口と生活程度 生活の程度、即ち一般のものが常に享受すべき必需品、享樂、利便の高が人口の上に及ぼす影響に就ては後に幾許か詳しく論ずることとし、茲には只だ、生活程度が高くて其根底が堅まつて居る國では若し人口が増加すれば、生活の程度を低下せしめなくてはならぬと云ふ一種の考のために前述せる豫防的防遏が行はれるものであることを注意して置く。併し乍ら生活の程度なるものは絶對的に固定して居ないから、豫防的防遏による人口の變動は極めて緩漫に來るものである。故に生活の程度が絶え間なき國民的困難によりて壓迫される場合には子弟は一層下き生活程度に堪へ得るやうに養育せられ得る結果として更に人口の増加は可能のことであり、又自然の勢であると云ふことになつて來るのである。

人口増加の源泉

人口増加の二源泉 全世界と云ふ考から離れて、單に或一國の人口から云ふと、人口増加の源は二つある、一は自然的増加であつて二は外國人の移入である。一國に於

ける自然的増加は常に死するものよりも生るるものが多い場合に生ずるもので、言葉を変へて云へば、死亡率よりも生産率が平均的に超過することによりて生ずるのである。けれども斯る超過は數種の廣く異なる條件の一から生ずるものがある。即ち或國々、例へば露西亞の如きは、甚だ高き死亡率を有し更にそれよりも高き生産率を有して居るのであるが、他の國々に於ては、例へば英國の如くに人口の増加は低き出生率と更にそれよりも低き死亡率との超過數に基いて居るのである。死亡率の低き國に於ては勞働に従事することを得る人の割合、即ち勞働の供給が一層大なるものであることは明かである。人口の増加が何れの條件によりて生じたるかに従つて一國の眞の幸福に大なる相違があるのも明かなことである。米國に於ては一世紀餘の間に外國人の移入と自然的増加との兩者によりて驚くべき速度を以て人口を増加した。大規模の外國人移入は今日まで引き続き行はれ、殊に今日は從來に比し最も盛んである。而して出生率は漸次低下して來たけれども同時に死亡率も大に低下し來りたる結果として人口の自然的増加は依然として續いて居るのである。

第三節 資本

資本の定義

定義 生産の第三要件、即ち補助的要件若くは派生的要件に稱せらるるのは資本(Capital)である。丁度、酸素と水素とが合して水となるが如く、土地を労働とが相合して資本を作り出すのである。それで、資本其ものは土地にもあらず、労働にもあらずして、之等の二つより派出したもので、それ自らの性質を有する新しい物である。日常に使用する「資本」と云ふ言葉は時々漠然たる意味に用ひ、學問上から全く資本でないものをも資本と稱することがある。即ち時々土地をも資本として云ひ現して居るのであるが、それは多くの點に於て産業に従事して居る人に取りては土地と機械との間には餘り異りたる所が無いからである。併し乍ら科學的には之等の二つは明かに區別しなくてはならぬ。更に業務的能力を動もすれば人的資本と稱するやうなことがある、而して此附會的の意味を附するのは此種的能力が價值を有すと云ふ點に在るのである。併し乍ら、斯の如き意味は必ず附會的の意味であることを記憶せねばならぬ。

土地は自然的のものである、資本は人間の生産したる物である。労働は労働者の人格と分離することの出来ないもので、資本は労働より生ずる物質の一部分である。そこで生産要件としての資本は將來に於ける生産の目的のために用ひらるる所の中繼的の生産物より成るものであると定義することが出来る。

資本の作用

資本の作用

資本は二つの根本的生産力が生産の手段として要する所の媒介物である。資本には建物、機械、道具の如き人爲的の生産助成物を含むのみならず、皮革、棒鐵の如き更に精製に附すべき未成品も含まれて居る。之等の部分的に製造せられたる物を學問上にては半製品と云ひ、之等は既に生産の全工程を終りて消費者の手にある財とは區別すべきものである。勿論之等の財は其利用によりて新しき資本を作り出すものであるけれども、消費者の手にある間は資本其ものではないのである。

資本の作用は次の如く述べる事が出来る。即ち、資本は人をして、直接の生産方法の代りに間接の生産方法を代用して自然物及び自然力を一層充分に利用せしむるを得るもので、之がためには斯る間接生産方法に對して道具を供給し、而して最初の努

力と最後の結果即ち消費との間の中間を一層延長せしむるを得ることによりて目的を成就するものである。間接の方法は殆んど一般に直接の方法よりも一層能率高きものであるが、併し間接の方法には機械道具を必要とし、且つ生産の週期を長めるものである。即ち例へば人は挺を用ふると腕力のみによる場合よりも一層重い物を持ち上げることが出来る、何となれば此場合に於ては其人は自然力を利用して居るからである。而して機械に改良を加ふる毎に労働を用ふることは漸次一層間接になつて来る。故に資本的生産が發達すると、最初の着手より最後の生産完成に至るまでの功程の數が絶えず増加するもので従て、一般に其中間の長さを増すものである。

資本の源

資本の源 資本は貯蓄の結果であること云ふことが屢々唱へられて居るが、併し乍ら、斯の如き提言は少くとも人を惑すものである。思ふに貯蓄は單に消極的の行爲であつて積極的の結果を作り出すことは出来ないものである。我々が貯蓄をなし得るには、我々は貯蓄すべき物を有せねばならぬ、即ち生産しなくてはならぬ。而して更に自分の存在に必要であるよりも以上の生産をしなくてはならぬ換言すれば我々は剰餘

資本構成の方法

を有せなくてはならぬ。若し斯る剰餘の生産物が貯へられたならば、それは資本となることが出来得べきものである、併し未だ資本ではない。

資本構成の方法 右の貯蓄が直接若くは間接に更に財を生産するために用ひられる時に初めて資本となるのである。貯蓄されたる剰餘が資本となる最も簡單なる方法の一は、漁師の場合を見れば解る、即ち漁師は或時期に於ける獲物の部分を自分の生活に充て、其次の時期に於ては更に將來の獲物を増加するがために丸木船、網具、其他の漁具の手入れに働くのである。更に進んだ社會に於ては其方法も普通に大に複雑を加へて来る。例へば農夫が收穫の結末機を欲する場合には直接に金錢を支拂つて買求むるのである、併し其金錢は其農産物の剰餘貯蓄を賣りて得たものである。而して一方に於ては此機械を作り上げるまでの色々の作業に従事した人々の報酬は凡て此剰餘から前金を以て支拂はれて居ることになるのである。製造業者の場合に於ても同様であつて、自分の生産品を賣り、而して直に其代金を消費することが出来る、或は又其全部を消費せずして残れる金を以て自分の必要なる資本となるべきものを他から買

ふことが出来る。若くは凡て必要な機械を有する場合は、其剩餘を或會社の株券に投資することが出来る、すると其會社はそれを用ひて必要な資本となすことが出来る。と云ふ譯になる。凡て之等の場合に於ては金錢を使用するために取引の性質が一寸紛はしくなるのであるが、結局するに完成せる消費財の生産から、資本財の生産に至るまでの労働の變轉に過ぎざるものである。

資本使用の結果 茲に資本使用の結果に關して少しく述べる。先づ第一に(一)資本は生産物の量を増加することを可能ならしむるものである。資本を用ひず直接手にて生産したる物品に對して資本を用ふる時は其生産高を非常に増加するものである。第二に(二)資本を用ひざる場合には全然享受することの出来ない或種の効用も之を用ふる時は可能となつて来る。即ち海岸から遠く距れたる處では牡蠣や貝類は運輸に用ふる資本がなかつたならば得ることは出来ないに相違ない。最後に(三)資本は多くの場合に於て生産品の品質を資本を使用せざる場合よりも優良ならしむるものである。

表示財

表示財 表示財(Representative)と資本とは特に區別して置かねばならぬ。茲に所

資本の使

謂表示財と云ふのは嚴格に云ふと全く財ではない、只だ財の所有權の表示たるものである。手形、質權證、公債券、株券の如きものは財にあらずして單に所有權の表示である。又特許狀も社會的資本の一部分ではない、即ち一の市が街鐵の布設及び運轉を一會社に特許したる場合に於て、之によりて直接新しき資本は作出されるものではない。單に既存の社會的資本の使用若くは社會的資本を作り出すことを會社に許すに過ぎざるものである。

固定資本
流通資本

固定資本と流通資本 普通に經濟學者は資本を固定資本(Fixed Capital)と流通資本(Circulating Capital)の二種に分類するのである。流通資本とは一回若くは其作用の一廻轉に使用し盡される資本であつて、其資本の有する全部の價值が完成せる生産品の價值に移るのである。然るに固定資本は其作用が連續的に續き、只だ其一部分の價值が使用の都度生産品に移るのである。例へば製造に用ひらるゝ原料品、半製品の如きは流通資本の適例であつて、工場の建物及び機械の如きは固定資本の適例である。

自由資本
特定資本

自由資本と特定資本 殆んど右に類する分類で自由資本(Free Capital)及び特定資

本 (Specialized Capital) といふものがある。此分類に於ける用語は寧ろ普通に比較的の觀念を示すものであることを知らねばならぬ。特定資本とは其資本の形態を單に一つの生産部門にのみしか用ひられぬもの、若くは精々斯る部門の極めて僅かなる數にか用ひられぬ種類の資本である。然るに自由資本は之に反して、生産的作用の甚だ多數の場合の何れにも用ゆることの出来る資本である。即ち、石炭、鐵、皮革の如きは比較的に自由の性質を有する資本であるが、鐵道、運河、各種の機械の如きは比較的に其用ひ方が特定されて居る。此兩者間に於ける實際的重要なる相違は自由の性質を有する資本は特定の性質を有する資本に比し財に對する社會的需要の變化に容易に自ら適合することを得るの事實に存するのである。即ち若しも國民的資本の餘り多くの量が例へば鐵道の如き固定若くは特定のものになつて居る場合に於ては之を速に容易に改めることは到底出来ぬ。之がため其國の全生産は其不適合の結果より不利益なる地位に陥らねばならぬ。固定及び特定の形態に對する斯の如き不適合なる資本の投資は多くの經濟學者によりて産業的恐慌の最も重大なる一原因として目されて居るのである。

ある。

〔補論〕

先づ生産の三要件中土地と労働とを根本的要件とし、資本を補助的若くは派生的の要件として、之等三要件の關係を如何にも明瞭に説明してある。次に土地の性質を説明して收穫遞減の法則を解り易く論じて居るが、表に就ての數字的説明の内には餘り簡單に過ぎて解り兼ねる所がある。之に對しては特に括弧して詳細に解説を加へて置いたから之を熟讀玩味すれば容易に了解することが出来やうと思ふ。第二節に於ける説明の内、人口に關する問題は古來大に議論されて居る事であるが、元來人口の増減と云ふものは財の増減と同一に見ることの出来ないのは勿論であつて、凡ての經濟學者が單に極めて狭き目前の現象のみを見て、恰も財の生産に制限を加ふる如く、人間其ものの出産増殖に制限を加へて差支の無いもの様に考へて居るのは大なる誤りである。近來に至りてはマルサスの人口論を奉ずる經濟學者は勿論餘り居ない併し乍ら何れも現在の事實より見てマルサスの人口論が痛切に現はれて來て居ない

から、先づ人口増殖に對する防遏の必要がないと云ふことを色々の方面から論じて居るに過ぎない、目前の狭い現象のみを根底とせる便宜論ばかりである。斯る議論は又忽にして變すべき運命を持つて居る。決して人口に對する根本的觀念でない。思ふに理智の力が人間の數を單に減ずる場合のみならず、又増加する場合にも自由に適用するに至らざる限り經濟的活動の主體たる人間其ものの數に對して干涉を加へむとするは滑稽の議論であらう。人間は單に人間其ものの偶發的變態に對してのみ處置を加へることが出来るもので、常態に對して數字上の制限を加ふべき理由は毫もない。第三節の資本に就ては詳細に觀察すれば述ぶべきことが甚だ多いのであるが、本文の説明で資本の如何なるものなるかは大體に於てよく解つて居るから、茲には略する。併し注意のため少しく述べて置く必要があるのは土地と資本との關係である。本文に於ても土地と資本とは如何なる場合に於ても別のものとしてある、換言すれば土地は如何なる場合に於ても資本となることはないと論じてある。之は單に本書に於てのみならず、多くの經濟學者も土地は土地として、縱令生産の目的に使用する場合と雖も、

資本の内に入れないのが普通のことである。然るに實際に於ては如何なる生産業者と雖も、生産の目的に使用する土地である以上は之を資本として取扱はぬものはない。普通の學理的説明と實際とは全く違つて居る。之はドウ云ふ譯であるかと云ふと、一般の經濟學者の考では、生産の目的に使用する土地には資本である部分と、資本でない部分とがあるのである、然らば如何なる部分が資本であるかと云へば、人の力で作りに出すことの出来る部分が資本である、例へば、耕地の表面の沃土は部分的に肥料を加へて作り出すことが出来る、此人の力によりて生産されたる部分だけは資本でなくてはならぬ、又工場の敷地等に就て云ふも人の力で出来た部分は當然資本たるべきものである、更に正確に云へば、人の力が土地の自然的状態以上に加へたる附加的部分が資本であつて、其他の部分は資本ではないのである、然るに之等の二つの部分は實際に決して的確に區別することは出来ないから、之等を別々に論ずるよりも共に土地として論じた方が便利であるから普通に凡てを土地として論じ、資本としての土地を餘り論せないであらう。然るに生産業者の立場から云ふと生産の目的に用ふる土地

は工場の建物、機械、其他の資本的設備と少しも性質が異つて居ないのみならず、今日に於ては凡ての資本は金銭を以て投資せられ計算せられて居るから當然資本として其土地を取扱ふのである。即ち生産事業を始むるに當り機械を買入るるために投じた資本金も工場敷地を買入るるために投じた資本金も同一のものであるからである。果して然らば之等の異りたる見解は學理的慣例と實際的必要との二つの立場から同一物を見たるもので各々其觀測面だけのことを短い辭で語つて居るに過ぎないものである。思ふに現時の社會組織と經濟組織の下に於ては、生産の目的に使用せらるる土地は悉く資本と稱するを適當としなくてはならぬ。只た土地と一般の生産物との間に於ける異りたる性質を認むれば、それでよい。

第三章 生産の組織

前章に於て生産の各要素に就き、一々其性質を研究し各其能率と生産増加とを定める原則を考究した。本章に於ては現今に於ける生産が社會的となり組織的となつて來

生産組織

た所の諸種の有様を研究せねばならぬ。丁度我々は一機械の種々なる構成部分を研究したやうなもので、次に此各構成部分を組立てる種々なる方法と順序とを更に研究し、其機械全體が回轉するに至つた時、一つの單位として之等の各部分がどう云ふ働きをするかを理解せねばならぬ。

第一節 集合的に見たる生産要件の組織

集合的の
生産要件

往時の單純 生産と云ふ大なる機械の三主要部分は土地、労働、資本の三であることは既に述べたのであるが、今や進んで之等の部分を如何に組み立つれば仕事の能率を増加することが出来るかと云ふことを研究しよう。換言すれば此研究に於ける第一の問題は包括的に且つ集合的に見たる生産要件の結合即ち組織に就ての問題である。世の中が未だ開けない昔の時代に於ては此組織は極めて單純なるものであつた。同一の人が土地、労働、資本を有し、而して自らの判断によりて生産に與りたるものの内に全生産物を分配したものである。段々世の中が進歩するに従つて生産が村の全體に

往時の組
織

よりて行はるるに至りて、生産に用ふる諸道具は共有とし共同の権力によりて經營し、而して習慣によりて生産物の分配を行ふたものである。其後手工業に於ける所謂組合制度の下に於ても同様に生産の各要件は明かに分離して居なかつた。中世の組合は徒弟、職人、主人を包容し、而して行政的監督の下に事業を行つたものである。主人は事業を指揮し、資本を所有し、自ら自身に働いた。而して徒弟を養ひ職人に手當を供し其生産物は全部自分に引取つた。斯ふ云ふ有様で幾分か勞働は他の生産要件から分離して來たのであるが、併其分離はまだ完全ではなかつた。一度び勞働に従事しものは、習慣上より、その者が資本家、雇主、經營者となるまで、漸次進んで行つたもので、斯る昇進が組合制度に於ては一の常例となつて居つたのである。

複雑を増す 前に述べたる如く、過去百五十年間に生産要件の組織に大なる變化を生じたのである。今尙は至る所に往時の單純なる組織は殘存し、且つ生産の一大部門たる農業は米國に於ては生産各要件の分離を見ざるが如き一般的状态である、即ち小農の大部分は其耕地を自ら所有し、使用する資本を自ら所有し、而して全部若く

複雑なる組織

は大部分其生産に就ては自ら家族と共に勞働して居る有様である。併し乍ら、商業、工業及び運輸業になると、今日一般に單に勞働のみを供給する大なる階級と資本及び時としては土地を供給する階級と事業を組織し經營する階級とに分離して居る。近世の鐵道事業の如きは其適例である。社債所有者と或場合に於ては株主とが資本を供給し、而して社債所有者は利子を受け、株主は配當を受ける。勞働の方は勞働者階級より供給し之に對して賃銀若くは給料の支拂を受ける。土地は又普通に其資本の一部と交換して取得するから社債所有者及び株主が供給することとなる。其結果として、其土地を直に購入しないで借地したるが如き場合を除き、鐵道會社の簿記の上には普通に分離したる綱目として掲げることはないけれども、實際に於て地代なるものが生じて來るのである。最後に其事業の支配人及び重役を株主が其株主の中から若くはそれ以外から選任するのであるから茲に又其組織内に一の分離したる階級が出来る。

企業家 産業の組織が斯の如く複雑になつて來ると、全局を達觀して生産すべき物を定め生産上に各要件が結合して作り出す物品の量を決定すべき一の中心的指導の

企業家

智識が必要となつて來るのは明かなことである。普通に此役目に當るものは損益の危険を自ら引き受け、面して生産要件を供給したる人若くは階級に對しては相當の金額を支拂ふのである。此役目に當る人を今日に於ては企業家と云ふのである(十八世紀頃の英國に於ては、此企業家のことを undertaker 若くは adventurer と云つたのであるが、爾來此 undertaker なる語は小規模の特種の事業家に用ふることなり、adventurer なる語は「向ふ見ず」若くは甚だしきは「不正直」なる聯想を伴ふ種類の事業家を稱することとなつて居る。英語の undertaker と同一の意味を有する佛語の entrepreneur なる語が今日に於ては一般に企業家と云ふ意味に用ひられて居る)

企業家の任務は近世社會に於ては最も重要なものとなつた。而して産業組織が漸次複雑の程度を増す毎に次第に重要な程度を高めて來る様に思はれる。企業家は、よく「産業界の將帥」と稱せらるるのであるが、其理由は企業家が産業軍を指揮命令し、勝敗の責任を負ふことが最も多いからである。有爲の統率の下にありては産業計劃は赫々たる成功を收め、統率者の指導的手腕と能力とを失ふに至りて其産業は衰微し破

企業家の任務

産するに至る。エー・テイ・スチュアートに依りてニューヨーク市に築き上げられたる大貿易事業の如きは其適例である。多くの場合に於て全都會の繁榮は僅少の秀でたる産業界の將帥によりて定まるものである。

企業の状態

企業の形態 企業家たるの地位は必ずしも一個人によりてのみ占めらるるものではない。産業の規模が急激に擴大するに至り却て企業家の任務を多數人に分つて經營すると云ふことになりつつあるのである。次に近世に於ける企業の重なる種類を述べよう。

- 個人企業
- 組合企業
- 會社企業

(一)個人企業 個人企業は一個人が資本及び土地を所有し若くは買入れ、勞働者を雇入れ事業を支配し而して全危険を負ふものである。

(二)組合企業 此場合に於ては所有權、支配權、經營責任が組合員に分たれ、時として法律の定むる所により其財産の全部に對して負ふべき責任を種々の程度に定め二人以上の組合員の間に入りたる割合に分たれることがある。

(三)會社企業 會社企業が組合企業と異なる點は、會社を組織せる個人々々の責任は

其會社に適用すべき法律若くは特別條例によりて限定され、更に斯る會社の存立期間
は法律上の制限を必要とせざる事實に在るのである。會社企業に於ては其取引業務大
規模なるがため、所有權、支配權、危險の負擔を株主に分ち、實際の經營は株主の選べ
る重役及び重役の任命せる理事若くは支配人に委ぬることになつて來るのである。

共働企業

(四) 共働企業 所謂共働生産と稱せらるる企業に於ては組合若くは會社の如き形式
の下に労働者が聯合し、生産の他の二要件を所有し支配し、凡ての危險を分擔し、而
して事業の指揮は其任に選べる労働者内の人員か若くは一定給を以て雇入れたる支配
人に委ねるのである。此企業の大なる弱點は共働せる労働者間に動もすれば有爲なる
指揮を輕視するの事實を生ずることである。

政府企業

(五) 政府企業 中央政府、地方政府が各自に重要な各種の事業を有して之を經營
するのであるが、之等の場合に於ては人民は全體としてそれ等の事業を有し凡ての危
險を負ひ、選任せる經營者に事業の指揮を委ねる譯となるのである。

二二一—二二一—二二二

第二節 労働の組織

労働組織

企業の形態を研究する場合に我々は總じて生産要件の共働及び組織が實際に於て如
何なる種類の方法によりて行はれつつあるかを研究したのである。今や進んで別々に
見たる各要件の能率を増加せしむるやうに組織する方法如何を研究しなくてはならぬ。
而して先づ第一に労働に關することより初めることとする。

若し他と生産物を交換することなく自分の使用する凡ての物を個人々々で自ら生産
した場合のことを考へて見れば、斯る場合に於ては労働は孤立的で且つ不統一なもの
で、而して生産は何等組織的のものでなかつたことは申す迄もない。併し乍ら、斯る
極端なる場合の實例が實際何處にか存在したと云ふ證據はない。人間が相集りて居る
處には幾分かの社會的氣分があり、生活を求めむとする努力、即ち労働の何等かの組
織が存するのである。

労働組織
の形態

労働組織の形態

(一) 協力 (Simple Associated Effort) 人間の中に發達し來りたる労働組織の最も古き形態の一であつて、且つ世界的經濟に於て今尚ほ餘程の部分を占めて居るものは協力を稱せらるる所のものである。多くの人が力を合せて重い物を持上げる場合の如き、二人で熱鐵を連打したり、同じく二人が鋸を挽いたりする如き場合は此簡單なる組織、即ち協力の適例である。而して時として第一の場合の如く一人にては到底爲すことの出来ない事を協力によりて成就することもある。兎に角、此協力は常に個々別々にする努力の合計よりも更に大なる仕事を成し遂ぐるものである。

(二) 分業 (Division of Occupations) 文明の進歩するに伴ひ、全體としての産業は漸次に部分的に分れて來た、故に之等の各部分は漸次に分離して絶えず次第に小さくなつて來たのである。恐らくは我々が前に述べた時代よりもズット早くに労働組織の第一歩は原始人類が其仕事を分科し初めた頃に運ばれたものであらうと思ふ。而して爾來社會のあらゆる状態は單に經濟的状态に止らず其他凡ての状态が労働及び勤勞の専門的分科の漸進の下にあつたものである。絶えず分科の上に分科を加へ殆んど之等凡

分業

ての進歩せる無數の階級は枚舉に遑あらざるものである。併し乍ら、之等の階段の内二つが明瞭なる性質を以て普通一般に認められて居る。其第一が即ち我々が分業と稱する所のものである。思ふに分業の最も古き原始的形態は、野蠻人の間に或者は戰爭を業とし或者は狩獵に従ひ、而して婦人は家庭若くは農耕に働くと云ふやうに其受持の仕事をした事實に在る。分業には一々各種業體によりて名前が附いて居る。印刷業、製本業、書籍販賣業と云ふやうなものである。

(三) 分勞 (Division of Labor) 以上の如く小さく分たれたる分業が過去二三世紀に更に分割せらるるに至つた、殊に十八世紀及び十九世紀の間に於て其最たるを見るのである。此更に労働を小さく分割したるもの、即ち更に小分せられたる労働の組織を分勞と稱するのである。尤も既に述べたる分業は一層大なる部類に分たれたる分勞たるに過ぎざるものである。此労働組織の一形態たる分勞は近世の産業に於て最も重要なものであるから詳しく充分に研究する必要がある。

生産の要件としての労働に對する我々の研究に於て、労働の能率は大部分其労働組

織の能率によりて定まるものであることを前に指摘して居いた。斯る労働組織の能率は何によりて得らるるか云ふと、殆んど大部分は分勞によりて得らるるものである。分勞並に分業は同じく労働の共働 (Cooperation of Labor) と稱することが出来やう。生産工程は殊に製造業に於て現今極めて小なる部分に分たれ、其一部分若くは大概二三部分の極めて小なる部門が各労働者に與へられ、若くは労働者の各組に與へらるるのである。即ち近世の時計工場に於ては各労働者は夫れ々々時計の極めて小なる部分を作るもので、時計工場に於て能率を充分ならしむるやうに組織を立つるには約三百人の労働者を要する位のもので其製造工程の分割は實に大なるものである。同様に以前は一般に一人にて靴の全部を作つたものであるが、今日に於ては前面截工、後面截工、後柱截工、頂部截工、縁截工、裏截工、截詰及び摺工、型及び函職工、後柱削革工、頂部削革工、襷附工、前部仕上工、上前面縫工、上後面縫工、其他を合せて百十三と云ふ多數の分勞を生じて居る。斯く労働者間に労働工程を分割するのであるが、矢張り完成せる物品を生産するために結合するのであるから、分勞は労働の共働を意味す

るものであると云つてよい。我々が分勞なる言葉を用ゆる場合は労働工程の一側面より見たる場合であつて、労働の共働なる言葉を用ふる場合は同じ行程を他の側面より見たる場合である。而してこれは分業の場合に於ても同じことである。

分勞の例解

分勞の適例は現今普通に營まれて居る所の針製造業に見ることが出来る。鋼鐵の針金が針製造の原料であるが、此鋼鐵の針金も大なる分勞を通じて出来たものである。而して凡ての針は皆同一の一般的工程を通過して出来上るもので、針製造工場を參觀するとよく解るが、之等の工程は大略次の如きものである。先づ針金を伸展機及び切斷機に掛ける、すると針金の屈曲が伸び而して仕上げた針の長さの凡そ三分の一位の片に切斷される。之等の短い片を「ブランク」と云ふのであるが、之等の短片を小さい鐵製の「シリンダー」の中に入れる、すると其「シリンダー」は絶えず廻轉して針金の短片を磨くやうになつて居る。斯くして之等の短片を磨いて、それに附着せる錆や汚點を去り、而して之等をコールドスウェーギングと云つて引き伸ばしをするのである。此引き伸ばしの爲に短片をホッパーと云ふものの中に入れる、する

とそれから一度に一本宛機械で取つて、短片の一端が廻轉する鋼鐵の截片型の一組の運轉に觸れる。之等の廻轉せる型の絶えざる開閉によりて針金の一端が壓搾されて針の尖先が出来るやうに引き延ばさる。之が終ると他の機械を用ひて針の平面に番號と標號とを打印する、此打印によりて仕上げる針の種類が解るのである。而して一定の長さに凡ての針片を切りて揃へる。針片が揃へられて印が附せらるると、グループズイングと云ふ機械に掛けて針の一端には短溝を他端には長溝を同時に作り、而して次に針に目を穿つことになる。普通に此目を穿つことには婦人を使用するのであるが、之には非常に手先の熟練と眼先の働が必要で間斷なく針に機械を作用せしむるやうに鹽梅しなくてはならぬ。新式の機械を用ひてやると一人の娘の子で一日約七千本一分間に十二本以上の針に目を穿つことが出来る。次に針の尖頭を機械によりて拵へるのであるが、之には圓形、螺形、菱形等色々な種類がある。斯くして先づ形の上から云ふと針が出来上る譯になる。然るに若し此尖頭の鋼鐵が柔軟である場合には役に立たぬ、それで色々な分勞上の手續を経て其硬度を上げて鍛へねばならぬ。次に又機械を

用ひて針を研いで鋭くするのであるが、一時に約百本の針を支持せる機械を一分間に八千回も廻轉する眞鍮線の荒刷子に當て、後に又剛毛刷子に掛けるのである。針の目は、目の孔の凡ての部分に磨力の作用するやうに種々なる角度に張りたる木綿糸に油及び金剛砂を附着せしめたるものを通して、よく磨くのである。次に上等の金剛砂で仕上げの尖りと、磨粉及びアルコールを附したる回轉刷子を用ひて仕上げ磨きをする。數を計算して包みにするまでには、まだ多く分勞が行はれ、之によりて最も經濟的に人の精力が利用せらるるのである。

分勞の利益

普通經濟學者が分勞の利益として列擧するのは次のやうなものである。先づ第一に分勞は(一)時間を節約するものである。此時間の利益は二重であつて一は勞働者が屢々の作業より他の作業に移ることがないことより生し、二は勞働者が僅かな時間を以て特別の仕事を修習することが出来ることより生するのである。第二に分勞は(二)熟練を高めるの利益がある。第三に分勞の制度は(三)適應上の利益、即ち各人相應の仕事があつて夫れ々適所に配置することが出来る。體力に於ても智力に

於ても優れたるものは、それに適したる仕事に専ら努力することが出来る。同時に、心身共に弱き人も大なる力を要しないやうな夫れ相應の仕事に就くことが出来る。第四に分勞は(四)發明の動氣を興ふるの利益がある。仕事が段々簡單になつて來るから労働者は其仕事に詳しくなつて來る、従つて何處を改良し、若くは如何に改良をしたら最もよいかを見出すことが出来る。近世發明の大なる部分が労働者の腦髓から生じたものであると云ふことは右の理由に依るものである。最後に分勞は(五)資本の効用を一層完全ならしむる利益がある。各々の労働者が一つの道具若くは一組の道具、若くは一臺の機械を使用する結果として之等の機械道具を休ましむることなく絶えず使用することになるのである。

分勞の不利益 併し乍ら分勞には又不利益な方面がある。先づ第一に分勞の組織は婦人小供の労働を有利ならしむるために(一)屢々男子が職業を離れることになる。米國の諸市に於ては父が家庭に在りて家庭の雜務に服し、妻や小供が工場で働いて居ると云ふことが珍しくない。第二に分勞は(二)人と人との間に相倚ることを大ならしむる

分勞の不
利

ことより、動もすれば、少くとも部分的に弊害を生ずるのである。即ち一事業、例へば鑛業に於て一組の労働者が同盟罷工をすること云ふことになる。其事業に於ける凡ての他の労働者が職を失するのみならず、又其同盟罷工の起つた事業の生産物を用ひて働いて居る幾千幾萬のものが職を止めねばならぬこととなるのである。尙ほ同じ種類の困難がある。それは労働者が職を失して新しき職業に熟練せむとするも、餘り齡を重ねて居るために新職業を習得することの出来ない場合が生ずる。斯る場合に於ては生産状態及び生産方法が變化を生じて來ると相當に年を取つて居る労働者は凡て新職業に適應することが出来ないから職を離れることになるのである。之等の弊害は確かに長い後には結局自ら矯つて來るべきであるが、併し乍ら或學者が熱心に論じた如く其生命の短かい普通の人間に取りては其機會を待つことは中々出来ないのである。分勞の組織に伴ふ第三の弊害は(三)動もすれば労働の趣味を失ひ、それと同時に其修養的價値を失ふことに在る。時計全體を初から終りまで作る職人は技術家たるの趣味を其職業の上に有し得るのであるが、一日十時間押し通しに型の表面に金屬の平圓盤を嵌

めると云ふやうな簡單なる手續ばかりには何人と雖も到底趣味を持つことは出来ないに決まつて居る。或學者が「ピンの製作分勞に於て其第十八番目の部分的技術しか知つて居ない」人ほど憐れむべきものはないと云つて居るが實に穿つた言である。

第三節 資本の組織

勞働の組織に關する前述の論究に於て、勞働の組織は資本の組織と最も密接なる關係を有することを注意して置いたと思ふ。分勞なるものは近世産業の特質たる機械の使用、即ち機械と云ふ資本を使用することが無かつたならば決して發達しなかつたに相違ないと云ふことは針製造業に於ける分勞の説明によりて充分に明かである。故に我々は、資本の組織に就て別に此上研究の要を認めないものである。

第四節 土地の組織

或程度までは自然の組織即ち土地の組織は資本の組織と同じである。

資本の組
織

土地の組
織
分勞

勞働は普通に資本の助を以て土地に加ふる人間の努力である。故に勞働の組織は同時に土地と資本との使用に關する組織を含むものである。併し乍ら、茲に一般に土地なる要件によりて制限せられ従つて我々が土地其ものの組織の一種として取扱ふことが出来る所の生産的組織の一種がある。此一種の組織に最も普通に附する所の名前は産業の分布若くは地域的分勞即ち是である。分勞の場合と同じく産業の分布も或る場合に於ては人の内に、或他の場合に於ては場所の内に漸次其分科の作用を増すの傾がある。即ち、地方のものが食料を都市に供給して之と交換に製造品を得ると云ふ譯で次第に地方的勞働と都市的勞働とに分れるて來る、之は即ち地域的分勞と稱するもので、恰も野蠻人間に於て男子の仕事と女子の仕事との區別を有する原始的分業に類するものである。而して或農業地方が殆んど全く一種若くは二三種類の生産物のみを生産し、或工業中心地が同様に或一種若くは或二三種の物品のみを生産すると云ふやうな一層進んだ地域的分科は、先づ、前に詳しく述べた所の分勞の形に類するものである。合衆國の國勢調査を見ると多くの興味ある地域的分勞若くは産業的分布の實例がある。

即ち、價格の上から云つて合衆國の手袋の半分以上がイースト・セントラル・ニューヨークに於けるグロヴァースヰイル及びジョンストーンの相接せる二市に於て製造される。且つ製造せられたる手袋の價格はグロヴァースヰイル市に於ては凡ての製造品の總價格の三分の二以上であつて、ジョンストーン市に於ては二分の一以上である。ニューヨークのトロイに於ては價格の上から、全國に於て製せらるゝカラ及びカフスの總價格の殆んど四分の三に達する生産がある、而してトロイに於ける凡ての労働者の殆んど十分の七が此カラ、カフス製造業に従事して居る。フィラデルフィアは全國の敷物の四割五分以上を産出し、サウス・オマハ及びネブラスカに於ける労働者の十分の九は屠獸及び肉の罐詰に従事して居る。

斯る産業の分布を生ずる原因の内に次の事項を國勢調査は掲げて居るが、思ふに之は甚だ重要なものである、即ち原料の接近、市場の接近、水力、好氣候、必要なる労働の地方的供給、資本及び投資の地方的供給、古くより營み來りたる惰力等である。之等の原因の大部分は労働に關するよりも寧ろ地理的觀念によりて論すべきものである

から、其理由によつて我々は労働組織の一種としてよりも寧ろ之を土地に於ける組織の一種として産業の分布を取扱ふのである。

文明の進歩によりて労働の分科即ち分勞が進んで來たやうに、將來に於ては地理的限界に於ける産業の分科が漸次進むに至るべきを豫想することが出来る。政府が漸次其基礎を固め、高速度の運輸機關は改良せられ、人種的反感及び偏見は漸次其跡を絶つに至り、茲に世界的市場の出現を可能ならしめむとしつゝある。而して世界的市場の出現と共に各國間及び各國内の各地方は生産上最も大なる利益を受ける品物を選んで充分に確實に生産するやうな状態になつて來るであらう。

第五節 生産組織を決定する條件

生産組織の能率を定める所の一二の條件は既に前に説いて置いた。之等の條件と共に其組織の如何に關せず生産を定むる所の更に重要な凡ての要件に就て説明を加へるのは有益なことであると思ふ。

一 人口の數と性質 理論上より最も重要なものは人口の數と性質とであらう。消費者が多數になればなるほど、財の供給は益々多くならねばならぬ。そして財の供給が多くなればなるほど、一般の原則として、經濟的に有利なる組織が益々細密とならねばならぬ。分勞は市場の範圍によりて制限せらるゝものであると云ふのは此觀念から出でたるものである。

二 資本の増加 産業組織の第二の大なる條件は資本の増加であつて、其資本が機械であらうと、運輸交通交換の機關であらうと、それは問ふ所ではない。從來に於て機械の改良は生産の分科と組織とを更に進歩せしむるを得せしめたと同時に、一方に於ては鐵道、電信、海底電信及び銀行を擴張し而して斯る生産的組織をして經濟的なるを得せしめたではないか。

三 産業の性質 凡ての産業は、人口の如何に拘らず、又資本集中の程度如何に拘らず、前に述べた所の生産組織の或種類のものに等しく適合するものではない。農業の如きは今日に至るまで概して細密なる分勞の計畫をすることは出来ない。製造業

には最も大なる程度に於て分勞が行はれて居る。斯る相違を生ずる凡ての理由を一一細密に研究すまでもなく、我々は産業内の細密なる組織を可能ならしむるに必要な重なる條件は、種々異なる生産手續が同時に行はれ得ることに在りと云ふことが出来るのである。斯る生産手續は製造業に於ては其特徴とも稱すべきものであるが、之に反して農業の場合に於ては殆んど全く之を缺いて居ると云ふことは何人と雖も知つて居るこである。

四 政治の性質 組織の能率を左右する第四の條件は政治の性質である。最も進歩したる國々に於てすら、政治の組織にも、法律の状態にも、夫れも多くの相違あるを見るのであるが、併し凡ての文明國は少くとも次の如き制度を設けて居る。(一)私有財産の制度を有する事、(二)國の内外を問はず凡ての迫害者を防遏して一般の生命財産を保護する事、(三)契約の制度を確立し之を維持する事、(四)個人が全く手を着けないもの若くは一般に之に手を着けても産業の最良なる利益を擧げ得ないことの明かなる産業は、政府が直接に之を行ふ事、即ち凡ての文明國が鑄貨制度を維持し、度量衡を

整へ、波止場燈臺、及び道路の建設修理をなし、外國に領事を置くが如き之である。

第六節 大生産と小生産との比較

大生産と
小生産と

近世に至り個人的産業の規模は概して頗る急激に増大して來た。實に過去半世紀の間に産業單位の規模の變化は驚くべきものであつて、十八世紀の後半に於て家内の産業から工場的産業に變じたのである。此變化の氣運は一般をして結局如何なる社會的結果を生すべきかに就て恐怖の念を惹起させる位の程度に急激に發展し、既に今尙ほ發展を續けて居るのである。競争的地位に立つ大會社の合同より生ずる或種の危險に就ては後に述べるごととし、茲には大規模生産より生すべき利益と小規模生産が受くべき利益とに關して簡單に論ずることとしよう。

大生産の
利益

大生産の利益

大生産より生すべき利益は一般に二つの種類に分つことが出来る。

(一)は財を生産する經濟に於けるもの、(二)は財を賣捌く經濟に於けるものがある。第一の財を生産する經濟から見て利益とせられて居るのは、(イ)生産物の單位に對する固定資

本及び流通資本の費用を節約することが出来ること同時に(ロ)有效なる生産組織の可能なる結果として勞働を節約することが出来る事、(ハ)専門の研究者及び發明家を雇ひ入れ同一所有に屬する別々の工場に於ける同じ部門を比較研究し或は同一工場内の異なる部門を比較研究することによりて、改良を行ふことが出来る事、(ニ)監督費用の節約をなし得る事、(ホ)スタンダード石油會社及び大規模の牛豚肉罐詰會社に於ける實例の如く廢物の利用をなし得る事、(ヘ)生産及び販賣にそれ自身の機關を設け得る事、例へばそれ自身に罐であるとか箱であるとか云ふものを製作し、又は鐵道及び汽船其他を自身に所有するが如き事である、而して此最後の利益即ち(ヘ)の利益を有する事業に生産の集中並に合同は行はれるのである。

大生産の利益として數へらるる第二の利益、即ち財を販賣する經濟には次の如き利益がある。(イ)廣告及び出張によりて販路を廣むる事、(ロ)生産品持越に關する利益であつて、即ち比較的少量の在荷を以て需要の變動に應ずるを得る事、(ニ)大量輸送の結果より運賃を低廉ならしむる力と、運賃の不法を防ぐべき力とを有するを以て消費者に財

を供給する上に於て大なる利益を有する事、(ホ)不景氣に際して普通に行はれる激烈なる競争に踏み堪へることを得る大なる力を有するを以て製品の販路を擴張することを得る利益がある。

小生産の利益

小生産の強味

以上大生産の列擧せる利益に相對して、或種類の産業に於ける小生産が容易に衰へざるは次の如き強味があるからである。(イ)先づ第一に産業に精通せる多くの人々の言に依ると、手頃の規模を有する設備は資本費に於ても勞働費に於ても實際に於て最大の能率を有し得る事、(ロ)多くの場合に於て大産業の有する、動力集中の點に於ける利益は、最近に於ける發明、特に電氣に關する發明により小規模の製造業者をして其大なる競争者と相並びて動力の分配を得せしむる方法が漸次改良を見つあるの事實によりて相殺されることになる。(ハ)更に大規模の生産者が小規模の生産者の特色とする精密にして經濟的の經營を爲し得るや否や、換言すれば、雇人たる事業支配人は凡ての利害得失を痛切に擔へる個人經營者と此點に於て競争し得るや否やは甚だ疑はしきことである。(ニ)小規模生産者は其生産品の販路に於ける個人的慾望を

知るべき大なる力を有するより生ずる明かなる利益を有して居る。多くの産業に於て個人的要件は甚だ大なる關係を有するものであるから、従つて小規模の生産者は、ヨシ大規模の生産者を驅逐することは出来ないにしても將來自己の地位を維持することは出来る。最後に相接せる小規模の生産者が凡て協同することによりて、大規模の生産が常に有する利益として前に掲げたる(ホ)生産方法に關する發明改良(ハ)廢物の利用に關する同様の機會を得ることが出来るのである。

以上は小規模の生産と大規模の生産とを比較したるものであつて、小規模の生産と獨占的生産とを比較したるものではないことを注意せねばならぬ。獨占的生産は凡てと云ふ譯ではないが普通に大規模の生産である、併し大規模の生産が必ず獨占的産業ではない。若し、獨占財の生産から云ふと、生産上に於て以上に列擧せる利益の外に數ふべきものがまた澤山ある、而して前に掲げたる利益の内には獨占業の場合に於ては更に顯著であつて動かすべからざる利益となるものがある。運賃の不法に關することや、更に廣告に關する事柄を、單に大規模の生産にのみ存する利益とすることに

同意しない人々でも、獨占的生産の場合に於ては其大なる利益を認むる人が多からうと思ふ。

以上に述べたる小生産を大生産との利益の比較に關する凡ての事項は近時寧ろ大なる議論の問題となつて居るもので、未だ決して決定したるものと考へることは出來ぬ。故に本書に於ては肯定的の論を避けて寧ろ紹介的に記述した譯である。思ふに本問題は諸君の研究論議に對する好材料であらうと信ずる。

〔補論〕

本章に於ては産業組織が漸次複雑となつて労働者、資本主、企業家の別を生し來りたる事、生産要件の組織を實際に指揮するものは企業家であつて其任務は屢々數人の間に分擔さるるものなる事、労働要件の組織には協力、分業、分勞の三種類ある事、土地の組織には地方的分勞が存する事、人口數と人口の性質、資本の量、産業の性質、政治の組織は産業組織に大なる關係を有する事、大生産及び小生産に於ける各固有の利益ある事等を論じてある。

本文労働組織に於ける分業と分勞とは之を斯く區別せずして共に分業と稱することもある。それは労働の分科と云ふ點から見れば二者の相違は程度の相違に過ぎないからである。併し之は區別する方が研究上便利である。本文に於ては分業と分勞との限界が一寸明かでないやうであるが、分業は業體上の労働分科であつて、分勞は技術上の労働分科であると解すればよろしい。即ち生産事業が各種専門の業體、例へは本文の靴製造業、時計製造業、針製造業等の各業體に分れるのは分業であつて、一業體内の技術上の労働分科、例へは本文の靴製造業に於ける靴の部分的製作上の労働分科の如きは分勞である。

第四節土地の組織に於ける地域的分勞 (Territorial Division of Labor) は僅かな相違ではあるが地域的分業 (Territorial Division of Occupation) と云つた方が適當である。地域的分業は我國に於ても漸次著しくなるやうである。

第六節に於ける大生産と小生産との利益の比較は甚だ複雑にして不統一なる説明であるが、併し之等を綜合すれば大生産及び小生産の各比較的長所の大體を知ることが

出來ると思ふから、之には別に私見を加へぬ。只だ、大生産と稱するも小生産と稱するも、又大生産の利益と稱するも小生産の利益と稱するも比較的の見當であることを知らねばならぬ。

第三部 財の移動(交換論)

第一章 緒論

我々は既に經濟本論の二つの主要なる部分を研究し、財の消費と財の生産とを學んだ。之より進んで財は如何にして人の間に交換せらるるものであるか、其交換は如何なる手段によりて行はるるものであるか、又財を交換する割合は如何にして定まるかと云ふ問題を研究しなくてはならぬ。近世産業の状態に於ては各人は一般に自身自身に消費する高よりも多量の一物品若くは二三物品を生産する。而して他方に於ては各人は自分自身が生産しない所の甚だ多くの物品を消費する。斯ふ云ふことは人々が相互に財を交換するからこう出來得ることである。斯る財の移動 (Transfers of Goods)

交換

は吾人の經濟生活に於ける非常に大なる部分を成して居るもので、商人と稱する重要な産業上の階級は即ち斯る財の移動に關する仕事を行ふのである、商人の從事せる營業を稱して一般に商業と云ふ。併し乍ら、商業は多くの補助的事業の助けを要するもので、之等の補助的事業の中に於て交通通信の機關(即ち公道、鐵道、電信、電話)及び銀行の如きは特に顯著なるものである。併し之等商業の補助機關は全社會を助けて財の移動を欲する儘に行はしむるものであつて、其任務は全く商業補助に限られ居るものでないのである。

交換 (Exchange) 財の移動には二つの種類がある。一は贈與、遺産、相續、租税、料料の如き一方的の移動であつて、二は吾人が行ふ所の殆んど凡ての經濟的取引の場合に於けるが如き雙方的の移動である。吾人が茲に研究せむとする經濟學の部分は大部分の經濟學によりて交換論と稱せらるるものである。之を交換論と稱する所以は交換と云ふ語は雙方的の移動に關する語であるけれども、吾人の研究題目たる財の移動の殆んど全部は雙方的移動に屬するものであるからである。併し乍ら財の移動なる題

の下に論ずる所の貨幣及び銀行は一方的移動並に雙方的移動を助ける機關であるから吾人は本題目の意味を更に完全に云ひ表はすために交換なる語を用ひないで寧ろ財の移動なる語を用ひたのである。

財の交換は常に交換したる財の效用を増すものであるから、交換は生産の一部分であつて生産の一般綱目の下に取扱ふことの出来るものであることは明かである。併し乍ら交換の現象は甚だ特種にして而も甚だ重要な性質を有するものであるから、蓋し之を分離して交換其ものの綱目の下に取扱ふを便利とするものであると信ずる。

交換の利益

財の交換は取引雙方の相手の内單に一方のみが利益を得るものなるかの様に考へて居る人々が今日と雖も甚だ多い、時としては個人たると國民たることを問はず取引の一方の相手が利益を得ることになると他の方の相手は損をしなくてはならぬものであると云ふ様な考を有して居る人々がある。我々が一個の帽子を買ひ或は一重ねの衣服を買ふた場合に、我々には其取引より利益を得たものであると云ふ考へは別に起らないのであるが、併し乍ら若し買入るべき品物が、支拂ふ代金よりも一層

に必要なものであると云ふ考が吾人に起らないならば、吾人は決して其品物を買はぬに相違ないのは明かなことである。そこで何故に各人は交換をする場合に相互に利益を見出すものであるかと云ふことに就て以下少しく研究して見よう。先づ第一に(一)效用を決定する條件の一部分たる趣味と習慣とが人により國民により相違する事。一の物品が、それに對して餘り趣味を有して居ない所の個人若くは國民の手から、それに對して強き趣味を有して居る個人若くは國民の手に移ると、其物品の效用は此取引によりて増加することは明かである。第二に(二)自然の財源は國によりて異なる事。一國若くは一地方が豊富に有する所の財も、他の國若くは他の地方は之を生産するに非常なる困難を有することがある。即ち米國南部の住民と西北部の住民とは一方の棉花と他方の小麥とを交換することによりて雙方共に利益を生じ得るのである。第三に(三)其性質より云ふも熟練の上より云ふも個人々々には夫れ々職業上の適不過がある事。即ち或人は其性質若くは熟練の上から大工職に適し、或人は製粉業に適すとすれば、凡て斯の如き場合には自ら最も適したる仕事に従ひ其生産物の剩餘を以て、自己の欲す

る所の他人の製品と交換することが最も大なる利益を得る譯である。

二五二

財の移動を助くる機關 近世國民の間には財の移動を助長せしむる機關及び施設が大規模に存在して居る。之を簡單に列擧すれば次の通りである。(一)交通運輸の機關、(二)度量衡の制度、(三)貨幣、信用、銀行、(四)商業法規及び商業行政、之には其政府の商業的代表者として外國に駐在する領事の任務の如きをも含む、(五)凡ての種類の中繼人、例へば小賣商人及び卸賣商人の如き之に屬するのである。交換は生産の一部分であるからして之等交換の機關も又生産の機關である。財が最後の消費に適する所の時間的效用及び場所的效用は凡て之等の機關を通して得らるものである。

〔補論〕 交換と云はないで、財の移動と稱することも適當ではあるが、併し經濟學で研究するのは雙方的の財の移動であつて、一方的の移轉は只だ關係上より説明するに過ぎないものであるから、結局題目は財の移動として置いても内容は交換なる語で満たされる事になる。即ち名實共に一致しないことになるであらう。經濟學の本領

を示す上から交換と云つた方がよいと思ふ。第一編第一章の補論に於ける各○の力と云ふ議論を参照せよ。

本章の交換の利益に關する説明中、雙方の利益云々は注意を要することである。特に我國の商業家に取りては大なる教訓であらう。余は之に關して本年度早稻田大學商業講義録の商業研究講義の中に次の如く述べて置いた。

『商業』と云へば誰でも直に『金儲』と云ふことを聯想する。之は別に不思議なことはない。事實上商業は金儲の事業である。然るに此『金儲』なる語に就ては、現今普通の人も商人自身も、餘程間違つた考を有つて居る様である。

然らば今日一般に金儲と云ふことを如何に解して居るか云ふに、『一方に於て金儲即ち利益を得ると云ふことは、他方に於て損失を生せしむるものである。換言すれば利益を得るには取引相手を損失に陥らしめねばならぬ。自分の利益は相手の損失自分の損失は相手の利益』と斯ふ云ふ様な考を一般に有つて居る。金儲の意味が果して斯の如きものであるならば、其金儲を業とする商業なるものは、決して立派な事業

でない、苟も正義の觀念を有する人士は、之に従事するを耻としなくてはならぬ。従つて商業に従事する人々は何れも碌な人間ではない、つまり泥棒見た様な残忍冷酷な人々ばかりでなくてはならぬ筈である。之は實に奇怪千萬な話で、何人か雖も斯る話に同意するものはあるまい。即ち如何に商人嫌ひの人でもマサカ商人を以て泥棒と餘り異らぬ様な耻辱的の人間と考へる人は決してあるまいと思ふ。併し金儲と云ふことを今日一般に解して居る様な意味のものとすれば、ドウしても商人は斯る種類の卑むべき人間であると云ふことにならざるを得ぬ。然るに云ふ迄もなく、商業は文明社會に缺くべからざる大切なる事業であつて、商業が如何に大なる利益と便利とを社會に與ふるものであるかは、今日の社會より一切の商業を取り去つた場合を假定して見れば直に解る。商業は決して耻辱的の事業でも泥棒的の事業でもない。實に正々堂々たる文明的の事業である。従つて之に従事する人、即ち商人も正々堂々たる文明的の人間であるべきは勿論のことである。シテ見ると今日普通に解せられて居る金儲の意味がドウしても間違つて居るに相違ない。如何にも大に間

違つて居る。之は少し考へて見ると直に解ることであり、又苟も經濟的活動の何たるかを解するものは此間違を直に首肯し得るであらう。

我商業界が一般に甚だしく不道德であると云ふことは、何人も等しく認むる所である。即ち常に商業上の取引に不正手段が行はれる。相手に損失を與へて、己れ一人金儲をしようとする。之は如何にも卑劣極まる行爲であつて、識者の常に遺憾とする所である。一體どう云ふ譯で斯る不道德が我商業界に行はれて居るか云ふに、之には種々の原因があるが、以上の如く金儲の意味を一般に間違へて居ると云ふことが大なる原因の一つである。私は斷言する。即ち我商業道德の一大病根は、此所謂『間違つた金儲の意義』であつて、此一大病根のために、我商業道德は今や生きるか死ぬるか云ふ大病に罹つて居るのである。申す迄もなく商業を營む以上は金を儲けることに努力せねばならぬ。然るに若し自分が金を儲けると云ふことが相手に損失せしむると云ふことに依つて生ずるものであるならば、金儲をするが爲には、ドシドシ相手を損失せしむる工夫をしなくてはならぬ。商業に最も大なる成功を遂

げる人は最も多く他人を損失せしむる人であると云ふことになる。従つて出來得る限り他人を損失せしめて、己れ一人金儲しようとする。遂には色々な悪辣手段を案出して他人を欺くと云ふことになるのである。即ち之が我商業界を腐敗せしめた大なる原因の一であつて、我商業界の腐敗を一掃して道德の向上を計るには、此誤りたる金儲の意味を正さなければならぬ。勿論多くの商業取引の中には、自分が利益を得た場合に其取引相手が損失し、自分が損失した場合に其取引相手が利益を得る場合が決して無いとは云へぬ、併し乍ら斯る取引は取引條件に缺陷があるために生ずるものであつて、眞の取引と稱することは出來ぬ。元來商業取引と云ふものは、其取引を行ふ人と人との利益が相一致した場合にのみ行はるるものであつて、雙方の利益が相反した場合には決して成立せぬ。故に自分が利益を得る場合に、其取引相手も又利益を得ると云ふことが商業取引の一般の場合であると云はねばならぬ。例へば、品物を賣買する場合に、賣手は其品物を一定の價格で賣るを利益とするから賣るので、買手も又其品物を其價格で買ふことを利益とするから買ふのである。

即ち賣手と買手との利益が相一致して初めて買賣は成立する。之は商人同士の取引であつても、或は相手が商人でない場合の取引であつても同じ事で、商業の利益と云ふものは相手の信用を受くる程度が高くなれば高くなるほど増すものである。即ち商業上の成功は顧客の信用を得るにあらざれば望むことは出來ぬ。取引相手を常に損失ばかりさせる様なことをすれば決して顧客と云ふものは出來ない。其取引關係は直に斷絶して仕舞ふ。こんなことでは金儲は出來ぬ。自分も儲け相手も儲けると云ふのが金儲の本當の意味であると云ふ理由は之で明白であらう云々。

第二章 價 値

價値

價値の意義

經濟學に於て最も重要にして且つ最も困難なる問題の一たるが同時に交換及分配に於ける中心的問題は、價値 (Value) 決定の問題である。財が一の比例の下に相互に交換せらるるは如何なる譯であるか。其交換の比例が時により異なるは如何なる譯であるか。之れ吾人が將に研究せむとする問題である。

先づ第一に吾人は主觀的價值 (Subjective Value) 及び客觀的價值 (Objective Value) と稱せらるる二つの密接なる關係を有し而も截然異りたる觀念を有する價值が存在することを注意しなくてはならぬ。今之等の觀念が如何なるものであるか、其間の關係は如何なるものであるかを研究しなくてはならぬ。前に効用遞減の法則を研究して、或物品の量が増加すると限界効用は低下する、即ち吾人は其増加したる部分に對して漸次に顧みる程度が減して來るものであると云ふことを明かにした。吾人は先づ最も強烈なる慾望から充足を初むる、而して供給の高が増加するに従つて吾人の不足感は次第々々に弱くなつて來る。例へば、若し水の供給が非常に少ないとすれば吾人は之を單に飲用にのみ供するに相違ない、次に供給高が増して來ると浴用に供し、更に供給高が増して來ると皿だの衣服だの其他色々なものを洗ふことに用ふることになつて來る。更に供給高が増加すると其増加したる水の量は餘り吾人の所望 (Desire) を惹かないやうになつて、それだけの水の量を得るためには餘り犠牲を拂はないやうになり、且又それだけの水の量を失つても餘り困らないと云ふことになるに相違ない。吾人

主觀的價
値の定義

の一物品に附する經濟的評價の高低を決定するのは此所謂限界効用である。所望心を起さしむる力、限界効用、經濟的評價、之等の言葉は主觀的價值と云ふ言葉と同じ意義の言葉である。そこで簡單に定義を下すと、主觀的價值とは所望心を起さしむる力である。と云ふことが出来る。効用と主觀的價值とは密接なる關係を有するものであるけれども其間には截然たる區別があることを注意しなくてはならぬ。空氣の一立方尺は大なる効用を有するが、併し價值を有せない。而も物が價值を有するには効用を有せなくてはならぬ、何となれば所望心を起さしむるものは不足の状態に在る効用であるからである。故に吾人は之れ等の二つの間に於ける關係を次の如く約言することが出来る、即ち効用は慾望を充足する力である、主觀的價值は所望を起さしむる力である。

主觀的價
値の決定

主觀的價值は如何にして定まるか 以上によりて主觀的價值が如何にして定まるものであるかを知ることが最早容易のことである。主觀的價值は不足の状態に在る効用である。物が價值を有するには慾望を充足することの出来るものでなくてはならぬ、

客観的
価値の
観念

而して其存在の量が凡ての慾望を充足するには不足するものでなくてはならぬ。

客観的価値即ち交換価値の観念 客観的価値、即ち交換価値の観念は簡單なるものである。即ち客観的価値は財若くは勤勞が交換される數量上の比例である。されば若しバター一斤を砂糖四斤と交換すれば吾人はバター一斤は砂糖四斤の価値があると云ふことが出来る。即ち砂糖を以て云ひ表したバター一斤の価値は砂糖四斤である。今日に於ては大部分の物品は直接に金銭と云へる一物品と交換されるものであつて、物品若くは勤勞と交換されるのは單に間接のことに過ぎない。其結果として吾人は普通に金銭を以て表はされたる価値を念頭に浮べるのである、換言すれば價格 (Price) と云ふことの考へが浮ぶことになる。何となれば價格は金銭を以て表はされたる客観的価値であるからである。併し乍ら若し一物品の單位數量が一圓に對して交換せられ、同時に他の物品の單位數量が二圓に對して交換せられたりとすれば、前の物品の価値は後の物品の価値の半分であると云ふことは明かに解る。

客観的価値と主観的価値との關係 今之等二つの価値の觀念を比較し、而して之

價格

客観的
価値の
關係

等個々の價值から如何にして市價 (Market Price) が生ずるのであるかを研究しよう。今八人の農夫が各々一荷宛の穀物を賣るために市場に持つて來た、而して穀物を一荷宛買はむと欲する八人の買手が市場に來たと假定する。而して各賣手は各々穀物十石の價格を定め其價格以下には賣らない、各買手も又各々十石の價格を附けて其價格以上にては買はないものと假定して、先づ之等の評價を次の如きものとせよ。

買手の最高價格

六九圓、六七圓、六五圓、六三圓、六一圓、六〇圓、五九圓、五八圓

賣手の最低價格

七〇圓、六九圓、六八圓、六四圓、六二圓、六〇圓、五九圓、五八圓

各人は各々自分の利益と云ふことのみを考へて居つて、自分の利益點に達しなければ取引をしないものとすれば、十石當りの穀物の市價は幾何であらうか。

其市價は明かに七十圓であることは出來ぬ、何となればどの買手もそれだけ出すものはないからである。又六十五圓であることも出來ぬ、何となれば六十五圓の價格で

賣ることを希望する賣手は五人であつて、之を買ふことを欲するものは三人に過ぎないからである。そこで三人の買手に穀物を賣るために五人の賣手が競争して其価格は下らねばならぬ。斯ふ云有様で各評價に就て檢して見ると、吾人は次の如き計算を作ることが出来る。

價格六十四圓の場合

買手三人と賣手五人

價格六十三圓の場合

買手四人と賣手四人

價格六十二圓五十錢の場合

買手四人と賣手四人

價格六十二圓の場合

買手四人と賣手四人

價格六十一圓の場合

買手五人と賣手三人

之によりて、六十二圓と六十三圓(若くは其中間の價格)に於ては買手と賣手とが何れも四人宛であつて、穀物の四荷が之等の價格の範圍内の或價格で賣買されるものであることが明かである。これが需要と供給とが相等しき場合の價格である。

此市場に於て實際の買手となるは六十九圓、六十七圓、六十五圓、六十三圓と評價した人々である、之等の内の最後の買手即ち六十三圓と評價したる買手は限界的買手(Marginal Buyer)と稱せらるるものである、其理由は若し價格が上つて來ると先づ第一に買手の中から退く人であるからである。而して實際の賣手となるは六十二圓、六十圓、五十九圓、五十八圓の價格を定めたる人々である、而して之等の内の第一の賣手即ち六十二圓の價格を定めたる賣手は限界的賣手(Marginal Seller)と稱せらるる、其理由は價格が下がると先づ第一に賣手の中から退く人であるからである。限界的買手の評價即ち限界的需要價格は限界的賣手の評價即ち限界的供給と殆んど同一であることを注意せよ。そこで吾人は市價は供給の現在状態と需要の現在状態との間の平均

不足の諸原因

である。云ふことが出来る。需要を論じたる際に吾人は買手の評價の根底たる原因に就て充分に考究したのであるが、今や吾人は賣手の評價を定むる條件、即ち供給の根底たる原因に就て研究しなくてはならぬ。

不足の諸原因 不足は常に同一の原因より生ずるものではない。先づ第一に(一)例へば昔の畫家の畫いた古畫や、自然の珍品の如き絶對的に不足のものがある、斯ふ云ふものは全然其量を殖すことは出来ない。之等は經濟上餘り重要なものではない。第二に(二)社會に供給する財の生産高が一人若くは數人聯合の下に左右せらるる事實より生ずる所謂獨占的不足なるものがある。獨占財に就ては別に次章に於て詳しく論ずることとする。最後に(三)量を増加するためには犠牲を拂はねばならぬと云ふ事實のみによりて生ずる不足がある。吾人の消費する財の大部分は之に屬するものであつて、簡單に之等の財を稱して自由生産財と云つてよい。

生産費と價值 右の第三種の財の價值は凡ての財の價值を定むる所の原因と全く同一の原因によるもので、即ち不足の状態に在る効用によりて定まるものである。併

生産費と價值

し乍ら之等の自由に生産せられ得る財の場合は生産費が價值を決定するものであると云ふことが普通に唱へらるることである。之等の財の價格が其生産費より餘り離れて居らぬと云ふことは事實である。其理由は之を知るに難しいことはない、即ち若しも生産費が僅かに一圓しか掛つて居ない品物を五圓に賣ることとすれば、其品物の生産には大なる利益があるから、其品物の製造に従事する人々が多くなり、従つて供給は増加し、遂に價格は下落して先づ一圓幾らと云ふやうになるのである。然らば生産費を定むるものは何であるか。例へば、何故にパン屋は一斤のパンを八錢以下に賣ることとは出来ないのかと云ふ間に對して、これは原料たる小麦粉に對して一定の價格を支拂はねばならぬからである。と云ふのは、此間に對する解答ではなくして、解答の困難を一步先に延ばすに過ぎざるものである。故に一步を進めて然らば小麦粉の製造に直接若くは間接に與はる所の凡ての人々は何故にそれ以下の安い報酬で働かないのであるかと云ふと、之には二つの有力なる解答がある。即ち或場合に於ては安い報酬で働くよりも寧ろ遊んで居つた方がよいと考へる事、若くは其仕事をするがため

に同様に強き慾望を有する所の他の物品を生産する仕事を犠牲としなくてはならぬ事を知つて居るからである。茲に初めて吾人は物品の供給を制限する所の根本的の理由を發見するのである。即ち物品の供給は、更に働くこと云ふことに對する忍苦、若くは一物品を生産するために他物品を生産するの機會を犠牲に供する事によりて制限されるのである。除雪人の労働の供給は一部分は或子供等が雪除けに働くよりも櫛に乗つて遊ぶことを欲することにより、又一部分は働くことを欲して居る他の子供等が雪除けをなさしむる人々よりも他の人々の求めに應じて働く方が金が多く取れると云ふ機會を見出すことによりて制限されるものである。生産者が普通に生産費であると考へて居る所の労働費、原料費其他の費用の背後には尙ほ之等生産の實際的犠牲が存在するのである。併し乍ら之等の費用と犠牲との間の精確なる關係は常に之を知ることが容易でない、而して産業に於ける多くの問題を研究するに際しては生産の費用にのみ注意を拂へばそれで充分である。そこで吾人は以後生産費と云ふ用語は此意味に用ふることをする。

自由生産財の供給を左右する條件を論ずるに當り多くの學者は次の如く三種に分つて常として居る。(一)生産費に比例的増加なくして其量を増加することの出来る物品、(二)生産費に比例して其量を増加することの出来る物品、(三)比例以上の生産費を増加して初めて其量を増加し得らるる物品、即ち之である。之等三種の物品の相違を簡単に云ひ表はせば、(一)の場合に於ける生産は報酬遞増の法則若くは費用遞減の法則と一致し、(二)の場合に於ける生産は比例的報酬の法則に一致し、(三)の場合に於ける生産は報酬遞減の法則若くは費用遞増の法則と一致するものである。

報酬遞増の法則が、凡ての市場が充分に供給を受けるまで無限に行はれると云ふ産業が存在するかどうかと云ふ問題が生ずるのであるが、之は運輸業若くは其他の自然的獨占案の場合に於ては行はるるかも知れぬ、併し餘程それも疑しいことである。競争の行はるる産業には此法則が行はれる上に制限が存するのは明かなことである。農業に於ても製造業に於ても商業に於ても最初は報酬の遞増であつて、それから暫くの間は報酬が不變の状態となり、其次には其事業の規模が充實した後になると報酬の遞

減となるのである。早かれ晚かれ能率の最大限度に達するもので、其次に費用遞増の法則が作用を始むるのである。農業に於ては此限度に達することが寧ろ速かであつて、織物工場の如きは之に反して餘程大規模に發展しないと此能率の最大限度には達せられぬものである。若し報酬遞増の法則の作用に制限がないものとすれば、最大なる生産者は凡ての他の生産者よりも低廉に生産品を賣出すことが出来るから、獨占業の如きは全産業の上に其勢力を逞ふするに至るに相違ない。

限界的費用の意義 現時の産業界に於ては、生産の實際の費用は其供給の大小を問はず供給の凡ての單位に對して同じ額ではない。即ち農業の場合に於て、或る農夫は耕地の地力若くは耕地の位置に就て他の農夫よりも有利の地位を有して居る。製造業に於ては其相違は農業に於けるが如く大なるものではないが、併し矢張り相當に利不利の相違がある。即ち或企業家は他の企業家に比して一層多く組織的能力を有して居るとか、或者は原料品若くは市場等に關して他に比し優れたる位置を有して居ると云ふやうな相違がある。従つて同一の生産品でも生産者を異にするに従つて其生産費に

限界的費用の意義

相違があるのは明かである。斯くの如く生産費に相違があることすれば供給の側から云つて價格を決定する所の生産費は何れの生産費であるかと云ふ問題が生ずる。其生産費は最小の生産費であることも平均の生産費であることも出来ない、何となれば之等の孰れの場合に於ても生産物の他の大なる部分は其生産費よりも小なる價格で賣らねばならぬこととなるからである。是に於て價格を決定するものは最大の生産費であること云ふ結論に到達する、吾人は此最大の生産費を稱して現存の需要と平均せる所の供給品を生産するに要するに限界的費用 (Marginal Costs) とも云ふことが出来る。

競争に對する障礙 完全なる競争が行はれ得るためには、各生産者が常に各自の經濟的利益に應じて意の如く行動することが必要である、即ち生産者は忽ちの間に而も産業の惰性より生ずる損夫なくして、其勞力資本及び土地を一事業から他事業に移し若くは全く從來の事業より其勞力資本及び土地を回收すると云ふことが出来なくてはならぬのであるが、事實上斯の如きことは容易に行はるるものではない、従つて日々の物價、即ち所謂市價は此障礙の作用と、需要状態の變化と、生産費の變化とによりて動

競争に對する障礙

搖するものである。併し乍ら競争財の市價には、又直に競争の作用が現れ、而して競争が自由に完全に行はるる範圍内で需要と供給との間に、限界效用と限界費用との間に、生産者と消費者との間に調和を生ずるやうになつて來るから餘り大なる動搖は起らないものである。

近時の産業に於ける完全なる競争價格の實現を妨ぐる所の數種の障礙に就て以下簡明に説明しよう。

習慣

(一) 習慣 競争に對する障礙として吾人の注意せざるべからざるものは習慣の力である。特に小賣市場に於ては習慣の力は物品の價格を或期間通常の價格以上の高價に在らしむることがある。併し乍ら習慣の力で通常價格以下の低價を生せしむることはない。尤も販賣人が其顧客と共に或經濟上の利益を分たむと欲する場合にはさうではないが、それ以外の場合に於ては習慣の力で價格を安くすることは出来ない。そんな安價で品物を賣つて居ると小賣商人は倒れて仕舞ふ。

(二) 労働の不融通性 第二の障礙は労働の不融通性である。價值の法則は競争に

労働の不融通性

よりて労働者が自由に場所を移轉し、職業を轉することを前提としたものであるが、實際に於ける事實は此前提と一致しないことが甚だ多い。文明の進歩と共に斯る競争が段々實現に近づくべきものであることは眞理であるけれども今日に於ける事實はさうでない。併し労働の需要の少ない處から、多い處に向つて労働者が移ることは以前よりも餘程容易になつて來た。概して云へば労働者が其労働を一の産業より他の産業に換へる事も以前よりは餘程容易になつて來た。特に今日に於ては兩親が其子供のために職業を選擇することは大に容易になつて來た。併し乍ら労働者は動もすれば今日に於てすら家庭の關係や貧困や無識のために割合のよい場所に移つて働くことに差支があり、且つ又同様の理由によりて一層多くの利益を得べき職業に移ることも多くの場合差支があるから、其結果として各地に於ける労働者若くは各職業に於ける労働者は其犠牲に比例する報酬を受くることの出来ないこと云ふ事實が屢々生ずるのである。斯る場合に於ては、縦合物品の供給が生産費によりて決定せらるるにしても、尙ほ諸種の物品に於ける生産費は實際に加へられたる犠牲に比例しない。之は明かに價值の

原則に對する例外の場合である。

(三) 不公平なる課税 課税を生産費の一部分として考へない場合には税課の公平は又價値の原則に對する例外たるものである。若し凡ての生産物が同様の比例を以て價格を高むるやうに、凡ての産業の上に公平なる比例を以て課税するものとすれば諸種の物品を相互に交換する比例は同一の割合にあるを得るもので、換言すれば、價値は之がために何等の影響を受けないものであるが、併し乍ら斯る公平なる課税は明かに不可能のことであるから、吾人は此點に於ても價値の原則を制限するの止を得ざるに至るのである。

(四) 無謀の生産 今日の複雑なる産業組織に於ては、生産者は目前と掛け離れたる將來と、遠隔なる市場とに對する生産に對して、競争者が如何なる生産を爲しつつあるかをも知らずして、計畫を立てなくてはならぬのである。斯る状態に在りては、或種物品の生産が、其物品に對する需要以上に超過し、従つて價格下落して生産費を償ふ能はざるに至ることあるは見易き道理である。而して斯く下落したる價格は企業家が其

物品の生産を減じて供給が需要と平均するに至るまでは續くものである。近時の産業に於ける特種の状態は斯る結果を大に誘致する力が強いのである。一生産者が其資本の大なる額を高價なる建物及び機械に注入した場合に於て、生産品の價格が餘り下落して凡ての費用を償ふことが出来ないやうになつたとしても、斯る場合に於て尙ほ其生産者が生産を續けると云ふことは有り得べからざることではない。何となれば斯の如き大なる固定資本を使用せずに休ませて置く時は、之等を盛んに使用する場合に生ずる損傷よりも更に大なる損傷を實際に生ずるの事實は先づ問はずとも、其資本生産の中に含まれて居る犠牲に對する報酬は全く生しないことになるからである。であるから、其生産者は最早損失と利益との間に眼を着けるものではなくして同しく損失をする中にも其損失の多少と云ふことに眼を着け、出來得る限り損失を小ならしむる手段を取りて其機械や建物を使用し縱令其生産品が市場に溢れて居る場合ですら、矢張り其生産を續けると云ふことになるのである。近時に於ける産業界の不景氣が、其一度び起つた場合に甚だ長く續いて大なる困難を生ずるのは此理由に基くものである。

供給が甚だ増加して、有利に需要と相合する點を通り越すと、其價格が再び相當なる競争線の價格に回復するには餘程の時日を要するもので、仲々容易に回復することの出来ないものである。

主産物
副産物

(五) 主産物及び副産物の價値 第五の場合、即ち主産物及び副産物の場合は價値の原則と全く一致するが、併し之には特別の注意を要することがある。一の主なる製品の從屬物として一つ若くは一つ以上の從屬製品を生ずる場合に、其主なる製品を主産物と云ひ從屬せる製品を副産物と云ふ。即ち、小麦は主産物であつて、麥稈は副産物である。更に一例を挙げれば、スタンダード石油會社の中心的事業は未製の石油を燈火用石油に精製することであるが、併し乍ら科學的發見の續出によりて以前には捨てて顧みなかつた所の未製石油の内の或部分を新しき用途に適せしむることが出来るやうになつた。精製石油の副産物の内には機械油、アニリン染料、パラフィン等がある。斯る場合に於て、價値の原則は之を適用する上に於て複雑であると云ふことは明かである。先づ注意を要するは、生産物の合計したる價値は總生産費に

よりて定まるものであると云ふ一般的原则である。生産者は勿論主産物及び副産物をして最大なる利益を擧げ得るやうに鹽梅する。之は普通に主産物を有利なる價格に於て賣捌くことを得るやうに生産し、同時に副産物を確實に賣れる如き價格に於て賣捌くやうにするのである。斯る場合に於て若しも主産物に對する需要が増加するならば其生産高も又増加する、而して自然副産物の量が増加するからして、先づ容易に有り得べからざることではあるが其副産物に對する需要が主産物と同時に且つ同じ割合を以て増加することが無い限りは、之等の副産物は一層安い價格を以て賣られねはならぬ。然るに時としては副産物に對する需要が甚だしく増加して、爲に主産物の價格を主とせずして副産物の價格を主として生産を鹽梅する方が利益となる場合が生ずるのである。例へば、羊肉及び羊毛の場合に於て或飼羊者は其主産物が羊毛であつて副産物が羊肉であるやうに鹽梅して居ると同時に、他の飼羊者は之と正反對の組織を立てて居ることがある。そこで吾人は結論として、主産物及び副産物の全價格は全生産費によりて定まり、其比較的價格は主副各生産物に對

する比較的需要によりて定まるものであると云ふことが出来る。

二七六

〔補論〕 價値の研究は經濟學に於て最も困難なるものの一である。本章の説明も甚だ複雑で初學者に取りては中々其要領を捕捉することは出来まいと思ふ。

失つ本文に於ては價値を(一)主觀的價値(二)客觀的價値即ち交換價値との二つに分つて居るが、主觀的價値、客觀的價値と云ふ語は餘程曖昧な語であつて、學者が異なることに其意味も色々異つて居る。之等に就て一々茲に議論をすると却つて初學者に取りては一は解り難くなるから詳しい議論は省くこととするが、併し乍ら主觀的價値、客觀的價値を本文に述べてあるやうな意味に解すれば、(一)主觀的價値を使用價値(Value in use)とし、(二)客觀的價値即ち交換價値など紛はしい語を用ひないで、單に交換價値(Value in exchange)とした方がよい。使用價値とは自ら財を使用する場合の價値であつて、本文主觀的價値としての定義、即ち『所望心を起さしむる力』と結局の所は同じことである、所望心を起さしむる力と云ふ語も頗る曖昧な語であるが、併し原著者の意味は

明かに財其ものの有する一定の力と云ふ客觀的の意味ではなくして、財を使用する上に於て、其財の效用に對して人の認むる値踏みの高低と云ふ主觀的の意味であることは前後の關係より知ることが出来る。所望心を起さしむる力ではドウモ此意味が嚴格に表はれて居ない。次に交換價値の説明は大體から本文の所謂客觀的價値としての説明が簡單でよい。併し勤勞と云ふ語だけは除くべきものである。原著書は財を廣く解するから勤勞をも其の中に入れて居るのであるが、勤勞を財の中に入るの不當なるは前にも述べた通りである。財を廣く見て勤勞をも財とする原著者が財若くは勤勞など云つて居るのも滑稽で、財に對する觀念に無理な附會をして居るから、斯かる無駄な云ひ表はし方が幾つでも生ずるのである。余一個の考から云へば、人の勤勞に對しては、經濟學上の價値なるものを認むる事が出来ない。従つて勤勞には使用價値も交換價値も認むることが出来ない。更らに進んで勤勞には經濟學上の所謂效用をも認むることが出来ない。それは經濟的活動の主體たる人間其ものに對して經濟學上效用を認め、價値を認め、使用價値や交換價値や、更に進んでは、價格を認めると云ふこと

同じであるからである。勤勞が勤勞としての獨特の地位を有するは、人間が人間としての獨特の地位を有するに等し。決して經濟學上評價の目的物ではない。次に價格に對する本文の説明も勤勞を含まざる限りに於いて、簡單明瞭にして正當なるものである。

以上は本章の根本觀念に就て論したのであるが、尙ほ本章全體に亘りて論すべきことは甚だ多い。併し乍ら以上の根本的觀念に關する議論を一通り參照して本文を研究すれば價值に關する概要は充分に了解することが出来ると思ふから詳細の議論は略することとする。之を要するに效用と價值との關係、價值と價格との關係を了解すれば、本章全體の研究は別に困難なく出来るであらう。

第三章 獨占及び獨占價值

前章に於て吾人は財が競争状態の下に自由に生産せらるる場合に於ては需要の方面

に於ける價值は限界效用によりて決定し、供給の方面に於ける價值は限界生産費によりて決定するものであると論結した。それと同時に凡の財は斯の如く自由に生産せらるるものでないことを指摘したのである。此例外に屬する財の内でも大にして且つ最も重要な財の種類は獨占事業家によりて生産せらるる財より成るものである。故に價值の原則をして完たからしむるために吾人は今や如何にして獨占價值が決定するものであるかを研究しなくてはならぬ。而して其了解を容易ならしむるがために先づ第一に獨占とは何であるかと云ふことから述べる。

定義と分類 次の定義をよく注意して一言一句の意味を緻密に研究することは諸君に取りて必要なことである。獨占(Monopoly)とは或種の事業に従事する一人以上の事業家の活動が鞏固に結合したものであつて、特に價格に關して殆んど排地的の支配力を有するものである。

獨占到對する諸學者の分類は甚だ澤山あるが、併し乍ら次に掲ぐる分類は各種の獨占到就て其起原と實際の性質とを云ひ現はして居る最も適當な分類であると思ふ。即

獨占の定義

獨占の分類

ち、

甲 社會的獨占 (Social Monopolies)

第一 公益的獨占 (General Welfare Monopolies)

一 專賣特許權 (Patents)

二 著作權 (Copyrights)

三 商標權 (Trade-marks)

四 公的消費獨占 (Public Consumption Monopolies)

五 財政的獨占 (Fiscal Monopolies)

第二 特權的獨占 (Special Privilege Monopolies)

一 公惠に基く獨占 (Those based on Public Favoritism)

二 私惠に基く獨占 (Those based on Private Favoritism)

乙 自然的獨占 (Natural Monopolies)

第一 原料供給の制限より生ずる獨占 (Those arising from limitation of supply of raw material)

第二 事業其物の特質より生ずる獨占 (Those arising from peculiar properties inherent in the business)

第三 秘密より生ずる獨占 (Those arising from secrecy)

之れである。

社會的獨占 事業其物の性質に依るにあらすして、法令の規定に依るか、若くは自然的獨占業と極めて密接なる關係を有し其性質の幾分を帶ぶることに依りて獨占業となりたる事業を社會的獨占業と云ふのである。

昔時に於ては屢々國王及び女王が其お氣に入りの臣下に獨占的事業の特權を與へ、且つ又それ等の人々には皆斯る事業に従事してもよいと云ふ許可を與へたものである併し乍ら斯る獨占は一般のもの甚だ忌む所となり遂に主權者に迫りて之が許容を廢せしむるようになった。今日政府は專賣特許法及び著作權法を以て獨占權を制定して

社會的獨占

居るのであるが、併し之等は一般公共の利益のために設けたものである。著作家及び發明家は一定期間に對して其作物に獨占權を許容せらるる。之等の獨占は之がため發明及び著述に刺戟を與へると云ふ理由によりて恐らく正當なものであらう。而も凡ての智識的作物は部分的には社會的產物で、即ち之等は大きな程度に於て其以前に於ける作物に負ふものであると云ふことを忘れてはならぬ。即ち電話の發明は其一世紀以前の科學的發明及び線を通じて音波を送る發見に負ふ所が甚だ多いのであるが、而もそれらの研究の大部分は殆んど幾許の報酬をも受けて居ないのである。概していへば、專賣特許及び著作權は共に有益なる制度であるが、併し乍ら、二人の著作家が全く同一の書を著はすと云ふことは決して有り得べからざることであるから、專賣特許の方は著作權のやうに強固なる基礎の上に立つべきものではないと云ふことは經驗上より云つて蓋し疑なき所である。

商標權は專賣特許及び著作權と同じく法律的の獨占である。近時廣告の放縱となれる關係上此商標は甚だ有益なるものとなつて來た。

公的消費獨占及び財政的獨占は特に説明を要する語であつて之等は單に政府が之を設けたる目的の上から區別するものである。即ち若し政府が消費を調節するの目的を以て酒類の賣買の獨占を自ら行ひ若くは、他に之を特許するとすれば、其獨占は公的消費獨占である。然るに若し其主たる目的が消費の調節にあらずして、國庫の收入に在る場合は、其獨占は財政的獨占である。之等二つの獨占は動もすれば甚だ入り組んで居つて之を區別することが困難であるか、若くは全然不可能である場合がある。

前の分類の通り特權的獨占は二つの種類に分れて居る。特別課税の利益を受くる獨占若くは他の法律的利益を受くる獨占は之を稱して公惠に基く獨占と云ふ。特權的獨占の他の種類は、他の獨占特に鐵道の如き自然的獨占によりて與へらるる特別の恩惠より生ずる所の獨占より成るものである。

自然的獨占

↓

自然的獨占とは社會的の力より離れて其存在が自然の力に基く所の

獨占である。之等の獨占は人間の意志若くは希望によりて如何ともすべからざるもので、時としては人間の意志や希望に直接相反する場合すらあるのである。前の分類に

自然的
獨占の法則

用ひたる吾人の用語は之等の獨占が生じたる種々なる源を充分に明かならしむるものであると信ずる。特に凡ての獨占中最も重要なものは第二種に屬する自然的獨占であつて、之に屬する重なるものは、車道、街道、運河、波戸場、橋梁、渡船場、水路、港灣、燈臺、鐵道、電信、電話、郵便、電燈、水道、瓦斯、各種の街鐵である。聯合の結果として生ずる利得の確實なる増加を見る場合には常に凡ての障礙に打ち勝つ所の獨占が生ずる傾向がある。獨占の結果として生ずる此利得の増加は、特に好位置を占めて居る事業及び機械工場設備に必要缺くべからざる勤勞及び物品を供給するが如き事業には必ず生ずるものである。之を稱して自然的獨占の法則によつてよろしい。

近年に至り多くの經濟學者は、獨占は右に示したるが如き特種の利益なくして只だ大資本の卓絶せる力と大集中の優れたる經濟とによりて自然に生じ得るものであると論じて居る。此所謂資本的獨占到關する論斷に同意するを得ざる凡ての理由を茲に述べることは紙數の許さざる所であるが併し乍ら一二の最も大なる理由だけを述べることにする。大資本に附着せる獨占的傾向を主張するために之等の學者が例として示せ

資本的
獨占

るものに就てよく研究して見ると、既に吾人が説明して置いた所の獨占利益の一つ若くはそれ以上を受けないと云ふやうな獨占の場合は一も存在しないのである。更に大資本の所有は表面から見ると大なる勢力を振ふやうに思はれるが、併しそれ等の多くの場合に就て之を見るに何れも其存在が永續せぬものであるから、之等を以て議論の根底とするの理由は殆んど徹らぬ。結局するに、大資本より如何なる利益が生じても、其資本は今や甚だ世の中に多くなつて來たから、少し利益を得る點を見出すと共に直に競争的生産設備を生ずるものであると云ふことを吾人は記憶せねばならぬ。

そこで吾人は結局次の如く述べる事が出来る。即ち、右に説明したる理由によりて自然に競争が行はれないか若くは其競争が永く行はれないと云ふ種類の産業の範圍は餘程廣いものであつて尙ほ漸次其範圍は擴大して居る。次に無謀なる社會的活動によりて容易に生じ得る獨占にして國民が漸次智慮を増すに従つて次第に其範圍が狭くなつて來るやうに思はれる獨占的産業の範圍がある。最後に第三の範圍として、自然的獨占が存在しない、又存在することの出來ない種類のもので且つ社會的獨占も生ず

獨占價格

ることのないと信せられる種類の産業があるのである。

獨占價格の決定 吾人は既に獨占が如何なるものであるかを研究したのであるから、今度は、獨占的價值若くは獨占價格は如何にして決定するかと云ふ問題を解決するに努力して見よう。

先づ第一に、吾人は獨占價值は他の價值と同様に需要と供給との間の關係によりて決定し、而して需要は此場合に於ても他の場合と同様に限界效用によりて決定するものであると云ふことが出来る。併し乍ら供給は競争の下に於けるが如く、生産費によりて決定するものではなくして、需要の現狀に照らして出來得る限り最高限度の收入を得むとする獨占事業家の希望によりて決定するものである。換言すれば、競争以外に立ち單に需要のみによりて動く所の獨占事業家は最も大なる純收入を得べき點に價格が達するやうに供給の高を需要の高に當て依めるのである。然らば如何なる程度に價格を決定すべきか、又幾許の量を供給すべきか、換言すれば最も大なる純收入を得べき點は如何と云ふことに就ては、獨占事業家は識不識の間に次の諸原則を遵守するも

のである。

- (一) 獨占事業家は其獨占生産物の供給が増加すると、従つて限界效用が低下して來る、従つて其生産物に對する需要價格が低下して來る、之に反して供給の漸減は限界效用を高め、従つて其價格を騰貴せしむるものと云ふことを充分に理解して居る。
- (二) 生産の費用の内には供給高を變ずるに従つて殆んど一定の比例を以て變ずる或種の費用がある。即ち若し生産高を倍加する時は原料品の費用も丁度倍加するが如き之れである。斯る費用は之を可變的費用と云ふのである。
- (三) 生産物の高の如何に拘らず、或程度までは殆んど同一であると云ふ種類の他の費用がある。之等は不變的費用と稱せらるるものであつて、機械設備の費用、監督者の供料、負債の利子等は之に屬するものである。

以上列記したる原則によりて之を見るに、獨占事業家は其事業より最大限度の純收入を得むとするものであるから、生産品の價格を定むるに當りて不變的費用には何等

の注意をも拂はずして、其生産物に對する豫想的需要と價格との關係に於ては單に可變的費用にのみ著眼することになる。

獨占價格
決定の例

例解

之等の原則の作用を例によりて説明して見よう。次の表に於て種々なる價格に於ける獨占財の賣れ高、其結果たる總收入、可變的費用、不變的費用、總費用、及び最後に純收入若くは獨占利益を順次各欄に於て表はすものとする。

單位價格	賣上個數	總收入	單位當り可變的費用	總可變的費用	不變的費用	總費用	純收入
10圓	600,000個	6,000,000圓	3圓	1,800,000圓	500,000圓	2,300,000圓	3,700,000圓
9圓	800,000個	7,200,000圓	3圓	2,400,000圓	500,000圓	2,900,000圓	4,300,000圓
8圓	1,000,000個	8,000,000圓	3圓	3,000,000圓	500,000圓	3,500,000圓	4,500,000圓
7圓	1,200,000個	8,400,000圓	3圓	3,600,000圓	500,000圓	4,100,000圓	4,300,000圓
6圓	1,400,000個	8,400,000圓	3圓	4,200,000圓	500,000圓	4,700,000圓	3,700,000圓
5圓	1,600,000個	8,000,000圓	3圓	4,800,000圓	500,000圓	5,300,000圓	2,700,000圓
4圓	1,800,000個	7,200,000圓	3圓	5,400,000圓	500,000圓	5,900,000圓	1,300,000圓
3圓	2,000,000個	6,000,000圓	3圓	6,000,000圓	500,000圓	6,500,000圓	0
2圓	2,200,000個	4,400,000圓	3圓	6,600,000圓	500,000圓	7,100,000圓	-2,700,000圓
1圓	2,400,000個	2,400,000圓	3圓	7,200,000圓	500,000圓	7,700,000圓	-5,300,000圓

此表を研究して見ると、茲に假定したる場合に於て、獨占價格は六錢に定まること
の理由が解る。若し競争の行はれる生産業である場合には供給は相當の價格が得らる
る限りは漸次増加するに相違ない。此例に於て云へば、生産費以上に利益を得るやう
に行はれ得る生産の最低價格は四錢であるに相違ない。であるから四錢の價格は競争
の行はるる生産業に於ける價格で、即ち限界生産費に對する限界效用の平衡によりて
定まりたる價格でなくてはならぬ。併し乍ら獨占事業家は自ら供給高を左右し得る力
を生産の上に有して居るのであるから、限界效用と従つて需要とが六錢の價格を定め、
而して二萬五千圓と云ふ最大なる純收入を生ずべき供給高たる即ち二百五十萬個だけ
に生産を制限することになるのである。

更に之を圖によりて研究して見ると甚だ興味がある。次の圖に於て吾人は獨占事業
家が報酬遞増の法則に適合する財を生産する只だ一つの場合を假定する。

圖に於て、曲線 ab は生産費の變動を表はすもので、従つて此曲線を供給曲線と云
ふ。曲線 cd は需要の状態を表はすもので、之を需要曲線と云ふ。線 ef は競争的狀

時は二千圓の不足即ち損失を生じ、七錢の時は四千圓の純収入を生じ、六錢の時は純収入皆無となり、五錢の時は一萬五千圓の損失となるのである。故に獨占業は此種の租税によりて其利益を大に減殺さるるものであるけれども、消費者は餘義なく獨占財の單位量に付き一錢宛高く支拂はねばならぬこととなるのである。であるから此租税より社會が受けることの出来る利益は全部若くは一部分物品價格の増加によりて差引かるることとなるのである。併し乍ら若しも高き價格の場合に於ける需要が、低き價格の場合に於て得べき純収入と同額の純収入を得るに足らざる場合は、右の如き價格の騰貴は行はれまいと思ふ。故に吾人は、定額課税若くは獨占業の純収入に對する課税の額は、價格の變動のために全部若くは部分的に變ずるものではない、之に反して生産の量に比例して課する租税の額は、可變的費用を増加するものであるから、其全部若くは一部分が價格の變動によりて變ずるものであると云ふことを斷定することが出来る。

諸君は右に示したる數字の例解に倣ひて之等獨占到關する説明に假定的場合を設け

且つ獨占價格の決定を例證するに用ひたる圖と同一のものを畫き、以て之等を一々研究して見られたら甚だ有益であらうと思ふ。

獨占價格の法則

獨占價格の法則 獨占財の價格は全然獨占事業家の意志によりて定まるものであると云ふことが屢々稱せられて居るのであるが、嚴格なる意味から云ふと之は眞理でない。前に説明したるが如く、獨占事業家は最も大なる純収入を得べき價格を定めむとする所の經濟的動氣によりて左右せらるるものである。故に獨占價格の決定に大なる影響を與ふる所の或條件が需要の方面にも存するのである。吾人は之等條件の内の最も重要なものを次の如く摘記することが出来る。之れは獨占價格の法則と稱することの出来るものである。獨占財及び獨占勤勞に對する日常使用の程度が大なれば大なる程、一般の經濟的幸福的平均は益々高くなるものである、而して一般の富の費消が進めば進む程、最も大なる純収入を生ずべき獨占價格は益々高くなるものである。故に獨占事業はそれ自身の努力に依らずして一國に於ける漸増せる富の分配を受け、而も其富の大なる部分を吸収するものである。例へば北米合衆國に於ては獨逸若くは其他

の歐洲諸國に於けるよりも獨占事業が一層有利に經營されて居るのであるが、之は北米合衆國に於ては他の諸原因に加ふるに自由に消費すべき大なる富と、之を自由に消費すべき大なる意志とがあるからである。此獨占價格の法則に就て他の實例を求めて研究することは諸君に取りて興味あることで且つ有益なことであらうと信ずる。

自然的獨
占に對す
る政策

自然的獨占到對する政策　永き以前に英國の優れたる一事業家は合同の可能なる事業には競争は不可能のものであると云ふことを云つて居る。今日に於ては第二種の自然的獨占業（前の分類を見よ）の場合には常に合同は行はれる。實に斯る事業に於ける合同は避くべからざるものである。若し一市に於ける各々百萬圓の資本を有する二瓦斯會社が、合同しない場合に一割の利益を擧げ得るとすれば、合同した場合には一割以上の利益を擧げ得るであらう。之等の會社を合同せしめむとする力は一定のものではないにしても、常に重力の吸引力の如く働くものである。

此點に於ける經驗上の證據は甚だ多く存在する。斯る種類の事業には競争は決して行はるるものではない。尤も合同の條件を決定するために時として戦を生ずること

がある、而して此關係に於て「戰」なる語を用ゆる場合に夫れ「瓦斯戰」、「何々戰」と云ふやうな通俗的の言葉を用ゆるのは實に當て愜つて居るのである。扱て然らば、之等の自然的獨占業に處すべき政府の政策は如何。吾人は斯る獨占業の管理及經營を私人の手より政府の手に移すべきものであらうか。之等自然的獨占業の内には、既に長き以前より政府の管理經營に屬し居りて、吾人が最早それ等に對して私人的企業の可能性なる事業としての考を少しも持たないやうな種類のものがある。例へば道路、街路、郵便、運河の如きはこれである。他の自然的獨占業に關しても、少くとも其特許を制限して、後日に至り都合上確實に容易に之等を政府の事業に變ずることを得ることの公權を留保して置くことを可とするであらう。

官業の利
益

官業の利益　自然的獨占業を官業とするの利益とせらるる主要なるものを茲に簡単に述べる必要がある。

(一) 一般的繁榮の増進　現今の私人經營の獨占業より生ずる大なる收入を社會一般に散布することは、一般的繁榮を増進すると同時に、一方に於ては富の過當なる集

中を防ぐに至るであらう。米國に於ける巨大なる私人の富の大部分は自然的獨占業によりて收められたものである。斯る私人的經營の獨占業が政府の經營に移されることになれば、それより生ずる利得は次の二方法の何れかによりて一般民衆に散布せられ得るものであることを注意しなくてはならぬ。即ち第一は利益を計算せずして單に生産費を償ふことの出来る程度に價格を低減し一般國民の利益を圖る事例へば郵便電信事務の如きは何れの國に於ても普通に此方法によるものである。第二は其獨占業より生ずべき利益を以て租税を減するか、或は其他の方法によりて國民の利益を圖るために使用する事である。

(二) 節約 自然的獨占業に生ずる一時的の大競争が實に大なる富の空費に終るものであることは幾多の實例によりて明かである。過去五十年間に於て北米合衆國の鐵道建設及び作業に就て之を見るときは、斯る競争のために徒費せられたる經濟的財は、若し之を經濟的に使用するとすれば現時同國に於ける凡ての國民に愉快なる家庭を築かしむることの充分に出来る位の巨額に達するものとせられて居る。それ故に此種の

獨占業は民營に委するよりも官營とする方が餘程經濟的であると云ふことを主張するのは大に根據のあることである。

獨占的性質の事業は之を政府に於て經營する場合には、例へば水道、瓦斯、電燈等の如き種々なる事業を結び合せて經營すると云ふことにすれば大なる節約が得らるるもので、且つ之がために其經營上の好果を得ることが出来る様に思はれる。個人的企業が常に如何なる場合に於ても政府企業より優れたものであると云ふ者は最早明かに過ぎ去りつつある考で、單に誤信に過ぎざるものである。各々其れ自身の特質に於て夫れ／＼長所を有するものであると云ふのが事實である。

個人企業が常に政府企業に比して、自ら進んで改良を加へると云ふ點に於て、優れて居ると云ふ主張も正當のものではない。米國の私設電信會社が費用が嵩むたために行はなかつた所の改良を英國の政府は其經營せる電信事業に行つたではないか。又米國の郵便局は私設郵送會社に先つて爲替事務を發達せしめたではないか。英國の郵便貯蓄銀行は率先して支店の設置及び紙片に切手を貼附して蓄積の用に供することを實行

し、以て私設貯蓄銀行に手本を示したではないか。

(三) 政治の廓清 私人獨占業は政府の権力の下に監督を受けねばならぬ。併し乍ら監督は私人の事業を干渉するの意味になる。而して此干渉が不正事件を惹起するのである。米國の如きは一年と雖も特許權の授與若くは擴張に關し、若くは特權を受けむとし或は義務より免れむとし或は當然受くべき刑罰より免れむとするがために私人獨占業者が講ずる色々の策より生ずる賄賂事件や不正事件の露現のために問題を起さない年はないのである。獨占事件に最も精通したる一法律家が最近公然と述べた所によれば、獨占業を營む私設會社が特許に對して支拂はねばならぬ所の出金、即ち特許を得るために必要な賄賂金と云ふものが之等會社の事業費の内の一定綱目となつて居ることの事である。之は米國に於ける各市役所などにも多くの例がある。斯る種類の獨占業を政府が管理し經營することになれば、公益と私益とは相互に相一致するものであつて、而して善良なる國民は之を政治廓清の原因として一致して賛同することが出来る。

(四) 有害なる社會的獨占業の除去

多くの社會的獨占業は有益なるものであるが、併し乍ら中には社會の最良なる利益を害する獨占が存在するものであることは今日一般に世人の認むる所である。之等の有害なる社會的獨占業の或種類のものは、例へば相手の競争者よりも特に低率の運賃の適用を自然的獨占業から受くるの特惠によりて獨占的地位を得て居るのである。若し凡ての國民が何人でも自然的獨占業から正當にして平等なる取扱を受けることが出来ることとすれば、競争の範圍は擴がつて來て獨占の範圍は狭くなつて來るのである。併し乍ら自然的獨占業が個人の手にある間は斯る正當にして公平なる取扱を期待することを得るや否やは疑問である。

ジェヴォンズの定則

英國の經濟學者ジェヴォンズは獨占業の政府經營に就て詳細なる研究を遂げた結果、如何なる種類の獨占業が政府經營として最も安全なるものであるかを判断すべき或一般的の定則即ち標準があることを斷定した。之等の標準を簡単に述べれば次の通りである。(一)例へば郵便事務に於けるが如く其性質が規則正しく行はれる事業でなくてはならぬ。(二)永久的に而も廣く一般的の必要に應ずる事業で

なくてはならぬ。(三)常に輿論に従ふことの出来る如き性質の事業でなくてはならぬ。(四)經營する事業に對して比較的小額の資本を要するが如き事業でなくてはならぬ。(五)之が經營の効果を擧ぐるに必要な専門的の機關は容易に正確に理解し得らるるが如き種類の事業でなくてはならぬ。

之等の定則は先づ第一に、政府の事業として如何なる事業が成功するの望みがあるかと云ふことに就てのみ述べたものであつて、而も其所謂成功不成功と云ふことは全く個人的事業經營者の立場からのみ觀察したものであると云ふことが認めらるるのである。換言すれば、之等の定則の説明には、個人企業者の普通に用ふる言葉によりて云へば、先づ損をすると云ふやうな事業を政府が經營することによりて社會の幸福を増進することの出来ること云ふ觀念は少しもない。公道の如きは殆んど何處に於ても政府經營の獨占事業であつて、租税を以て之を建設し之を維持するもので、通行料を取りて經營するものではない。故に單に個人的經營の立場からのみ之を判斷すれば、公道の如きは政府事業として成功すべき性質のものでないと云ふことになる。併し乍ら

今日に於ては何人と雖も既に過去に於て成功し來りたる公道に對する政府經營の政策を變ずることに賛成するものはあるまいと思ふ。

次に、吾人は政府の活動を之等の定則に當て嵌めて永久に制限せむと欲するものではないけれども、尙ほ吾人は政府が自然獨占業の經營を行ふ順序を定むるに當りて此所謂ジエグオンスの定則を利用すると甚だ有益であること云ふことを認め得らるるのである。更に各種の自然的獨占業に今日之等の定則を當て嵌めて見ると、夫れ種々なる程度に於て一致するのであるが、併し乍ら其程度は永久的のものではなくして、常に變りつつあるものであることは一寸考へて見ても解るのである。例へば鐵道事業の如きは次第次第に規則正しき經營に近きつつあるもので、其事業に對する必要は毎日々々擴がり來り、而して段々と賢明な輿論の下に従ふと云ふやうになつて來た。故に吾人は個人企業の立場から見た場合に於てすら、凡ての自然的獨占業は將來に於て政府經營の下に好果を擧げ得るものなるを信せむと欲するものである。

結論 第二種に屬する自然的獨占業を政府の經營とすることを有利なりとする一

結論

般的觀念は急激に高まりつつあるのである。斯る政策より生ずべき利益は既に前に述べて置いた。之等の利益を認むると同時に、又、政府の經營監督に關する方法に大なる困難がある、即ち政府の組織内に含める大なる問題、行政事務の改善に對する問題、政府事業の信用と能率とを大ならしむることに關する問題があることを看過してはならぬ。國有鐵道の場合に於ては運賃に關する問題及び各方面の需要の衝突、産業的利益の衝突に關する問題が起るべきものである。歐洲諸國に於ては之等の問題は甚だ重大なる問題となり之が充分なる解決を見るは遠き將來に待たねばならぬ有様である。

政府經營を是とする傾向は今日甚だ強くなつて來て居るけれども、尙ほ且つ凡ての自然的獨占業が個人企業者の手から離れると云ふことになるのは當然遠き將來のことではなくてはならぬ。其間と云ふものは、特許權の授與、擴張、更改及び斯る事業に對する政府の監督に關する複雑なる諸問題は絶えないことと思ふ。之等の問題は善良にして智識ある國民たるべき諸君に取りて經濟學中最も考慮を費すの價值ある問題である。

〔補論〕

本章の内容を約言すれば以下の通りである。先づ獨占の根本は價格及び他の條件を支配すべき活動の結合したるものなる事。獨占價格が競争價格と異なる點は獨占財の供給が生産費によりて定まらざる點にある事。獨占價格は最も大なる純收入を得る點に定まる事。供給高及び價格を定むるに當りて獨占事業家は定額の費用を眼中に置かぬから、獨占業に課する定額税の高は、獨占財の價格の如何により増減するものではない事。之に反して比例税の高は獨占財の價格の如何により増減する事。獨占價格は需要の方面から云つて消費者の有する富と購買の性質とによりて左右せらるるものなる事。自然的獨占業を政府經營とするを利とする點は一般的繁榮の増進、經濟的節約、政治の廓清、有害なる社會的獨占業の除去に在る事。

以上列擧せるものが、先づ本章の眼目である。而して先づ獨占の分類を初めとして全體に通じて多少論すべきこともあるけども、それは主として議論の方法順序に關するもので、根本的の觀念の相違に基くものでないから、別に蛇足を加へないこととする。併し一寸注意までに一言して置くが、我國に於ても勿論多くの獨占がある。先づ

郵便、電信、電話、鐵道、公道、燈臺、煙草專賣、鹽專賣、樟腦專賣等があり、一方に於ては專賣特許權、著作權、商標等があり、更に又一方には市營の電燈、電車があり、電燈會社があり、瓦斯會社があり、私設の軌道、鐵道があり、或は又家傳秘法の獨占もあると云ふ風に多くの獨占がある。之等の獨占を一々本文の分類に對照して夫れ如何なる種類に屬するかを讀者自身に研究せられたらよからう。此研究を試みた上で本文を見ると更に一層よく解るに相違ない。

第四章 貨幣

交換及び價値の根底たる諸種の根本的原則は既に論じたから、吾人は之より順序として交換に關係を有する複雑なる機關の性質を考究することとする。交換の媒介物たる貨幣は此機關の中心をなすものである。前に歴史的研究を爲したる際に吾人は、贈與の遣り取りから物々交換による一定の交換に進みたる有様、及び物々交換から交換を行ふ手段として或一物品若くは二三の物品を定めて之を使用するに至りたる有様を

述べて置いた。手工業時代に及んで此目的に貴金屬を用ふるやうになつて來た。而して近世に於ては貨幣 (Money) と稱する一定の制度を生ずるに至つたのである。

貨幣の定義 然らば貨幣とは抑も何であるか。此語の意義を定むるに當りて吾人は其意義の定め方が決して一定して居ないことを發見するのである。此意義を定むるに當りては最も通俗な意義を用ふると云ふことが便利である、此通俗な意義から云ふと、貨幣とは交換の媒介物として自由に授受される物であつて、且つ一般に債務の最終の仕拂として受取らるるものであると云ふことになる。併し乍ら近世經濟に於て貨幣の有する職分を基礎とする一層狭き觀念を有する意義が別にあるのである。第一に(一)貨幣は何處に於ても交換の媒介物たる役目をするものである。此第一に必要な貨幣の役目は凡ての貨幣の種類に於て主要なる役目として存するのである。現今の文明は交換の媒介物としての貨幣がなかつたならば到底出現し能はざるは勿論のことである。斯る交換の媒介物がない場合には、一匹の馬を所有して居つて洋服一着を慾しがつて居る人は馬を慾しがつて居る洋服屋を探し出さなくてはならぬ、而も之を探し出

したに於て、馬と洋服との價值が等しくない時には交換することは不可能である。第二に(二)貨幣は價值の尺度としての役目をするのである。貨幣は價值の命名者であること云ふことが屢々稱せられて居るが之は此價值の尺度と云ふのと普通に同じ意味である。此第二の役目は自然に第一の職分より生ずるものである。ナゼかと云へば普通に或物品に對して交換をする場合に貨幣は交換さるべき凡ての物品の交換價值を測る標準として用ひらるるからである。此役目が最もよく果される爲には例へば弗金貨の如く九と一との割合を以て金及び銀の二五・八グレンより成る一定の貨幣單位が必要である。此單位を有する場合に吾人は其單位は十弗の價值があること云ふのであるが、之は其交換價值即ち交換に於て他の物品を要求する力が貨幣單位一弗の十倍であること云ふ意味である。所が時々價值を云ひ表はすに實際に用ひて居る貨幣を以て云ひ表はさないで、往時一定の交換の媒介物であつた或種の貨幣を以て云ひ表はすことが或人々の間にある、例へば米國の東部諸州に於ては昔時鑄造せられた貨幣である所のシルリングで價值を云ひ表はして居るのを屢々耳にするのである。斯る貨幣を稱して勘定貨

幣(Money of Account)と云ふ。第三に(三)貨幣は將來に於ける支拂の標準たる役目を有するものである。若し物品若くは勤勞を將來にあらざれば支拂をすることの出来ない人に今日賣ることとすれば、其將來に於て受くべき支拂に關する或一定の標準を定めること云ふことは甚だ必要なことである。此貨幣の役目は普通に其貨幣に法貨性(Legal tender quality)を附して之を全ふせしむるのである。尤も法貨性なるものは此役目を充たすことの事實其ものには決して必要なものではない。法貨と云ふ語は單に、法律が負債を有するものは何人も其負債を之を以て支拂ふことが出来ること、若くは任意の物品に對して之を提供することが出来ること、及び訴訟提起の場合に於て法廷は之を以て法定の貨幣であると判定すること云ふことを定めたものであること云ふことを意味するに過ぎないものである。貨幣の第四の役目は(四)價值の貯藏たる役目を有することである。此役目を有するからして價值は時間的に場所的に移轉することが出来るのである。例へば羅馬の金貨は二千年間も經過して其價值を今日まで有して居る。又金貨は大平洋を越えても矢張り夫れだけの價值を有して居るのである。

そこで吾人は以上述べ來りたる所を約言して狹義に於ける貨幣の定義を下せば、次の通りである。貨幣とは交換の媒介物、價值の尺度、終局の支拂要具、價值の貯藏として使用する或物品である。次に述べる貨幣に關する説明は各々本文より推して明かなることである。

貨幣材料の性質

貨幣材料として必要なる性質　世界の歴史を調べて見ると貨幣として古來使用せられたる物件は甚だ多い。家畜の如きは至る所に貨幣として用ひられたもので、特に米國北部の國々では獸皮を用ひ、往時のニューイングランド人の間には油だの貝殻珠だの云ふものを用ひ、露西亞の定期市にては茶、メリーランド及びヴァージニアの如きは煙草を用ひた。後には凡ての低位金屬を用ひ、且つ金及び銀の二貴金屬を用ふるに至つたのである。凡ての金屬の中で金銀は文明國民の間に貨幣用として最も適したるものと認めらるゝに至つた。而して二貴金屬の内では金の方は特に適當であると云ふことが解つて、將來に於ても貨幣材料として永く續くべきは明である。然るに現今銀は、進歩したる國民の間に普通補助貨幣として用ひられて居るのであるが、何れの國に

於ても之を貨幣として使用する額は大なる額に達して居る。金及び銀が貨幣の材料として優れて居るのは其性質が貨幣に必要な性質とよく一致するからである。第一に金銀は貨幣として用ふること以外に美術若くは裝飾用として用ふることが出来るものであるから、一般に之を取得することを欲するものである。此事實あるがために金銀の價值は確實にして安全であるのである。若し金銀の價值が下落し始めると云ふことなれば貨幣としての使用よりも他方面に使用するために需要が増加して來て價值の低落を防ぐこととなるから他の物品に於けるが如き價格の變動を生じないのである。更に此價值の確實なることは、金銀の年産額が其凡ての既存高に比して其割合が甚だ小なるの事實によりて一層高めらるゝのである。且つ金銀は殆んど不滅のものであると云ふてよい。現今世界に存在せる金貨及び捧金及び銀貨の高は百六十億圓より百八十億圓の間に在るものと評價されて居る。此量に比較して見ると、現今の比較的大なる年産額約八億圓ですら、僅かなものである。故に金の價值に於ける變動は、其變動が供給に關する方面から生ずる範圍内に於ては甚だしく遅緩なものであるのである。又

貴金屬の有して居る特別なる高價值、換言すれば、其重量及び容積に比較して高價值を有することが、價值の貯藏に適せるより貨幣の材料として優れて居るのである。即ち特別の高價值を有するが故に之を持ち運ぶには餘り費用を要しない。従つて之等の價值は場所の相違によりて殆んど變ることはない。金銀の有する耐久性及び不滅性は亦貴重なる性質であると同時に、又價值を失ふことなくして甚だ小さく分割することを得る性質を有して居るから如何に小額の價值に對しても交換の媒介物たることが出來得るのである。又金銀の有する可鍛性は、一匁は一匁で何れを取りても常に價值が同一であると云ふ同質性と共に鑄貨を容易ならしむるものである。更に金銀を以て製したる鑄貨及び其他の物品は其特別の音響と其他の特徴とにより容易に認めることが出来るからして之を貨幣として一般に使用するに適するのである。

扱て以上に述べたる貨幣として特に必要である所の性質を茲に約言すれば、(一)物品としての價值ある事、(二)特別の高價值を有する事、(三)價値の確實なる事、(四)價値の劃一なる事、(五)認識の容易なる事、(六)耐久性を有する事、(七)携帯に便なる事、(八)可鍛性を有する事、(九)同質性を有する事、即ち之である。

鑄貨

を有する事、(九)同質性を有する事、即ち之である。

鑄貨 (Coinage) 金屬を初めて交換の媒介物として用ふるに至りたる當時は、砂金若くは金塊の如きを其儘に使用し、量を測ることや純分を検することなどは交換者がしなくてはならなかつたのである。時が経つに従つて、個人々々で其重量や純分を表はす貼紙を附し或は其他の方法で之を證明するやうなことをしたのである。斯る方法は尙ほ世界の或部分には存して居る。其後に至り政府が漸次に貨幣の制度に手を着けるやうになつて來て、茲に一定の鑄貨制度が發達して來たのである。鑄貨の改良を企つるに當りて政府は先づ第一に鑄貨を一定劃一の形となし其表面に精巧なる意匠を刻し或は縁に刻み目を附するか如き種々の工夫を加へて以て鑄貨の偽造を防がむとした。然るに政府は其鑄貨に表記通りの價值を附せなかつたのであるけれども、其鑄貨の確實なるがため優れたる交換力を有することによりて其鑄貨の價值を高むるに至つたのである。

政府が其定めたる單位によりて地金を持つて來る人には何人にも貨幣を鑄造して

やる場合に、其鑄造は個人的計算の鑄造若くは自由鑄造 (Free Coinage) と稱するのである。故に自由鑄造なる語は鑄貨費用に關係を有せぬ。若し政府が個人のために費用を徴收せずして鑄造する場合には其鑄造は單に自由であると云ふことに止まらず、又無料であるのである。鑄造に對して造幣局より費用を徴せらるる場合には其費用を稱して鑄造費 (Mintage) と云ふ。若し其費用が鑄造のために費す費用を償ふに足る場合に於ては、之を稱して鑄造料 (Brassage) と云ひ、實際の費用に超過する分は鑄造税 (Seigniorage) と云ふのである。政府が市場に於て地金を市價を以て買入れ之を鑄造する時は其鑄造を稱して政府計算の鑄造と云ひ、若し其鑄造せられたる貨幣の表記價値が地金の市價よりも高きこと鑄造費以上である場合には其差額は又一種の鑄造税たるべきものである。今日に於ける大部分の産業國民は金貨は自由の鑄造とし銀貨は政府のみの鑄造として居る。

政府と貨幣 政府が貨幣の鑄造を掌つて居ると云ふ事實からして多くの人々の間には政府が貨幣を創造すると云ふやうな間違つた考が生したのである。既に述べたる

政府と貨幣

が如く貨幣たるに必要な凡ての要件は全く政府の關與を要せずして充たし得るもので、又事實充たされたものである。故に政府は決して貨幣を創造するものではなく、單に精巧なる鑄造によりて偽造を防ぎ、或は偽造に對して嚴格なる法律を設け、或は交換の媒介物たる上に法貨力を附し、以て貨幣の流通力及び交換力を増加するに大なる力を有するもので、従つて貨幣の一定量は大に其價値を高むるのである。

金及銀は若し之等が全く貨幣の材料として用ひられないものとするも、尙ほ今日美術及び裝飾に對する用途のために大なる價値を有するに相違ない。金銀は、若し政府が其鑄造の事業を止めて支拂力の保證を個人の信用に委附するやうなことがあると假定しても、財としても貨幣としても甚だ高き價値を有するに相違ない。併し乍ら金銀の今日の價値は以上二つの假定せる場合の何れよりも高いものであることは疑ふの餘地がない。

價格と貨幣價値 貨幣は價値の尺度であるから、貨幣單位の價値の變動は他の物品の一般的價格の變動を意味するものであることは明かである。一圓の價値が低下し

價格と貨幣價値

たと云ふことは他の物品の価格が騰貴したと云ふこと、同じである。即ち同一の物品を買ふに前よりも多くの金を要すると云ふことである。更に物品の価格を下落せしむる原因は、貨幣の価値を高める原因である。簡単に云へば、物品の価格と貨幣の価値とは其變動が反比例である。

價格と貨幣の數量

價格と貨幣の數量　貨幣流通の速度は變せざるものと假定して、物價が騰貴した場合は物價が下落した場合よりも、交換の媒介物たる貨幣の量を一層多く要することは明かである。洋服一着が二十圓である時に於て之を買ふに必要な交換の媒介物の量は一着僅かに十圓の時に要するよりも多いのである。之は殆んど疑を要せざる事實であるが、併し乍ら貨幣の供給が増加すると云ふことのみによりて物價が高くなるかどうか、若くは貨幣の供給を増加せしむるの原因は物價の騰貴であるかどうかと云ふことは、之とは別問題であつて甚だ困難なる問題である。

貨幣價值

貨幣價值　貨幣に就て最も困難にして且つ最も議論ある問題は、其價值の決定に關する問題である。此問題に對する解答として貨幣數量説なるものが一世紀以上も一

貨幣數量説

般に認められて居つたのであるが、併し乍ら近來に至りて之に對する有力なる反對を生じ最早今日に至りては一般に以前の如く此説を認めないことゝなつて來たのである。

貨幣數量説 (The Quantity Theory)　此説を簡単に紹介することは容易の事ではない。併し乍ら先づ大略次の如きものである。貨幣の價值、従つて一般の物價は、貨幣の需要と供給との間の比例によりて變動するものである。貨幣の需要と云ふのは貨幣の使用によりて生ずべき交換の度數を意味するものである。經濟界が活氣を呈した時には多くの物品が生産せられ交換せらるゝものである。而して之等の交換を行ふがために一般社會は多量の貨幣を必要とする、換言すれば貨幣に對する需要が増加するのである。貨幣の供給と云ふことは其流通の速度に關して要したる貨幣の量を意味するものである。故に若し甲國に於ける貨幣が乙國に於けるよりも平均上一層速かに流通するとせば、甲國に於ける貨幣の供給は乙國に於けるよりも割合上更に大であると云ふ結果になる。今此説によりて、貨幣の供給が或期間同一であつて少しも變しないものとし、一方に於ては貨幣に對する需要が産業發達のために増加したとすれ

ば、貨幣の一定量は以前よりも他の物品の一層多くの量に對して交換されるであらう。換言すれば貨幣の價值は高くなつて來る、而して同様に貨幣によりて云ひ表はされたる物品の價值は安くなつて來るのである。今度は之と反對に、若し或期間事業の一般的状态が同一であるとして、一方に貨幣の供給が量に於ても且つ流通の速度に於ても増加するとしたならば、貨幣の價值は下落し一般の物價は騰貴するであらう。更に一步を進めて、若し或時に於ける貨幣の需要が供給よりも更に速に増加するとしたならば、其結果として貨幣の價值が高くなり、従つて一般の物價が安くなる。之に反して若し貨幣の供給が需要よりも更に速かに増加するとしたならば、貨幣の價值は安くなり、従つて一般の物價は高くなるものであると云ふことが出来る。

貨幣の價值と生産費 最後に附け加へねばならぬことは、右の貨幣數量説は結局に於て貨幣の價值は貴金屬の生産費によりて制限せらるゝものであると云ふことを主張することになる。即ち高き貨幣と安き物品とは採鑛を一層低廉に一層有利にするを以て貴金屬の産額を増加するの傾きがあると云つて居る。之と反對に安き貨幣と高き

貨幣價值
と生産費

物品とは採鑛の刺戟を減ずるを以て貨幣金屬の供給を減じ若くは供給増加の割合を減することになると云ふのである。

制限 此貨幣數量説には或る制限を附するの必要がある。凡ての取引は貨幣を通じて行はれるものではない。物々交換は今尙ほ交換に幾分行はれて居る、而して若し貨幣の量が甚だしく減ずるに至れば、物々交換は増加するに相違ない。更に、信用取引が次第々々に交換に於て大なる部分を占むるやうになりつゝあるからして、貨幣に對する需要を評價するに當りては之を斟酌する所がなくてはならぬ。之等の事實を斟酌して、而も更に數量説それ自身が單に貨幣の數量及び其流通の速度を基礎とするのみならず、又他の財の効用及び其生産費を基礎とする多くの觀念を含んで居るからして、何れにしても此説を基礎として推論するに當りては最大の注意を拂はねばならぬものであると思はれる。

一般の物價と各物品の價格 前に述べたる一般物價と云ふことには特に注意を拂はねばならぬ。數量説は或一物品の價格若くは一群の物品の價格の騰貴は、貨幣に對

貨幣數量
説の制限一般の物
價と各物
品の價格

する需要の増加に必ずしも一致するものではないと云ふ事實を眼中に置いて居ない。一方に一般物價が上り若くは下りする場合に、或種の物品の價格はそれと反對の方向に變動することが常に生ずるのである。貨幣の分量が著しく且つ甚だ急激に減少した如き場合に於てすら、或る一の物品を生産するの困難は比較的甚だしく増加して、其結果貨幣を以て云ひ表はされたる其物品の價値は低落することなくして却つて騰貴することがあるのである。

紙幣 (Paper Money) 以上述べたる所は凡て鑄造貨幣に關するものであるが、近時甚だ廣く用ひられて居る所の貨幣のモ一つの種類は紙幣である。此紙幣は普通に銀行若くは政府によりて正貨と引換ふることを保證せられて初めて紙幣として通用するものである。國民は此引換保證によりて之を通貨として使用するのである。之は其保證が實行せらるるものであることを信すること、他人がそれを躊躇なしに受取るべきを信すること、紙幣は法貨であるからして特別の契約なき以上は負債の支拂に用ふることを得ることを知つて居ること、及び紙幣の大部分のものは租税の支拂に供するこ

紙幣

とが出来からである。紙幣に對する信用が厚い處では紙幣は動もすれば鑄造貨幣よりも以上に歡迎さるるものである。之は紙幣の方が餘程便利であるからである。

若し諸君が北米合衆國に通用して居る各種の紙幣に印刷してある文字を讀んで見れば、容易に其性質を知ることが出来て、而も國立銀行紙幣と中央政府發行紙幣との二種の紙幣があることを發見するであらう。更に政府發行の紙幣には多くの異りたる種類がある金券及び銀券は單に其所持者が政府から表面記載の金若くは銀の額を要求次第受取ることの出来る權利を證明したるものである。政府は常に之等の支拂に要する金銀を國庫に保有して居るのである。それから所謂グリーンバックと稱する合衆國紙幣と一八九〇年に發行したる所謂シアーマン紙幣とは單に表面記載の金額を要求次第支拂ふべきことを政府が保證したるものである。之等の紙幣に對しては國庫は一々硬貨の額をそれだけ保有するものではないけれども、併し之等の引換が凡て要求せられたる場合でも夫れに應ずるに充分なりと思はれる所の準備基金によりて保護されて居るのである。

通貨の膨脹と收縮 貨幣の供給が一般に物價に影響を及ぼすだけの程度に増加したる場合は之を稱して通貨の膨脹と云ふ。之に反して貨幣の供給が需要に比較して一般の物價が下落する程度に減少したる場合は之を稱して通貨の收縮と云ふのである。鑄貨の膨脹及び收縮は世界の歴史を見ると甚だ多く其例があつて、而も將來に於て同一の困難を繰返すことを防ぐ方法は一も存在せぬ。斯る膨脹及び收縮は自然的のものであると云はれて居る。其理由は膨脹若くは收縮は貴金屬の供給に關する自然的條件に原因するものであるからである。更に政府も又紙幣を過度に發行して通貨膨脹の弊害を作り出すことがある。斯る場合に於ては之を人為的膨脹と云ふのである。

通貨の膨脹は、それが自然的たる人と人為的たる人とを問はず、國民の大なる部分に害悪を加へるものである。定額の貨幣收入及び其額の變動少なき貨幣收入を得る凡ての人々や長期の契約を以て金を貸したる凡ての人々は之がために甚だしく減少したる購買力の貨幣を受取ることとなるのである、即ち一言を以て之を云ふときは、通貨の膨脹は社會に於ける債權者階級に不當の損害を與へ、通貨の收縮は債務者階級に同様の

損害を與ふるものである。通貨收縮によりて物價の下落しつつある間は借入れたる資本を以て事業に従事して居る人々は、其賣るべき生産物の價格は下落し、借入れたる資本の返却に充つべき利益を得ること能はざるに至るのである。故に若し其負債の金額を支拂ふこととすれば以前よりも一般的購買力の大きな額を實際に於て支拂ふこととなるのである。

右の如く通貨の膨脹は債權者に損害を與へ、而して通貨の收縮は債務者に損害を與ふるものであるから、通貨の膨脹は債務者に利益を與へ而して其收縮は債權者に利益を與ふるものであることは明かなることである。それ故に通貨の量を變動せしめて物價の平準を失はしむるやうに政府が干渉することを希望する人々が時々多くあると云ふことは敢て怪しむに足らぬことであらう。若し人為的收縮が人為的膨脹の如く容易に生せられ得るものとすれば、社會に於ける債權者階級は時々政府に向つて人為的收縮政策の實行を求め、自ら利益を得むとするは有り得べきことである。而して斯る膨脹及び收縮に就ては寧ろ政府に要求して自ら利せむとする企ては債務者側より生ず

人為的膨
脹

るであらう。

人為的膨脹の弊害　人為的通貨膨脹より生ずる或種の危険に就て更に進んで研究するの必要がある。印刷器に掛けて紙幣を過分に發行することは固より容易なることである。即ち政府が其經費を支出するが爲に租税を徵收するよりも此紙幣増發による方が餘程事は容易である。それで斯る政策を採らむとする誘惑が起つて從來動もすれば政府をして浪費及濫費に陥らしむることがあつたのである。更に紙幣が其表面價格を流通上維持するを得るのは其發行高に制限を設くることによるものである。一定の制限を超過したる紙幣發行より生ずる紙幣の下落は大なる困難と不都合を生ずるもので、即ちグレシヤムの法則 (Gresham's Law) として一般に知られたる法則によりて、悪貨が良貨を流通界から驅逐することとなるのである。其結果として物價は騰貴する。物價の騰貴は凡ての定額収入の價值を減じ凡ての負債の支拂利子及び貸銀の價值を減ずるものである。此種の通貨膨脹は又國際貿易の上に大なる不便を與ふるものである、何となれば一の國民は他の國民の紙幣に法貨性を認めない、而して外國人は

貴金屬と同價を保つて居ないやうな紙幣は信用しないからである。紙幣が額面價格を維持し得るのは政府が何時たりとも要求次第金貨を以て之と引換へることとなつて居るからである。斯ふ云ふ紙幣を稱して兌換紙幣と云ふ。兌換紙幣は濫發さるるものではない。而して之は鑄貨よりも多くの便利を有するものであるから、多くの點から云つて良貨たるべきものである。不換紙幣になると勿論これは兌換されないものであるから悪貨である。そこで之等の状態よりして、政府は其發行が弊害ある膨脹を來さないこと云ふことを確かめない以上は全然紙幣を發行してはならないものであることは明かである。

第一節　貨幣分量の變動、複本位制

どれだけの貨幣が一國には必要であるかと云ふ問題が屢々起る。而して之に對する答として屢々次の如く説明されたものである。即ち、『幾許の貨幣が一國に必要であるかと云ふことは、幾許の貨幣が其國に存在するかと云ふことと異つたことはない。若

貨幣の必
要高

しも供給が大なる時は物價は上り、供給が小なるときは物價は下りて同額の貨幣が一層大なる用を爲すことになる。少額の貨幣でも多額の貨幣と同様なる働きをすることになる。』貨幣の供給と其價值の間に一の關係があること云ふことは事實であるが、併し其關係は決して單純なるものではなくして寧ろ甚だしく複雑を極めたものである。而して他の條件にして變らない以上は、大なる供給が小なる價值を意味し小なる供給が大なる價值を意味することも事實である。併し乍ら右の答に於けるが如き之等の事實より推定したる所の結論は之等の事實其物より生すべきものではない。貨幣の分量が少ない場合には物品の交換取引に對して物々交換が廣く行はれる。而して信用機關が容易に利用されないやうな日常普通の凡ての取引を行はむがためには確かに貨幣の充分なる分量がなくてはならぬのであるが、最も普通なる産業取引の一は貸銀の支拂であるから貨幣の分量は此目的に用ふるに足るだけの額に存在しなくてはならぬ。換言すれば貨幣の供給は普通労働者の一日の賃銀額より大ならざる程度の價值が手頭の大さの鑄貨に存在するだけの額でなければならぬ。更に一日の賃銀を尙ほ數部分に分つ

ことの出来るやうに貨幣の價值を小にすることも必要なことであるが、併し乍ら吾人が法貨を以て頗る小なる買物をするこの出来るやうに貨幣の價值を小にする必要はない、ナゼかと云へば米國に於ける一弗以下の補助貨幣の如く單に少額の支拂に對して法貨たることを得る貨幣を何れの國も有して居るからである。之等の補助貨幣の含んで居る金屬の純分は表記價格に比して少ないものである。米國に於ける補助貨幣は五十仙、二十五仙及び十仙の三銀貨であつて、之等は一口十弗以下の支拂に法貨として通用するもので、それ以上の支拂例へば一口十五弗の支拂の如き場合には法貨たることは出来ない。之等の補助貨幣以外に尙ほ所謂小貨幣と稱するものがある、米國に於ては白銅貨と銅貨であつて、之等は五十仙までの支拂に法貨たるものである。

貨幣分量の變動 貨幣の或分量の必要なことに就て、上に述べたる所は、一國が要する貨幣の分量を定めるに必要な唯一の觀念ではない。上に述べたる要件を充たしたる場合に於ても、一定の時に於ける貨幣の分量が大であるか若くは小であるかと云ふことに就ては別に何等の關係がない、併し乍ら吾人が貨幣の膨脹及び收縮を論

する場合に示したる如く、貨幣の分量が同一であるか、若くは増加したか、若くは減少したか云ふことに就ては其間に大なる相違を生ずるのである。歸する所は貨幣の分量の大小と云ふことではなくして、前に比し一層多くなつたか若くは一層少くなつたか云ふことに在るのである。現在若くは將來に於て支拂はねばならぬ債務を過去に於て負ふたとする。今日、他の條件に變動なくして只だ貨幣の分量が減少したとすれば各債務の價值は高くなり、従つて各債務者は負擔を増加することとなる。手形の價值でも、質證券の價值でも、鐵道社債券でも、中央政府若くは地方政府發行の公債でも、皆其價值が高くなる。大多數のものを犠牲として少數の人々が富むと云ふことになる。

併し乍ら吾人は貨幣の分量は決して貨幣の價值を定むる唯一の要件ではないと云ふことを忘れてはならぬ。一般の物價を定むる要件は甚だ多いのであるから貨幣の分量と其價值との間の關係にのみ基礎を有する結論に對しては最も大なる注意を拂はねばならぬ。例へば今日に於ては信用と云ふものが次第々々に交換の重要な手段となり

つつある。而して吾人は、信用を害するやうなことは如何なることでも、それが金融市場に於ける必迫を生じ、それによりて貨幣の價值を騰貴せしむるに至るまで信用の機關を害するものであると云ふことを記憶せねばならぬ。

複本位制

複本位制 (Bimetallism)

一國に必要な貨幣の分量に關する吾人の議論は、自

然夫の複雑なる複本位制に關する問題に及ばざるを得ないことになる。複本位制を設けるには三つの條件が必要である。即ち(一)二つの金屬を要する事、(二)孰れも定りたる比例を以て自由鑄造をなす事、(三)孰れも法貨とせらるべき事、之である。金及び銀は何れも一般に貨幣として用ひられて居るのであるが、之等二つの貴金屬の間の鑄造比價は政府が之を定むるのである。最も普通に今日まで用ひられた比例は一に對する一五・五である、之は複本位制の下に法貨として鑄造せらるるに當り、金の一オンスは其支拂力に於て銀の一五・五オンスと同じきものとして取扱ふと云ふ意味である。此比價は一般に歐羅巴諸國に於ける比例であるが、米國に於ては一七九二年に制定したる最初の鑄造條件に於ては一に對する一五であつたのが一八三四年の條例にて一に對する

ラテン貨
幣同盟

一六〇〇となり一八三七年の條例で一に對する一五・九八八となつた。

ラテン貨幣同盟

歐羅巴の金銀比價は十九世紀中約七十年間、最初は佛蘭西によ

りて後には佛蘭西、白耳義、瑞西、伊太利を主なる國々として聯合せる所謂ラテン貨幣同盟によりて金銀の自由鑄造が維持されて居つたのである。此制度の下に金及び銀の如何なる形のもので之を所有する人は何人とも定められたる比價によりて貨幣に換へることが出来たのである。

通用禁止

通用禁止

併し乍ら一八七三年の頃に從來銀のみを自由鑄造として居つた所の獨

逸が金のみに変更することとなり、之がため世界の市場に獨逸は銀の巨額を放出し同時に金に對する需要を大に生じたのである。同年に米國は銀弗を貨幣中より除き金本位制を採つた、尤も事實に於ては銀弗の鑄造されなかつたのは數年間に過なかつた。斯ふ云ふ有様であるから、銀の價値は急激に下落するに至りたるを以て、ラテン同盟は其後直に銀の自由鑄造を停止した。此動搖に加ふるに殆ど同時に銀鑛の大發見があつて其供給の量は急激に著しく増加した。之等の變動よりして金銀の間の比價は舊比

貨幣變動
の結果

價より著しく動搖して今日金の一オンスを買ふに殆んど銀の三八オンスを要する如き銀の大暴落を見るに至つたのである。換言すれば金銀の市場比價は一に對する一五・五の舊鑄造比價に近き市價より一に對する殆んど二八の市價になつたのである。

貨幣變動の結果

以上に述べたる變動は自然貨幣の價値を増加せしめ、而して之

に伴つて凡ての債務を増加し、大なる困難を生じたのである。併し乍ら債務の高くなつたのは害毒の單に一部分に過ぎざるものであつて其他に尙ほ多くの害毒を生じたのである。南亞米利加及び東洋諸國は銀本位であつたからして、前に金銀が一定の比價を以て容易に交換せられた際には容易に行はれて居つた貿易も、比價の動搖のため不安にして困難なる分子が貿易に現はれ來り、茲に甚だしき投機性を帶ふるに至り、従つて全體から云ふと世界に大なる不利を與ふるに至つたのである。印度の商人に貨物を賣却するリヴァープールの商人は銀貨の一定額を交換上受取るを同意して居つたのであるが、併し乍ら此銀を金に交換する必要がリヴァープールの商人にはあるからして、斯く銀の價値が下落することになると取引を續けてやつて居る間には破産して仕舞はな

くてはならぬこととなる。斯ふ云ふ有様であるから東洋諸國に生産品を輸出することは妨げられ、而して印度及び支那に於ける生産は夫れだけ人爲的に刺戟を受けたのである。

之等の困難は銀貨の一般的通用禁止より大部分生じたるものと多くの人々によりて信せられて居る。複本位制は之が救済の方法であることせられた。複本位制の下に於ては政府は一定の比價を定めて之を鑄造せむと欲する人々には何程でも金貨及び銀貨を自由に鑄造してやるのである。換言すれば政府は金及び銀を個人勘定によりて鑄造するのである。單に一國のみにて行ふ所の複本位鑄造は之を稱して一國複本位と云ふ。今日一般に經濟學者の一致する所に依ると、一國のみの複本位制は全然實行し得べからざるものであることせられて居る。其理由は經濟學者の見解から云ふと、定められたる鑄造比價に常に一致せしむるに必要な金及び銀に對する需要を作り出すだけ商業上に有力なる地位を有する國は一も存在しないからである。然るに若しも定められたる比價が維持され得ないとすれば、他の國々はグレシヤムの法則の作用によりて凡て其

有する銀を持ち來りて其國から金を持つて行くと云ふことになつて、事實上其國は全く銀本位となつて仕舞ふのである。

國際的複本位制とは一八七四年以前に於けるラテン貨幣同盟の如き協約に基ける複本位制を云ふのであるが、此所謂國際的複本位制に於ては一國のみに於ける複本位制とは全く趣が異なるのである。經濟學者は嘗つて斯る貨幣政策を推賞したものであつて、尙ほ今日と雖も英米には斯る國際的の貨幣政策は實行し得べきもので、且つそれが適當なものであると信して居る經濟學者が幾らか居るのである。之等の經濟學者は、例へば英國、合衆國、獨逸、佛蘭西の如きが斯る協約を結ぶとすれば之によりて金銀の比價を維持することが出来るものと信して居る。國際的複本位論者は金及び銀は主として貨幣として用られるものであつて、金銀の所持者は國際的協約によりて政府の定めたる比價を以て其所有の金銀を貨幣に鑄造するか、若くは美術用として之を市場に賣却するか、何れかの方法を取らねばならぬことになるのであるが併し乍ら美術用としての金銀は年々の産額に比すると比較的少量なるものに過ぎきず、況んや之を金銀の全

存在額に比するときは極めて小なるものであると云ふ所からして、政府は獨占者の地位にありて協約によりて一定の鑄造比價を維持することが出来ること主張するのである。更に國際的複本位制論者等は斯る政策の結果は債權者債務者双方に對して大なる公平を生ずるもので、而も金を用ゆる國と銀を用ゆる國との間の商業の便利を大なしむるものなるを以て世界の産業は大に發達すべきことを論じて居るのである。

第二節 最近の貨幣史

一八七八年のブランド・アリゾン條例 今日に於ては最早大きな國で金及び銀を双方共自由鑄造として居る國は一つもない。併し乍ら銀を自由鑄造としないで通貨の中に用ひて居ることは今尙ほ北米合衆國其他の政府によりて行はれて居ることである。合衆國に於ては一八七八年のブランド・アリゾン條例によりて、大藏卿は銀貨の二百萬弗以上四百萬弗以下を毎月鑄造することになつたのである。此條例の下に、之が廢止となりたる一八九〇年八月十二日迄に鑄造せられたる銀貨は三億七千八百十六萬六千

ブランド
條例

七百九十三弗であつて、一ヶ月の平均鑄造高は二百五十萬弗以上となるのである。銀貨の流通に代らしむるために銀券と云ふものが發行せられたのであるが、携帶に便利である點から國民の間に流通するやうになり、銀貨は國庫に保管せらるるに至つたのである。此ブランド・アリゾン條例が實施されて居る十二年の間に銀は絶えず其價值を下げる一方であつた。或る人々は此下落を銀貨鑄造の制限より生ずるものとし之を救済するため自由鑄造となすべしと論じた。又他の人々は銀の自由鑄造は不可能のものであると同時に現在の方法も危険なものであると稱して之を全然廢止すべしと論じたのである。

一八九〇年のシアーマン條例 斯くて永き間議會に於て論争せられたる末、シアーマン條例と稱する一の折衷法案が通過した。此條例によりて大藏卿は、純銀三七・二五グレインの市價が一弗に達するまでは毎月四百五十萬オンスの銀を買入れ、之に對して國庫の法貨紙幣を以て支拂ふことが出来ることになつたのである。然るに間もなく、此シアーマン條例は銀價の低減を止めるものでないことが解つた。夫れのみな

シアー
マン
條例

らず此條例により銀の買入は通貨の安全を大に危険ならしむるものであると一般に信せらるるに至つたのである。

シアーマン條例の廢止 二三ヶ年の間を通じて合衆國の金貨は甚たしく海外に輸出された。而して其結果として、若しシアーマン條例が速に廢止せらるると云ふことにならないとすれば、金貨の輸出が續いて遂には合衆國は銀ばかりの國となるに相違ないと云ふ議論が起つた。所が此困難な時に當りて印度の造幣局が銀の自由鑄造を停止し、銀の價格は三日の内に一オンスに行き八十二仙から六十七仙に下落したのである。之に加ふるに合衆國の歳入が其經費を支出することの出来ないやうになるまで減少して、國庫の缺損を生じたのである。斯の如く種々なる状態が相合して遂に一八七九三年の夏の終りに特別議會を開くこととなり、大なる論議の後遂にシアーマン條例の地銀購入條項を廢止したのである。

一九〇〇年の通貨條例 一八九三年より一九〇〇年に至るまでの間に貨幣状態は漸次改良せらるるに至つた、尤も二三年間は其通貨を保護するがために合衆國は甚だ

一九〇〇年
の通貨
條例

不利なる條件を以て公債の發行を繰返さなくてはならなかつたと云ふ有様であつた。一八九六年に民主黨の大統領候補者は合衆國の獨立行爲によりて一に對する一六の比價を以て金銀の自由鑄造を主張したことがある。其後一九〇〇年三月十四日に至り新通貨條例が議會を通過した。此條例には明かに合衆國に於ける價値の標準は金貨であること、及び他の種類の凡ての貨幣は金を標準として定めたる價値を維持すべきものであることを規定したのである。此條例は更に合衆國の國庫出納官をして合衆國紙幣の兌換に對する特別の準備基金を備へしむることを規定した。銀貨鑄造に關しては此條例は、既に存在する銀の在高より銀弗の數が、嘗つて銀に對して支拂ふために發行せられたる一八九〇年の國庫債券の額と等しくなるまで、銀弗を鑄造することとしたのである。之等の銀弗若くは其代用たる銀券はシアーマン紙幣の引換に用ひ該紙幣が國庫に呈示せらるるや直に之を引換へることとした。凡てのシアーマン紙幣が引換られると云ふことになつた時に政府の買入れたる銀の殘額を補助貨幣として、鑄造することとなつたのである。此紙幣引換に充てたる銀の殘額は銀の鑄造より生ずる鑄造税たる

べきものである。

之に依つて見れば此通貨條例に於ては米國貨幣の凡ての部分の價值を保證するため
に有力なる規定を設けたるもので、且つ金單本位國としての米國の地位を鞏固にする
ことを努めたものと云ふことが解るのである。

國際貨幣會議

國際貨幣會議

國際的複本位制を定むることに就ては有名なる經濟學者及び各種
の政治家によりて大に主張せられ、それがために數回の貨幣會議を開くに至つたので
ある。之等の會議は普通に合衆國の有力なる援助を受けて居る。其内最も著名なるは
一八七八年の巴里會議及び一八九二年のブラッセル會議であつた。併し乍ら之等の討
議の結果として生れ出でたるものは何もなかつた。産業世界の大部分より起りたる平
靜にして緩慢なる反對は複本位論者側の活動よりも餘程有力なるものとなつて來た
大債權國としての英國は國際的行動による複本位制の凡ての計畫に反對した。

國際的複本位制に關する經濟的議論を吾人が考究するに際しては、複本位制の成立に
は大なる政治的障害が存することを記憶せねばならぬ。過去二十五年間に於ける貨幣
の歴史に徴するに、國際的複本位制は寧ろ漸次に其重要を失ひつつあるものと見るこ
とが出来る。従つて國際的複本位論者は宜しく其理想の望みなき事を認め、而して
從來の反對論者と共同一致して、實現することの出来る最良なる貨幣制度を得ること
に努力するを可とするのであらう。

〔補論〕

我國には嘗つて複本位制を採用したこともあるが、明治三十年以來金單
本位制を採用して居る。而して純金の量目二分を以て價格の單位として之を圓と稱し
金貨幣の種類は二十圓金貨、十圓金貨、五圓金貨の三種となつて居る。勿論之等の金
貨は自由鑄造で且つ無限に法貨として通用する。併し金貨と稱するも純金を以て鑄造
したものではない、今日では何れの國でも幾分の合金をするのである。我國の金貨は
純金が千分の九百であつて、參和銅が千分の一百と云ふことになつて居る。故に純金
と參和銅とを合せたる金貨の總量は、二十圓金貨が四・四四四四、十圓金貨が二・二二
二二、五圓金貨が一・一一一一である。

以上は我國の本位貨幣であるが、尙ほ此外に補助貨幣として五十錢銀貨、二十錢銀貨、十錢銀貨の三種の銀貨と、五錢白銅貨、一錢青銅貨、五厘青銅貨とがある。之等の補助貨幣は勿論自由鑄造ではない、而して無制限には法貨として通用しない、即ち銀貨は十圓まで、白銅貨及び青銅貨は一圓まで法貨として通用するのである。尙ほ現今通用して居る二錢銅貨があるが、之は舊貨幣制度の下に鑄造したるものが其儘通用して居るもので、現貨幣法の下に於ては鑄造せぬ。

次に紙幣に就て之を述べれば、我國にては以前政府が色々な紙幣を發行したこともあるし、又本文に述べてある米國の國立銀行に倣つて國立銀行條例を制定し、多くの國立銀行を設けて、之等に銀行紙幣を發行せしめたこともある。併し何れも大なる弊害を生じ財政上及び經濟上に及ぼしたる悪影響は實に大なるものであつた。そこで遂に明治十五年に日本銀行を設立して紙幣發行權を之に集中して今日の日本銀行兌換紙幣の制度を確立した。我國の如く單一の銀行に紙幣發行權を與へるのは單一銀行發行制度であつて、米國の如く多數の銀行に紙幣を發行せしむるのは多數銀行發行制度で

ある。單一銀行發行制度は諸種の點に於て多數銀行發行制度に勝りたるものであつて、世界の各文明國は多く單一銀行發行制度を採り其然らざる國も漸次之に向はむとして居る。

兌換紙幣とは正貨引換の保證ある紙幣で、換言すれば要求次第何時たりとも、それと同額の正貨に引換することを約束した紙幣である。例へば我國の紙幣は日本銀行に持參して正貨引換を請求すると、何時にても引換へて呉れるのである。然るに紙幣には正貨引換の保證のないものがある、之は不換紙幣と稱するもので、我國にも明治十三年頃には此不換紙幣が一億七千萬圓も存在して居つたもので、之が一枚も存在せざるに至つたのは明治三十八年一月一日以後のことである。即ち日本銀行兌換紙幣の發行制度が確立された後の永い間と云ふものは尙ほ以前の不換紙幣が回收されずに存在して居つたのである。元來一片の紙札が貨幣として通用するのは、正貨引換の保證あるがためであつて、斯る保證を有せざる紙幣を強制的に通用せしむるの不合理なるは明かである。之を以て凡ての文明國は今日何れも兌換制度を採つて居る。併し今回の

大動亂のため歐洲には兌換を停止した國も少くないやうであるが、之は國家危急の際止を得ざるに出でたるものなるは明かである。

以上の如く紙幣が貨幣として便利に通用するのは正貨引換の保證を有するためであるが、然らば其正貨引換は如何なる方法を以て之を保證するのであるかと云ふに、此問題に對する答として所謂兌換準備なるものがある。兌換準備とは正貨引換に備ふべき積立基金のことであつて、之には正貨準備と保證準備とがある。正貨準備とは金銀貨及び地金銀を以てする兌換準備であつて、保證準備とは一定の有價證券を以てする兌換準備である。然るに此兌換準備には色々の異りたる組織があるのであるが、之等を一々説明することは本書に於ては別に必要のないことであるから、以下簡単に我國に於ける兌換準備の組織如何に就てのみ説明しよう。

現行の兌換銀行券條例は明治十七年に發布せられたもので、其規定によりて、日本銀行は政府發行の公債證書、大藏省證券、其他確實なる證券又は商業手形を保證準備として一億二千萬圓以内の兌換券を發行することが出来るのであるが、それ以上の發

行に對しては悉く同額の金銀貨及び地金銀を以て正貨準備をなさねばならぬことになつて居る。斯の如く兌換券の發行には制限を加へて居るのであるが、尙ほ市場の狀況により流通貨幣の増加を必要と認むるときは大藏大臣の許可を得て、右と同一の有價證券を保證準備として兌換券の制限外發行を爲すことが出来る。此場合に於ては一年百分の五以上の割合を以て兌換券發行税を納むることとなつて居る。

第五章 信用と銀行

信用とは何ぞ

信用 (Credit) とは何ぞや 吾人は分勞及び勞働組織の發達と全經濟生活の革命とを生じたる交換の驚くべき發達が貨幣の使用によりて現はれたことを前に述べた。併し乍ら單に交換の媒介物たる貨幣のみでは現今の商業取引の發達の内容を了解することとは出来ない。勿論貨幣は物々交換に比すれば甚だ大なる利便を有するものであるが、併し乍ら近世の多くの取引に用ふる要具としては餘り便利ではない場合がある。固より貨幣は今日の社會に缺ぐべからざるものであると同時に、又手工業時代に於ける著

しき特徴をなしたるものであるが、今日の經濟時代に於ける交換の著しき特徴は最早貨幣の使用と云ふことではなくして、實に信用取引と云ふことである。

信用と云ふ言葉には多くの意味がある。吾人が某の信用は良いとか或は某は良い信用を有つて居るとか云ふ時には、某は其負債を拂ふことが確實であること、及び負債をする能力がある、それで他人が某に對しては品物を賣つて其代金の支拂は後日に延ばすことを快く承諾する、と云ふやうな意味が先づ最も普通の意味である。それからモ一つの重要な意味は人間の性質に關するものではなく、取引其物の性質に關する意味であつて、代金の授受を後日にして財の移轉を行ふことを云ふので之を信用取引と稱する。經濟學に於て吾人が信用なる語に附する所の觀念は即ち之である、故に信用取引とは將來の決算を以て財を移轉することである。と云ふ定義を下すことが出来る。而して先づ第一に注意を要することは、此所謂信用取引は財の受渡は現在で、それに対する決算は將來であることである。換言すれば、信用には時間的要素が含まれて居るのである。第二に注意すべきは信用取引には一借主の性質及び資産に對する信頼、

(二) 將來之が決算に用ふべき財の能力と安全とに對する信頼とが含まれて居ることである。第三の要件として常に用ひらるるものは借主が貸主に渡す債務の證書であつて、之が即ち信用證券たるべきものである。

信用機關

信用の機關、即ち信用取引が行はれるに必要な機關は二つの部分より成立する、(一)は信用證券、即ち小切手、爲替手形、約束手形、債券等の如き債權を表はす證書、(二)は信用組織であつて、之は主として銀行及び手形交換所の如きものである。

信用證券

一 信用證券 信用證券の内で最も簡單にして且つ最も廣く用ひらるるものは(一)小切手(Check)である。小切手とは個人若くは團體が其小切手の名指人若くは持參人に一定の金額を支拂ふべきことを銀行に命ずる證券である。此小切手には時間的の要素は甚だ少ない、換言すれば此債務は直に決裁さるるもので期限と云ふことが含まれて居ないのである。小切手を受取つた人が之を銀行に持參して金を受取る場合には、先づ大概其金を銀行に預金すると云ふ譯になるから、結局小切手を受取ると小切手其も

のを其儘直に銀行に預金するのである。即ち現金と同様に取扱ふのである。それで此小切手の場合に著しき信用の要素は其小切手が振宛てられて居る銀行によりて支拂はるべき信頼である。

爲替手形

銀行も亦一種の小切手を使用する。一銀行が他銀行に之を振出す場合には、普通に之を(二)ツラフト(Draft)即ち爲替手形と稱するのである。爲替手形のモ一つの種類は、一銀行若くは一會社或は一個人が支拂人に一定金額の支拂を命ずるものである。併し乍ら爲替手形の振出人と支拂人とが異りたる國に住む場合には屢々之をツラフトとは云はないで、ビル・オブ・エクスチェンジ(Bill of exchange)と稱するのである。斯く爲替手形を或はツラフトと稱し或はビル・オブ・エクスチェンジと稱するのであるが、之等の兩語は其使用する場合が甚だ漠然として種々に用ゆるものであるから、讀者はそれを用ひてある文章の前後の關係から之は如何なる場合の爲替手形を指したものであるかを普通に判断しなくてはならぬ。

約束手形

信用證券の第三の種類は(三)約束手形(Promissory note)であつて、之は普通に一定の金

額を定めたる條件の下に、要求次第若くは一定期限の後に支拂ふことを約束するものである。此場合には時間的要素が重要なもので、之がため利子の支拂と云ふことが起つて来る。振出人の性質によりて之を分けると此手形に屬するものが三種となる。(イ)個人若くは團體が発行する約束手形にして要求拂のものもあれば、期限を附したのものもある。(ロ)多くの國々に於て、銀行が発行するもので普通に貨幣として通用し、個人の振出す約束手形とは異りたる法律上の地位を有するもの、例へば合衆國の國立銀行紙幣の如きものである。(ハ)既に紙幣を論じたる際に述べたる如き政府自身が發行する紙幣である。銀行紙幣及び政府紙幣は普通に利子が附かない。

普通の信用證券は貨幣の如く自由に流通するものではなくて、一の取引だけを決裁するを目的とするものである。併し乍ら必ずしも流通しないと云ふ譯ではなくて、小切手若くは爲替手形の如き屢々多くの人の間に轉々するもので、約束手形の如きは動もすれば一回も二回も若くは何回も移轉するものである銀行紙幣及び政府紙幣は同じく約束手形に屬するものであるが、併し乍ら之は貨幣として流通するもので、全く以

上の信用證券とは異つて居る。即ち銀行紙幣及び政府紙幣は(イ)一般の使用を目的とし(ロ)常に持參人拂のもので、(ハ)一定の便利なる金額にて發行し、(ニ)發行者の信用を普通に何人も疑はぬものである。

個人間の信用取引は普通に次の二つの場合の孰れにか屬するものである。(イ)普通に物の買手が賣手に支拂の約束をする場合、(ロ)賣手が買手に向つて爲替手形を振出す場合、若し振出人及び名宛人が同一國內に住居する場合は前に述べたる通り其爲替手形はヅラフトと云ふ、異りたる國に住居する時はビル・オブ・エクスチェンジと云ふ。先づ甲が賣手乙が遠隔地に於ける買手であると想像する。甲が乙に宛てて其債權の全額を自己若くは第三者たる丙に支拂ふべき旨を命ずる。即ち爲替手形で命ずるのである若し乙が其命に接して債務を認め、それを支拂ふことを承認すれば其手形に引受を記入して署名する、之を手形の引受(acceptance)と稱するのである。而して之で初めて其爲替手形は法律上引受人に對して效力を有することになるのである。

小切手及び手形は裏書(Indorsement)によりて其權利を移轉することが出来る。即ち

受取人が其小切手なり約束手形なりの裏面に其指定人に表面の金額を支拂ふべき旨を記入し署名するのである。若し之が不渡になつた場合には此裏書をして讓渡した前の受取人は次の受取人(被裏書人)に對して責任を負はねばならぬ。被裏書人は又順次に裏書人となりて、それを他に讓渡することが出来る、斯る場合には裏書人は順次に被裏書人に對して同様の責任を負ふのである。

現今廣く行はれて居つて、殊に小賣商業に普通である信用の一種に(四)掛信用(Book Credit)と稱するものがある。品物を賣つた場合に代金を後拂にして其高を帳簿に記入して置くのである。若し二人の間に相互に掛取引を行ふ場合には只だ其差額だけを勘定日に現金で決裁するのである。之は小都會などの商人間にはよく行はるることである。

二 信用組織、銀行と手形交換所 銀行業者は信用取引に於ける仲介人であること云ふことは既に述べたのであるが、尙ほ時として信用業者と稱せらるることがある。又實際銀行業者の仕事で信用に關係のないものは殆んど無いと云つてよい位である。

併し乍ら銀行は單に信用の取次機關に過ぎざるものではない。銀行はそれ自身の資本を保證基金として有して居つて、一般顧客の預金を引受くるのである。法律の規定の下に銀行は自己の資本と一般の預金を混ぜ合せて仕舞つて、凡て之に對して隨意の管理を行ふのである。預金者に對しては銀行は債務者であるが、金を貸付けた人々に對しては債權者である。銀行の利益は専ら其有する資本より生ずるものでもなければ、資本より生ずる利益が銀行の主たる利益でもない。つまり其大部分の利益は他から預つた金より生ずるものである。一體に商業銀行は其預金に利子を附せないのもあるし、又利子を附するにしても其利子は銀行の貸出す場合に附する利子に比して頗る低利のものである、従つて預る場合に附する利子と、貸出す場合に附する利子の差がつまり銀行の利益の源泉たるものである。

昔しは合衆國に於ける凡ての銀行は貨幣として一般に通用する紙幣を發行したものである、其當時は實に此紙幣發行は銀行業の主要部分を占めて居つたのであるが、今日に於ては只だ國立銀行のみが紙幣を發行することが出來ると云ふ譯で、之がために國立銀行は紙幣發行權に對する特別の税を課せらるるのみならず、流通紙幣の保證としてワシントンに公債證書を以て預托をしないで居る。殆んど凡ての文明國に於ては紙幣を發行すべき銀行の權利は大に制限される事になつた、而して紙幣發行を爲すことを得る銀行の數は次第々々に減少しつつあるのである。

若し各種の銀行に就て充分に研究し、一々其相違を綿密に論ずることとすれば甚だ多くの紙幣を要することになるから、茲には簡単に述べることとする。(イ)手形及び其他の商業證券を割引し(ロ)預金を預る銀行は、紙幣を發行すると否かを論せず、又法人たると否かを論せず、之を稱して商業銀行と云ふことが出来る。單に銀行と云ふ場合には常に斯る銀行を指すのであつて、正確なる主義から云ふと貯蓄銀行は銀行でない。北米合衆國に於ては普通銀行に三つの種類がある。其第一は國立銀行と稱するもので其數殆んど四千五百に達し、第二は州立銀行で信託會社と合して其數四千五百、第三は個人經營の銀行で約四千位ある。信託會社は近時發達し來りたるもので漸次重要な地位に達しつつあるのであるが、此信託會社は餘り銀行と異なる所がない。事實上多

くの銀行業者の云ふ所によれば、大なる信託會社の營んで居る事業の大部分は全く銀行の業務であるとのことである。此事實は立法者及び行政者の注意せざるべからざる點で現今に於て之等の信託會社は會社組織の銀行の有する特權の大部分を受くるにも拘らず、而も從來の經驗上より銀行に加へ來りたる種々なる制限を受けないのである。過去十年の間に、信託會社は此比較的無責任なる地位に立てる結果よりして大分疑はしき有價證券に投資し、而して不確實なる産業計畫を助長するに至つたのである。故に之等の信託會社に對しては少くとも中央政府の法律を以て國立銀行に對すると同一に嚴格なる監督を加へる必要があるのである。

〔編著者曰く〕 原著には合衆國國立銀行の資産負債表を掲げ之を簡單に説明してあるけれども、之は我國の普通の讀者には餘り必要のないことであるのみならず、却て銀行制度を異にせる我國の普通の讀者に取りては徒らに頭を亂ださしむるに過ぎざるべきを以て、之を省く事とした。

手形交換所 手形交換所は其起原を調べて見ると、時間と勞力とを省くの目的を以て銀行の用人等によりて工夫せられたものである。都市に於ける銀行は常に相互に取引關係を有するもので、即ち銀行の定まりの得意先は其銀行宛に振出されたものであらうがあるまいが、自分の受取つた手形は凡て其取引銀行に預け入るのであるから、各銀行は毎日自分の銀行宛でない他銀行宛の手形を受取ると同時に、他銀行も又同様に斯る手形を受取るのである。そこで往時に於ては之等の勘定を決裁するために各銀行の間を走り廻ると云ふことが必要であつた。所が今日に於ては銀行の代表者が手形交換所に毎日會合し其手形を交換し、只だ交換の差額だけを支拂ふのである。之等の差額は債務者側になつた銀行から手形交換所に支拂ひ、手形交換所は之を債權者側になつた銀行に渡すのである。

手形交換所の統計によると、近世の産業は貨幣のみによりて行はれ得るものでないことが解る。一九〇三年度（九月三十日を以て終る）に於ける合衆國諸市に於ける凡て

の手形交換所の交換總額は千百四十億六千八百八十三萬七千五百六十九弗に達し、一方に一九〇二年の八月一日に於て合衆國の國庫在高の貨幣と全國に流通せる貨幣の總額は銀行紙幣をも合して二十六億九千五百四十四萬百七十四弗であつたから、手形交換高は全國の總貨幣高の約四十倍になるのである。手形交換所の交換差額決裁に必要な實際の貨幣が甚だ僅かであると云ふことも又同様の事實を證明するものである。即ち一九〇三年度（九月三十日を以て終る）に於て、組合銀行數五十六を有するニューヨーク手形交換所の交換高は七百八億三千三百六十五萬五千九百四十弗であつて差額決裁に要したる實際の貨幣高は三十三億千五百五十一萬六千四百八十七弗である。而して平均一日の交換高は二億三千三百萬五千四百四十七弗であつて、毎日の差額決裁に要せし貨幣の平均高は千九百六十三萬四千三百四弗である。従つて差額は總交換高に對する四分六厘八毛に過ぎないのである。

信用の利益

近世産業社會に於ける信用の大なる發達に伴ふ所の利益と弊害とを別々に項を分ちて簡單に茲に説明することとする。

一、信用は大なる金額の支拂及び遠距離間の支拂に際し正貨を用ふるよりも更に完全にして且つ便利なる方法であつて、之がために時間と勞力とを節約するものである。例へば國際貿易に於て、單に差額に對してのみ僅少の正貨を一國より他國に送れば宜しいのである。若しロンドンの商人が棉花輸入のためニューヨークの商人に一千萬圓の債務があるとし、今度は一方にニューヨークの其商人が若くは他の商人が歐州より品物を輸入したるためロンドンに於ける其商人（即ち棉花を買つた商人）若くは他の商人に一千萬圓の債務を生じたとすれば、明かに此兩國間には正貨の授受をする必要はないのである。ロンドンの商人はニューヨークに於ける債務者に對してニューヨークに於ける債權者に支拂を命ずる爲替手形を送ることが出来る。之は債務決裁の最も簡單なる一例であるが、併し乍ら實際上に於ては其方法は之よりも複雑である。尤も基礎となるべき原則には何等異なることはない。例へばニューヨークの商人がロンドンの商人に債務を有し、巴里の商人がニューヨークの商人に債務を有し、ロンドンの商人が巴里の商人に債務を有すると云ふやうな場合に於ても、各債權者及び債務者の爲替

手形を交換して全債務額の大部分は正貨を積送することなくして決裁することが出来る。

二、信用は金銀の代りをするものであるから、資本を節約するものと云はねばならぬ。之がため社會は貴金屬の更に大なる部分を他の必要なる目的に用ふる事が出来るのである。

三、信用は資本の生産力を増すものである。今日の信用組織の下に於ては、資本は有して居るが併し其資本を使用することの出来ないこと云ふやうな人は、其資本を生産的に使用することの出来る人に報酬を得て其資本を廻はしてやる事が出来る。斯ふ云ふことにすれば債権者も債務者も且つ一般經濟界も利益を得るのである。特別の例外を除けば、其資本はそれに対して最も多くの報酬を出す人々に貸付けらるる、従つて普通に之を借入れたる人々は其資本を最も生産的に使用し得る人々でなくてはならぬ。此利益には明かに二つの方面がある。其一は丁度今述べた様に資本は有して居るが併し之を生産的に用ふるの手腕と能力とを有せざる人々は其資本が社會の生産を増

加する方面に用ひらるると同時に又それより利益が生れて来るやうに其資本を處置することが出来る。其二は大なる産業的手腕と才能とを有して居るが、併し資本が足らぬとか或は全く有せないと云ふやうな人々をして社會の幸福を進めると同時に自己の利益を得るために其力を注がしむることが出来るのである。多くの場合に於て、信用は事業力なき資本と資本なき事業力とを結び附けるものである、即ち資本と勤勞とを結合せしむるものである。

四、信用は、例へば貯蓄銀行に於けるが如く、零碎の金額を集めて資本の蓄積を増加せしむるものである。斯る零碎なる金銭も集まれば大なる額になる、此集りたる大なる資本は充分に責任を有する人々の手から株式會社若くは他の生産的事業家に貸付けらるのである。斯ふ云ふ有様で資本はそれ自身に集中して来る、同時に其資本に對する報酬は廣く多數の人々の中に散布せらるのである。更に信用は勤儉を助長することによりて資本の蓄積を増加せしむるものである、其理由は斯る信用組織に於ては人々をして或は不慮の災害に備へ或は老後に備へるがために貯蓄することを得せし

め、且つ其貯蓄を奨励することになるからである。特に貧民階級に資本を供給する組織に關する場合に於て其然るを見るものであつて、家屋を建築するために貧民に資本を供給する米國建物協會の如き其適例である。

信用の弊害

併し乍ら吾人は今日の信用經濟の暗黒面をも看過してはならぬ。信用の弊害の中で其重なるものを擧ぐれば次の通りである。

一、信用は動もすれば濫費を起さしめ其結果として詐僞私消の如き弊害を生ずるものである。大なる信用を有する人々は金錢が自由になるから動もすれば危険なる一足飛びの事をして失敗する、失望の極、何とかして之を彌縫せむがために善からぬ企てをするやうになるのである。

二、信用は危険なる投機を起さしむるものである。一體他人の資本を以て投機でもやらうと云ふやうな人々は普通に不謹慎な人々である。米國の如きは全國を通じて、間違つた不相應の信用を受けた人々が經營を仕損つたボロ事業の殘骸が至る所に横はつて居る。斯の如き種類の事業經營が法外に多くなつて來ると、信用が却つて悲惨な

る恐慌を惹起するの導火線となるのである。

或る學者達は凡ての生産的信用、換言すれば産業を經營するがために用ひらるる凡ての信用は善良なるものであるが、併し乍ら信用の弊害は消費的信用、即ち直接に慾望を満すために金錢を消費するを得せしむる信用より生ずるものであると論じて居る。併し乍ら此區別は餘り確實なものではない、そんなに截然たる區別線は其間に引くことは出来ない。消費的信用は屢々濫費を誘ふものであるが、併し乍ら同時に又多くの青年をして實力を發達せしめ大技術家大學者たらしむることも出来るではないか。然るに又、生産的信用も普通には社會に大なる利益を與ふるものではあるが時として是不才者、無能者、不正直者をして事業を自由にせしむるやうな原因ともなるものである。

吾人は一方に於ては出來得る限り社會をして信用の利益を享けしむるやうに努め、他方に於ては其弊害を最小ならしめることに努めなくてはならぬ。近時大なる産業經營に於て一般の注意が其内容公示に對する要求に向ひ來りたるは右の努力が進み來れ

る喜ぶべき兆候である。斯る公示は前に列擧したる所の信用の最も著しき一般的弊害を除去するを得るであらう。

〔補論〕 小切手、爲替手形、約束手形が今日信用證券として甚だ重要なものであることは人の知る通りである。我商法に於ては手形編なる一編を設けて之等に關して詳細に規定して居る。爲替手形が國際間に跨る場合には國際爲替若くは外國爲替と稱するから、本文に述べてあるやうな用語の混同は我國に於ては無論起らない。次に日本銀行兌換券の如きは其性質から云ふと一覽拂の約束手形たるべきものであるが、之は特別の規定の下に貨幣として通用するもので、我商法上の約束手形ではない、本文に於ける約束手形の種類の内、(イ)が即ち一般に約束手形と稱せらるるもので我商法上の約束手形も之である。

銀行に關する本文の説明は米國の銀行に就ての説明であるから、讀者は其考で讀まなくてはならぬ。我國に於ても、米國の制に倣ひて多くの國立銀行を設け、之等に紙

幣を發行せしめたこともあるが、前に述べたる如く今日に於ては紙幣を發行する銀行は中央銀行たる日本銀行のみである。

我國の銀行は先づ中央銀行として(一)日本銀行がある。(二)主として農業の機關として日本勸業銀行、農工銀行等がある。(三)主として工業の機關として日本興業銀行がある。(四)主として外國貿易、外國爲替の機關として横濱正金銀行がある。(五)主として商業の機關として普通銀行がある。(六)零碎なる貯蓄を蒐集する貯蓄銀行がある。

右の内(五)を除いては何れも特種の條例に依る特種の銀行であつて、一般信用機關としての銀行は(五)のみである。數の上から云つても一番多い。即ち大正三年十月末の調査によれば、全國に於ける銀行總數二千百六十九行の内、普通銀行の數は千四百五十八行で、つまり六割五分強に當るのである。

我國の普通銀行は近時大に發達して來たのであるが、併し乍ら信用機關としての活動は歐米諸國の銀行に比して遺憾ながら甚だ物足らぬ感がある。之は要するに我國の經濟界が信用を重ずるの程度が低いたためであつて、今日の實際に就て之を見るに本當

に銀行を利用して其便利を受け得るものは甚だ少ない、大多數の實業家は少しも銀行を利用することが出来ないやうな有様である。手形の割引などは甚だ少ない、即ち銀行は大なる信用を有する振出人の手形でなくては割引しない。従つて一般の實業家は銀行から資金の融通を受けることが出来ないから遂に不健全なる金融業者に走りて驚くべき高利の資金を使用して居るものが甚だ多い。近年全國至る所に如何はしき信託會社や貯金會社が盛んに出來て、從來の所謂高利貸と共に盛んに高利の金を貸付け暴利を貪つて居るのを見ても此邊の事情は明かに解る。近來悪い性質のビルブローカーが殖えて來たのも同一の理由に基くもので、銀行より手形の割引を受け得ない商工業者の手形を驚くべき高き割引歩合を以て割引し、遂に斯る悪ブローカーの手中に陥りたるものは如何ともする能はざる窮地に陥る場合が甚だ多い。之等は我經濟界の發達上甚だ憂ふべき現象である。併し乍ら銀行が信用機關として充分に活動しないのは決して銀行のみの罪ではない、結局は一般の商工業者が信用を重んぜざるが爲であつて、眞に銀行を利用して其利便を受けむとするには、ドウしても一般商工業者が信用を重

んするやうにならなくてはならぬ。手形の不渡などをドシドシやつて平氣で居るやうなことでは銀行も中々手を出す譯には行かぬに相違ない。

我國の信託會社は本文に説明してある米國の信託會社よりも、まだ酷ひものばかりである。堅實なる信託業を營んで居る會社は幾つもあるまい。大多數は高利貸を目的とするものであると云つてよい。之は貯金會社と共に大なる害毒を世に流して居るのであるが、之等に對する取締が近時次第に嚴格に赴きつつあるは喜ぶべきことである。

次に參考のため、東京、大阪、京都、横濱、神戸、名古屋、廣島、關門（下ノ關、門司の聯合）、金澤、函館の十ヶ所の手形交換所が大正三年中に交換した手形金額を示せば、總計百〇二億二千二百七十二萬三千二百六圓であつて、大正三年十二月末の通貨の高は、正貨一億七千五百五十二萬六千七百七十九圓四十錢二厘、兌換銀行券三億八千五百五十八萬九千〇九十六圓、合計五億五千七百一十一萬五千二百七十五圓四十錢二厘である。

第六章 國際貿易

財の移動、即ち交換の部を終るに當つて、國際貿易 (International Trade) に就て稍々詳しく研究する必要がある。凡そ何れの國民でもそれ自身孤立して存在することは出来ない。世の中が進むに従つて商業は次第々々に狭き地方的の限界から脱して漸次世界的に其範圍を擴め來つたのである。國際貿易は結局煎じ詰めて見ると、常に二人の個人間に於ける商業であつて、而も多くの點に於て一社會若くは一國內に於ける個人間の商業と全く相等しいものである。併し乍ら狭き範圍内に於ける商業若くは一政治的單位内に於ける商業と國際貿易が根本的に異つて居る諸種の點がある。之等に就ては特別の研究を必要とするのである。

本章に於ては先づ第一に國際貿易の性質を論じ、次に普通に關稅の形式に於て國民が國際貿易に課する制限を論じて章を結ぶこととする。

國內商業
と國際貿易

第一節 國際貿易の性質

貨幣と財
との交換

貨幣と財との交換 一國に於ける一個人が他國に於ける一個人に財を賣る場合に常に同一國內に於ける他の個人に財を賣る場合のやうに貨幣と交換に財を賣るのである。併し乍ら無數の賣買より生ずる各取引者の支拂に就て貨幣を相互の間に受授することこの困難と危険よりして、斯る取引の大部分を全く貨幣を用ることなくして決算すべき大銀行の組織が發達し來つたのである。國際爲替の組立は前に既に説明した所の手形交換所の組立と全く相類するものである。例へば米國の輸出業者が英國の輸入業者に商品を送る場合に就て之を云へば、此支拂を爲す方法は二つある。最も普通に行はれる方法は輸出業者が輸入業者に向つて其金額の爲替手形を振出すのである。換言すれば輸出業者が輸入業者に對して手形表面の金額を一定の場所に於て支拂ふべき旨を要求するのである。此爲替手形を商品の船荷證券及び他の關係書類に附して輸出業

者が之を銀行に賣るのである。銀行は斯くて英國に於て支拂はるべき一定金額を受取るべき権利を買ふこととなるのである。次に斯る取引を決裁するモ一つの方法は、英國の輸入業者が英國の銀行に行つて米國の輸出業者を受取人として米國の銀行宛に爲替手形を振出して貰つて、それを買ふのである、即ち一定の金額を英國の銀行に拂つて米國の輸出業者を受取人とする米國の銀行宛の爲替手形を英國の銀行に振出して貰ふのである。以上二つの場合に於て若し取引がそれ一つだけであるとするれば何れの場合に於ても貨幣は代金支拂のために大洋を越えねばならぬのであるが、併し乍ら實際上に於ては英國の輸出業は同時に米國の輸入業者に商品を積送すると云ふ様に米國の輸入業者に債権を有することが出来る。若し一方の債権が他方の債権と相等しとすれば之等を集めて決裁すると貨幣を送る必要は起らないのは明かである。國際貿易に於て銀行の行ふ任務は即ち斯ふ云ふ決裁に關することである。即ち銀行は輸出業者の振出したる爲替手形を買ひ、輸入業者に爲替手形を作つて賣るのである。

吾人は今單に二國間に貿易が行はれた場合を假定したのであるが、更に進んで數國

間若くは凡ての國の間に行はれる場合を考へて見ても矢張り同じことで、只だ複雑の程度が増すだけのことである。例へば若しニューヨークに於けるAがロンドンに於けるBに或金額の債務を有し、同時にロンドンに於けるCは巴里に於けるDに同額の債務を有し、而して巴里に於けるEはニューヨークに於けるFに同額の債務を有するとすれば、凡ての債務は少しも貨幣の遣り取りをしないで決裁することが出来るのは明かである。

爲替相場

爲替相場 英國の二磅金貨は米國の四弗八六六に相當する。故に上の場合に於て若し銀行が其の取扱に手数料を取らないとすれば、ニューヨークとロンドンとの間に於ける爲替相場は四弗八六六に對する一磅であつて之を平價の相場と云ふ。然るに爲替相場は常に平價の上下に變動するものである今其原因に就て觀察しよう。

貿易の差額

貿易の差額 國際爲替に關係を有する取引が單に商品の輸出入のみであると暫く假定して、或時に於て一國、例へば米國が、英國に輸出する高よりも多くの高を英國より輸入するものとすれば、其時に於ける貿易の差額は米國に「逆」(即ち米國が債務者

の地位に立つ事である。斯る場合に於ては、ニューヨークの銀行ではロンドンに取組む爲替手形の需要が多くてロンドン振宛の爲替手形の供給が少ない。之に反して、ロンドンの銀行ではニューヨーク振宛の爲替手形の供給が多くてニューヨークに取組む爲替手形の需要が少ないのである。

併し乍ら兩地に於ける銀行の目的は支拂に正貨を用ひずして振宛の爲替手形と取組の爲替手形との差引をするに仕るからして、ニューヨークの銀行はロンドンに取組む爲替手形の相場を高めて其需要を抑制せむとし、同時にロンドン振宛爲替手形の相場を高めて其供給を誘はむとするのである。ロンドンの銀行に於ては、ニューヨーク振宛爲替手形の供給が多いから其相場は下り、ニューヨークに取組む爲替手形の需要が少いから其相場も亦下るであらう。爲替相場は此場合に於てニューヨークに「逆」であつて、ロンドンに「順」である云ふのである。斯る場合に於てはニューヨークの商人はロンドンに對する一磅の債務を償却するためには四弗八六六より以上を出して爲替手形を買はなくてはならぬことになつて来る、換言すれば打歩を支拂はねばならぬの

である。同時にロンドンの債務者はニューヨークに有する債務を四弗八六六に對して一磅より少ない金を以て償却することが出来るのである。

正貨輸出

正貨輸出點

ニューヨークの銀行業者もロンドンの銀行業者も、普通に債務者が銀行より爲替手形を買入るるよりも自ら正金若くは地金を送附する方が利益になるやうな點まで爲替の相場を變動させることはない。爲替相場の變動には餘程狭い制限があるのである。銀行それ自身は自然貨幣の積送上最大の利便を有して居る、そこで爲替相場が上つたり下つたりするに當りて貿易の差額を決裁するために正貨を積み送る方が銀行に取りて利益である云ふ點がある。此點を稱して正貨輸出點と云ふのである。銀行の積送費が運賃、保險、荷造、利子の損失等を一緒にして平均積送費が英貨一磅に付き今日約二仙であるからして英米兩國の爲替に於ける正貨輸出點は約四弗八四六と四弗八八六に在るのである。換言すれば爲替相場が四弗八八六以上に上る時は正貨が米國より英國に向つて流出し初め、四弗八四六以下に下る時には英國から米國に向つて流出し始むるのである。

諸君に再び注意して置くが、以上了解を容易ならしむるために英米二國間の貿易に就てのみ假定したものである。一般に國際貿易の場合を取りて説明すれば甚だ複雑であつて簡単に説明することは出来なくなる。そこで簡単に云へば、ニューヨーク及びロンドン間に於ける爲替相場、ロンドン及び巴里間の爲替相場、巴里及び伯林間の爲替相場等は二國の間の貿易高と貿易差額によりて影響を受くるのみならず、他國間の爲替貿易に於ける貿易高及び貿易差額の順逆によりて影響を受くるものである。

正貨輸出の制限

爲替相場の動搖と正貨の輸出とに對するモ一つの自然的の制限がある。其一般的法則は何れも貴金屬鑛を有せない二國の場合を想像すれば解るのである。今斯る二國間の取引が相互に財の賣買にのみ限られて居る場合を假定せよ。然らば一定の時期に於ける貿易の差額が一國若くは他國に取りて逆となる場合には如何なることが生ずるか。爲替相場が正貨輸出點に達して其點を越えんと正貨の積送は大きな輸入國たるAから大なる輸出國たるBに向つて始まつて来る。若し他の産業的條件に變動がないとすれば、A國には前よりも金が少なくなつて来るから一般に物價が

安くなつて来る。然るにB國は金が多くなつて来るから物價が高くなつて来る。其結果として、A國は直に前よりも強き賣手で前よりも弱き買手の國となり、同時にB國は之に反して前よりも強き買手で弱き賣手の國となる。従つてB國はA國よりの輸入高を増し、それに對する輸出高を減するから茲に貿易關係は調和して以前の地位に復し正貨の積送が止まつて来る、其結果として爲替相場は再び平價に近くこととなるであらう。

實際の状態は之よりも尙ほ甚だ複雑なものである。貿易は單に二國間にのみ限るものでない。且つ國際貿易差額は財の交換のみによりて定まるものではなく他の色々な關係も加はるものである。異りたる國民の有する各通貨は凡ての場合に於て同等の確實と信用とを有するものではない、多くの國民はそれ自身金の生産者で又金の輸出者である。而も吾人が上に述べたる如き自然的原因の作用によりて、一國民の世界各國民に對して有する債務と世界各國が其國民に對して有する債務とは結局相決裁さるるの強き傾向を有して居ることは眞理である。而して貨幣金屬は其貨幣としての必要に

應して各國民の間に分配されるものである。

國際價值　國際貿易に於て交換される所の財の價值は、價值の章に於て説明した所の根本的原則と同じ原則によりて定まるものである。併し乍ら之等の價值は、勞働及び資本が一國內の各部分に轉々移轉するやうに國際間には斯く自由に移轉するものでないと云ふ事實によりて特に影響を受くるものである。

今相互に貿易を始めむとする二國の内の一方の國が、原料棉と絹製品とを夫れ一ポンド十五仙と一ヤード五十仙の生産費によりて生産し、他の國の方は同一の品を夫れ一ポンド十仙と一ヤード七十五仙で生産することが出来ること云ふ事實があるを想像する。然る時は交換される物品が之等の二つのみであるものとし、又運送費を計算に入れないで考へて見れば、次の如き結果になることを想像し得るのである。即ち絹は第一の國から第二の國に棉と交換に輸出せられるであらう。而して絹の價格は五十仙より七十五仙までの間に於て或一點に定まり、棉の價格は十仙から十五仙までの間の或一點に定まるであらう。各々の場合に於ける精確なる價格は結局交換される

絹と綿との總價值が相等しくなるやうに定まるであらう。若し然らずとすれば、例へば第一の國から一百万弗の絹が輸出され、而して僅かに五十萬弗の棉が其代りに輸入される場合には、先づ第一に其差額は金貨にて支拂はねばならぬ。然るに第二の國から斯く金貨が流出すると國內の物價は下落して仕舞つて、更に絹を輸入することは困難になつて来る。而して第一の國には金貨流入のために物價が高くなつて來て其國に棉の輸入を助長せしむることとなつて、此趨勢は一の平衡が成り立つまで續くに相違ないのである。

若し一國が凡ての物品の生産に比較的大なる自然の便益を有する場合ですら、尙ほ貿易は國際の間に行はれるものである。何となれば、自然の便益が最も卓越して居る物品の生産に努力を集中すると云ふことが最も經濟的に其慾望を充足し得るからである。之は個人の場合に於ても同じことで、若し或人が法律家としての勤勞が其人には最も秀でて居つて一時間に十弗の報酬を得るやうな手腕を持つて居るとする。然るに其人が法律事務に努力する時間を割いてタイプライターを自ら打つとすれば、ヨシ其

人のタイプライターを打つ手腕が一日四弗で雇入れることの出来るタイピストの手腕よりも優れて居るにしても、それは其人自身から云つても社會から云つても、甚だ大なる損失となるに相違ない。此原則を看過すると力働ある人も其功率を減するものである。

國際貿易の利益 貿易利順説なる古い説があつて、國際貿易の利益は輸出が輸入に超過して其差額として金と云ふ寶を得るに在りと唱へられたものである。此觀念は二人間の取引に於て他の損失によりてのみ一方が利益を得ることが出来ること云ふ古き意見と毫も異なる所のないものである。今日に於ては、各國は他國の生産品を買入ることのみによりて自國の生産品を賣ることが出来るものであつて、且つ輸出超過が續くと其國に於ける物價が高くなつて來て自然と其趨勢が變じて來るものであること云ふことを一般に認めらるるに至つたのである。そこで國際貿易の實際の利益は(一)自國に生産せざる財を消費することが出来る事(二)各國は各自に比較的最大の利便を有する生産に資本と勞働とを注ぐことによりて最も大なる利益を得ることが出来ることである。

る。

第二節 國際貿易上の制限

制限の目的 現今に於ては何れの國家でも國際貿易の上に制限を加へるを常として居るのであるが、今斯る制限に關する歴史を調べて見ると、之を加へるに少くとも四つの目的があることが解るのである。先づ第一に(一)古代に於けるギリシヤ人やヘブリユ人の如きは他人と接觸するを怖れた。そこで斯る他國人との接觸を防かむがために國際貿易の上に制限を加へむと努めたものである。第二は(二)國際貿易を歳入の財源とするの目的を以て制限を加へむとするもので、之は最も普通に採用せられたる目的で之がため屢々輸出入に重税を課すると云ふこともあつたのである。今日英國に於ては輸入のみに課税して居るのであるが、其課税は専ら出來得る限り多くの歳入を得るの目的を以て徵收されて居るのである。第三に(三)夫の所謂貿易利順説によつて貴金屬の供給を得ると云ふ目的を以て關税を課したことが屢々ある。今日に於ては文明國で